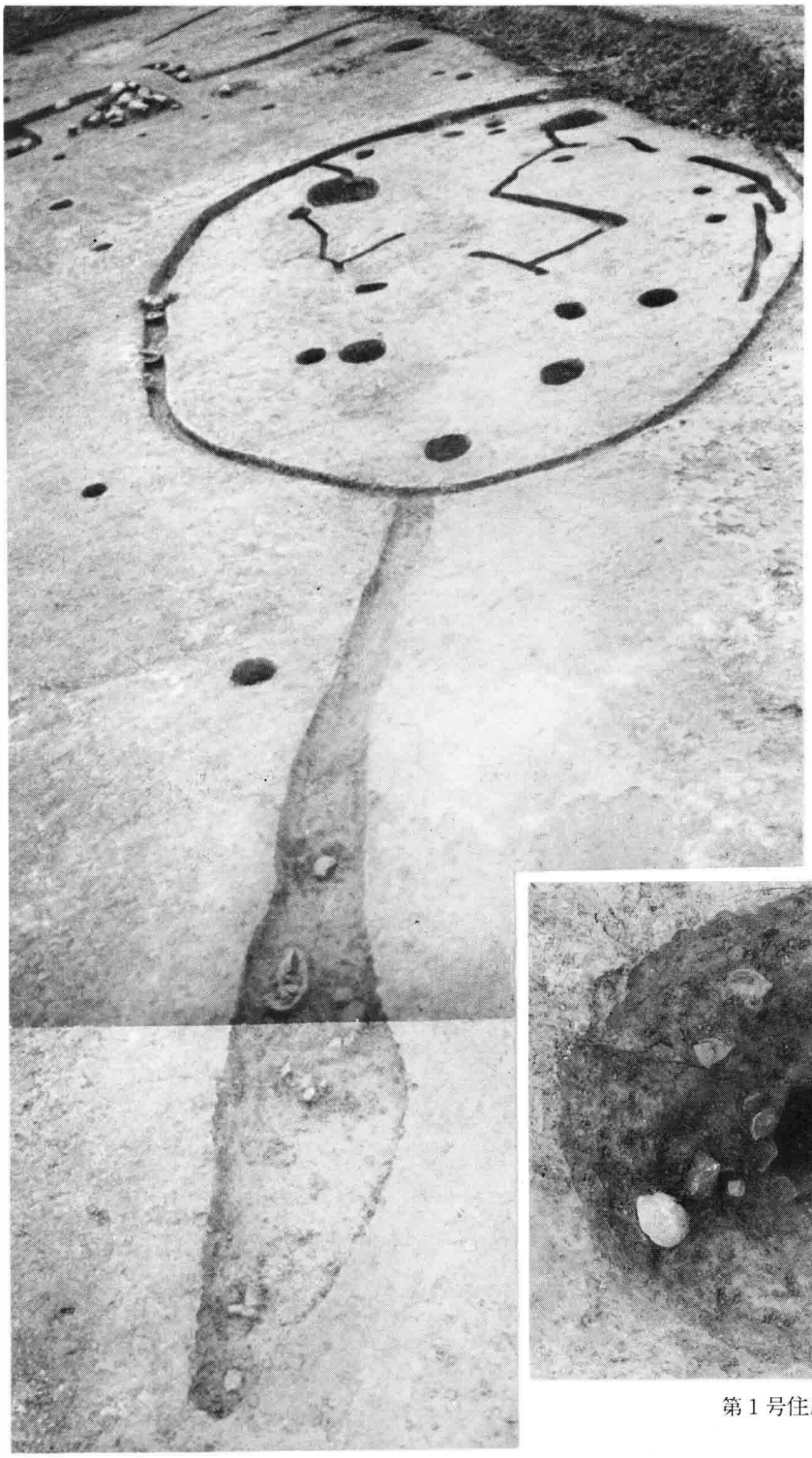
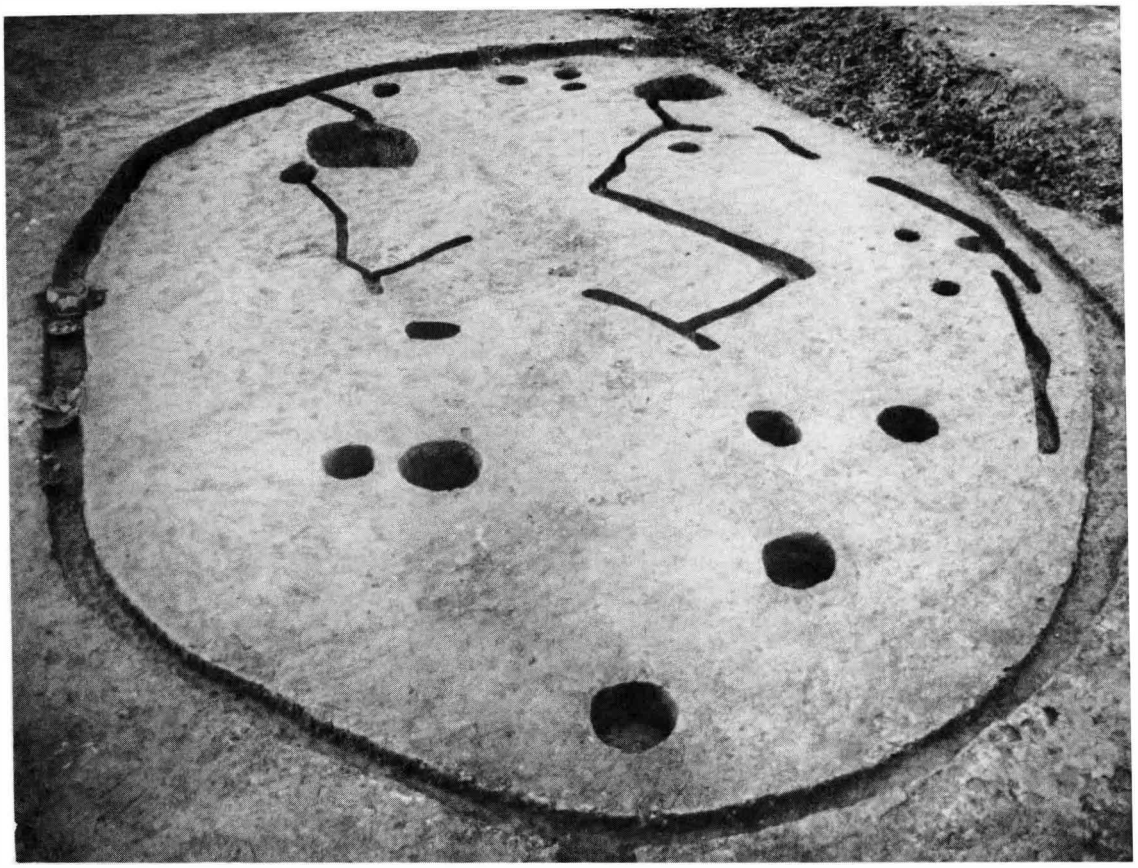
第五図版　第二号住居址・溝址二・第一号住居址炉



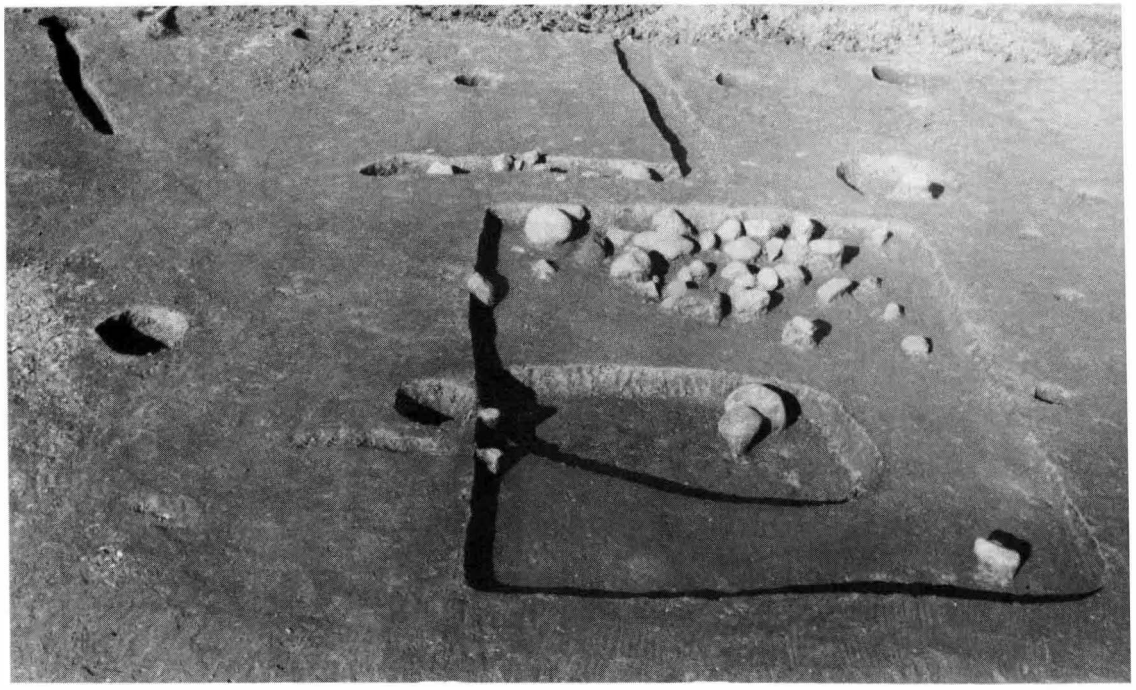
第２号住居址・溝址２

第１号住居址炉

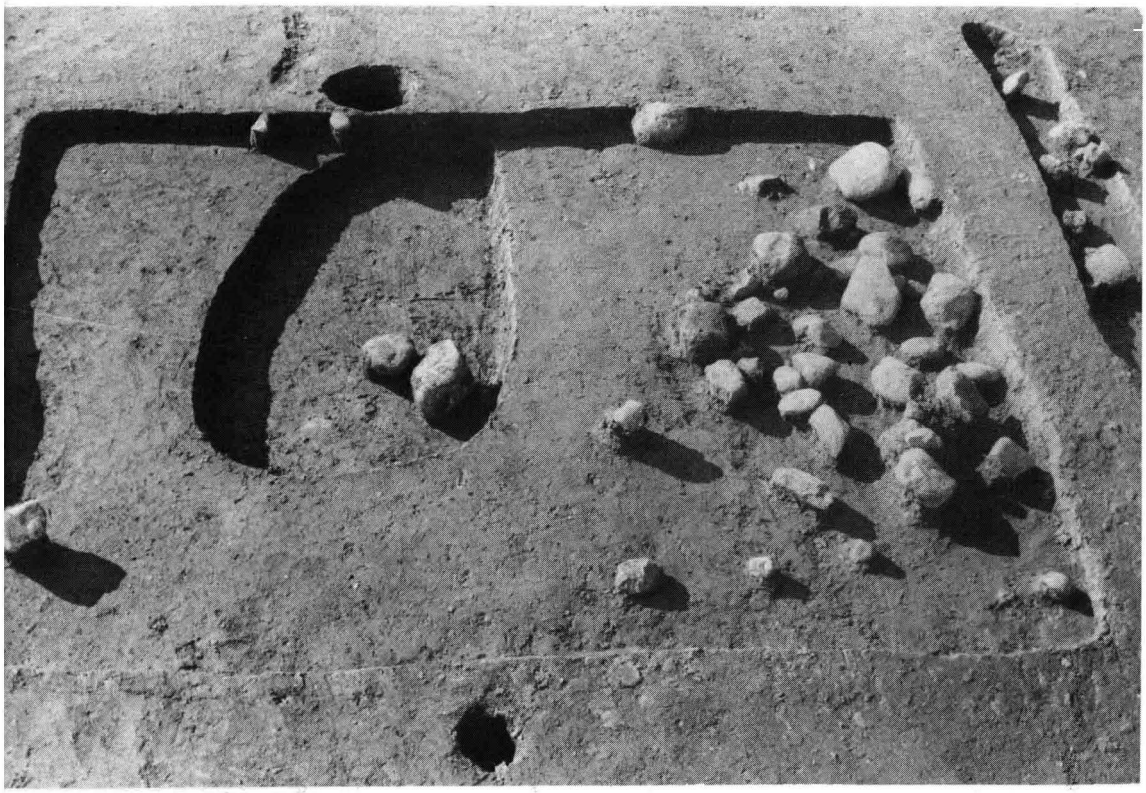
第六図版　第二号・三号住居址・溝址二・土坑五



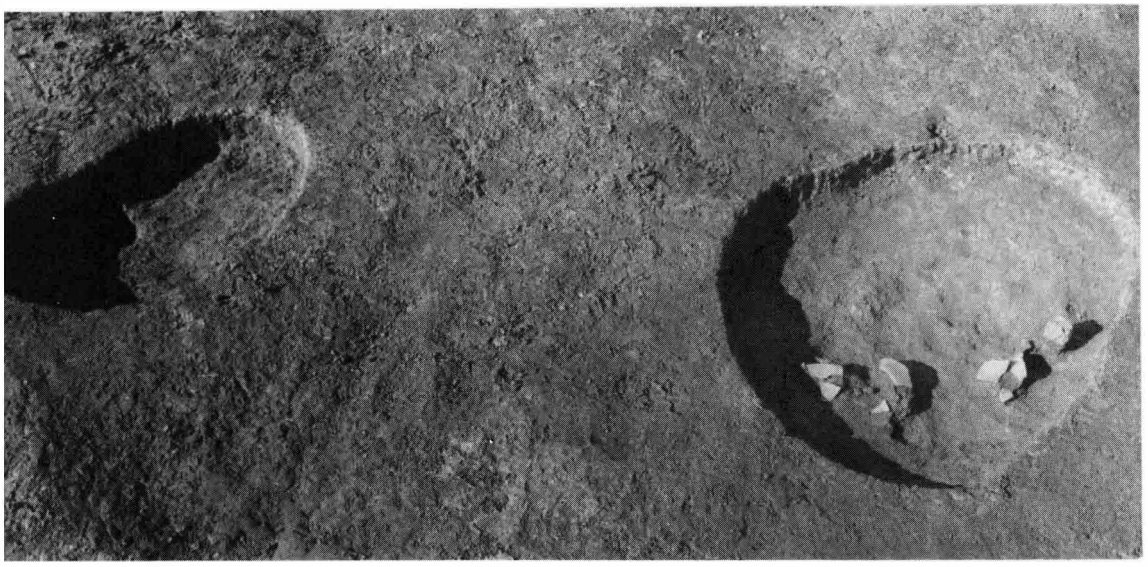
第２号住居址



第３号住居址・溝址２・土坑５



第３号住居址・土坑５



土坑１・２

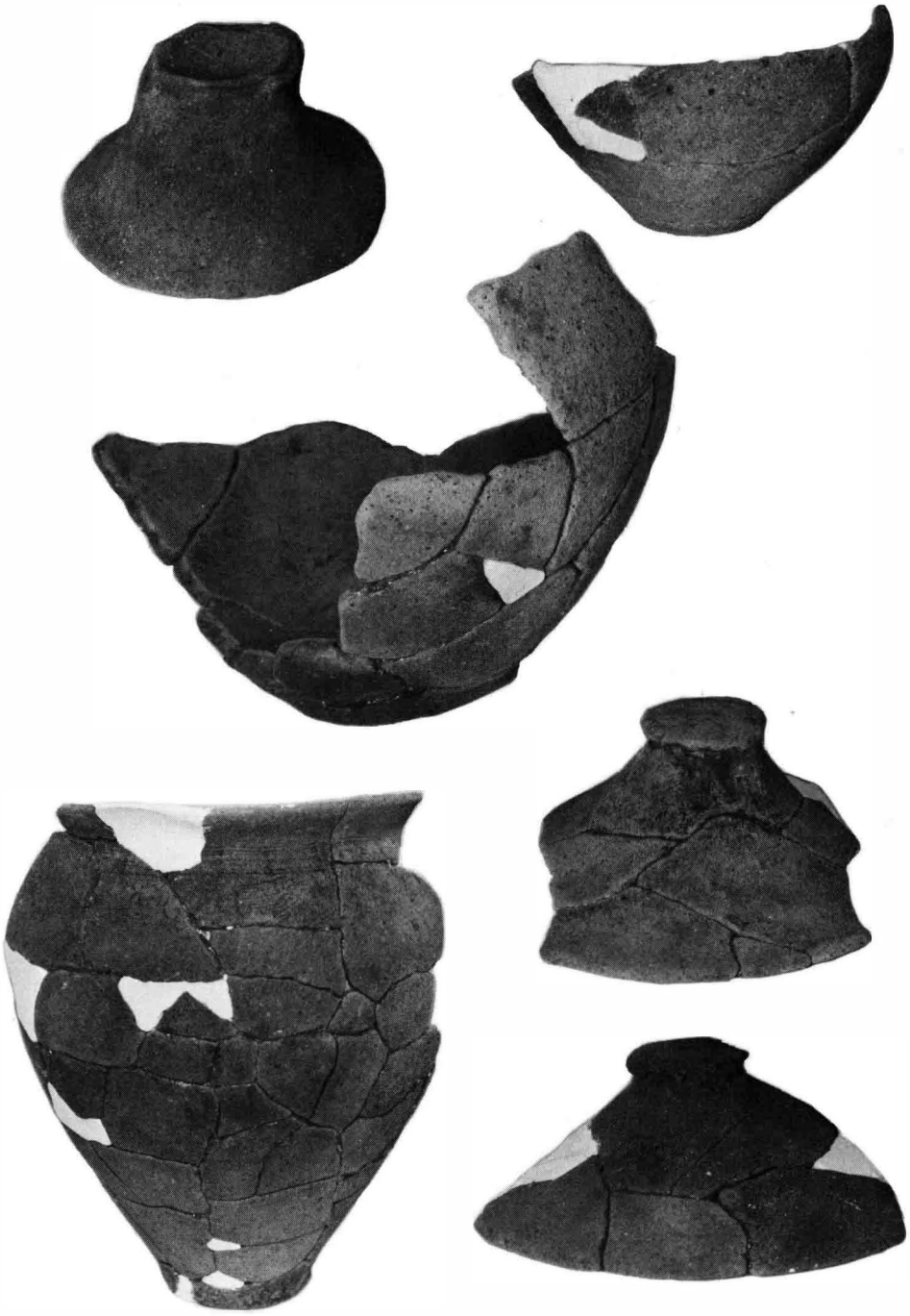
土坑1

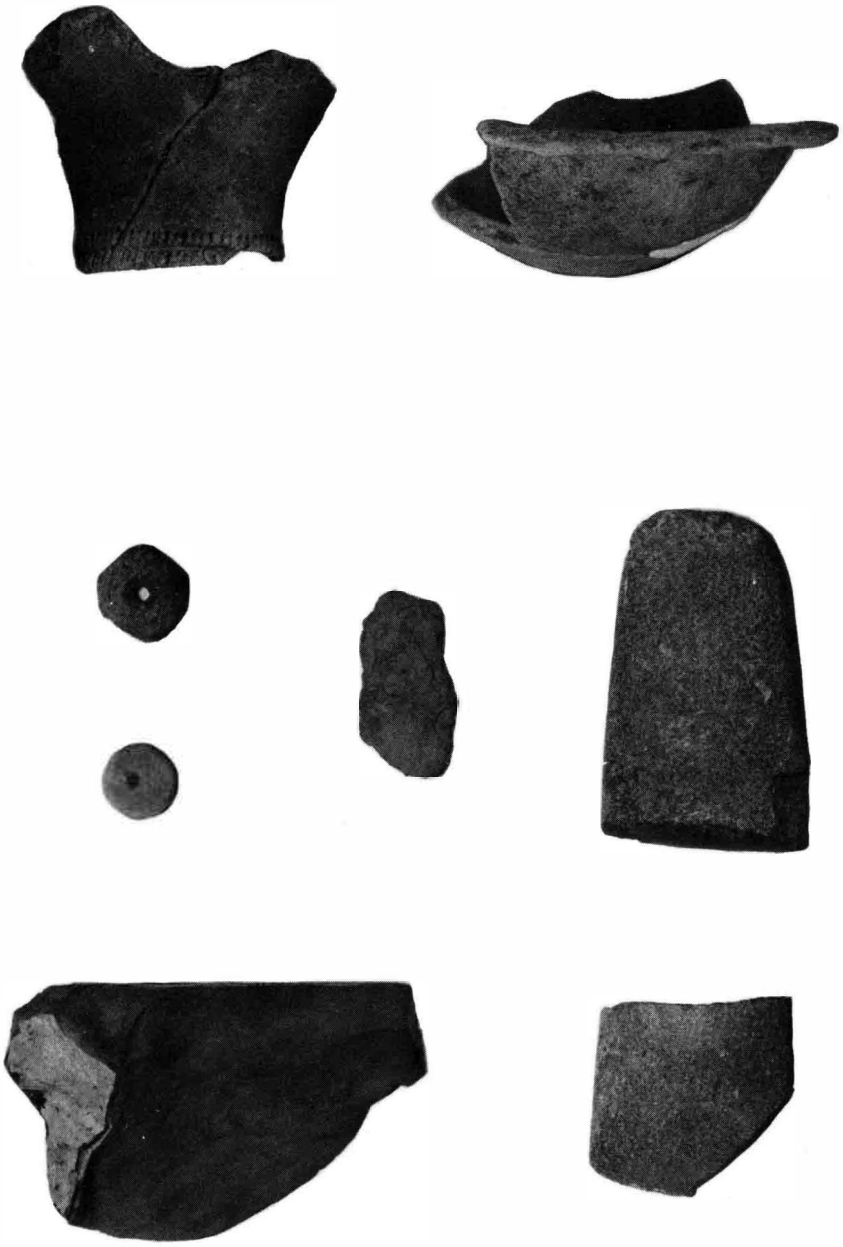
土坑4

土坑６・７・溝址３（東より）

同上（南より）

第一〇図版　第一・二号住居址出土土器





第一一図版　第一号住居址・遺構外出土遺物

第一二図版　調査スナップ

第一三図版　調査スナップ

塩崎遺跡群

――塩崎小学校地点遺跡第３次調査報告――

「専司」刻字土器

「専司」刻字土器

第１次調査において柱穴群検出中に発見された須恵器高台付坏形土器である。底部はロクロによるヘラケズリ後、高台を付けたもので、底面は高台より張り出している。２点発見されたが、１点の底面には「専司」と読める文字が刻み込まれている。もう１点も書体が若干異なるが「専」の字が読み取れ、本来同様な刻字土器であったと思われる。柱穴群に伴なうものとすれば、奈良時代における地方役所の存在も推定される貴重な資料である。

例　　言

1　本書は長野市・長野市教育委員会と長野市遺跡調査会との埋蔵文化財包蔵地発掘調査契約書に基づいた緊急発掘調査報告書である。

2　本書は調査の性格から、それにより検出された遺構・遺物を主に提示することを主眼においた。尚遺物の計測等の詳細は、本文末に表にして記した。

3　遺構図は、調査員全員があたり、主として小林（秀）が整図、再修正を行った。

4　遺物の復元等の作業は青木（和）を中心に奈須野・青木（一）・森嶋（乃）が主としてあたり、図化にたいしては、竹内・石上・直井・小林があたり、整図は石上・直井が行なった。

5　遺構写真は矢口が主として行い、遺物は竹内が担当した。

6　土器拓影は奈須野が担当した。

7　各章・節・目の執筆は、各調査員の担当遺構カードを基礎に、調査員協議のもとに行い、文責を文末に記した。

8　出土図示土器一覧表の作成にあたっては、弥生時代土器を青木（和）が、他時代を直井が作成した。

9　遺物や調査によって得た諸記録は、個人記録をのぞいて、長野市教育委員会で保管している。

10　本書の編集・印刷関係の業務は長野市教育委員会が担当した。

本　文　目　次

例　　言

第１章　発掘調査の経過……1

第１節　発掘調査に至る経過……1
第２節　調査日誌……1
第３節　調査会（団）の編成……2

第２章　遺構と遺物……5

第１節　住居址……5
1　第59号住居址……5
2　第60号住居址……7
3　第61号住居址……8
4　第62号住居址……9
5　第63号住居址……11
6　第64号住居址……11
7　第65号住居址……12
8　第66号住居址……13
9　第67号住居址……15
10　第68号住居址……17
11　第69号住居址……18
12　第70号住居址……18
13　第71号位居址……20
14　第72号住居址……22
15　第73号住居址……23
16　第74号住居址……24
17　第75号住居址……24
18　第76号住居址……26
19　第77号住居址……26
20　第78号住居址……27

21　第79号住居址……27
22　第80号住居址……29
23　第81号住居址……29
24　第82号住居址……30
25　第83号住居址……31
26　第84号住居址……33
27　第85号住居址……37
28　第86号住居址……38

第2節　柱穴群……39
1　第1号建物址……39
2　第2号建物址……39
3　第3号建物址……39
4　その他の柱穴群……42

第3節　井戸状遺構……42
1　井戸址1……42
2　井戸址2……42
3　井戸址3……44
4　井戸址4……44

第4節　溝状遺構……44
1　溝址2……44
2　溝址3……46
3　溝址4……46
4　溝址5……46

第5節　その他の遺物……46

第3章　結　　語……50

挿　図　目　次

第１図　第３次調査遺構分布図…… 2
第２図　第59号住居址・井戸址１実測図…… 5
第３図　第59号住居址出土土器・土製品…… 6
第４図　第60号住居址実測図…… 7
第５図　第60号住居址出土土器…… 7
第６図　第61・78号住居址実測図…… 8
第７図　第61号住居址出土土器…… 9
第８図　第62号住居址実測図…… 10
第９図　第62～65号住居址出土土器…… 10
第10図　第63号住居址実測図…… 11
第11図　第64号住居址実測図…… 12
第12図　第65号住居址実測図…… 13
第13図　第66号住居址実測図…… 14
第14図　第66号住居址出土土器…… 14
第15図　第67号住居址実測図…… 15
第16図　第67号住居址出土土器…… 16
第17図　第68号住居址実測図…… 17
第18図　第68号住居址出土土器拓影…… 17
第19図　第69号住居址実測図…… 18
第20図　第70号住居址実測図…… 19
第21図　第71号住居址実測図…… 19
第22図　第71号住居址出土土器（１）…… 20
第23図　第71号住居址出土土器（２）…… 21
第24図　第72号住居址実測図…… 22
第25図　第72号住居址出土土器・石器…… 22
第26図　第73号住居址出土土器…… 23
第27図　第73号住居址実測図…… 23
第28図　第74号住居址実測図…… 24
第29図　第75号住居址出土土器…… 24
第30図　第75号住居址・井戸址３・溝址５実測図…… 25
第31図　第76・80号住居址実測図…… 25
第32図　第76～78号住居址出土土器…… 26

第33図　第77号住居址実測図……27
第34図　第79号住居址実測図……28
第35図　第79号住居址出土土器拓影……28
第36図　第79号住居址出土石器……28
第37図　第81号住居址実測図……29
第38図　第81号住居址出土土器……30
第39図　第82号住居址実測図……31
第40図　第82号住居址出土石器……32
第41図　第82号住居址出土土器……33
第42図　第83号住居址実測図……34
第43図　第83号住居址出土土器拓影……34
第44図　第84号住居址実測図……35
第45図　第84号住居址出土土器・拓影……36
第46図　第85号住居址実測図……37
第47図　第85号住居址出土石器・土器……38
第48図　第86号住居址出土土器……39
第49図　第１号建物址実測図……40
第50図　第２号建物址実測図……40
第51図　第３号建物址実測図……41
第52図　その他の柱穴群実測図（１）……41
第53図　その他の柱穴群実測図（２）……42
第54図　井戸址２・４実測図……43
第55図　井戸址２・４出土土器……43
第56図　井戸址２・３出土土器拓影……44
第57図　溝址２・３実測図……45
第58図　溝址２出土土器……45
第59図　溝址４実測図……46
第60図　その他の出土土器・石器・鉄器……47
第61図　その他の出土土器拓影……48
第62図　調査地西端土層図（第86号住居址付近）……49

付　表　目　次

第１表　出土図示土器一覧書……62

図 版 目 次

第 1 図版　第 3 次調査遺構分布状態
第 2 図版　第59・60号住居址・井戸址 1
第 3 図版　第61・63・78号住居址
第 4 図版　第64～66・76・80号住居址
第 5 図版　第67・68号住居址
第 6 図版　第69・70号住居址・第 1 号建物址
第 7 図版　第71・72号住居址
第 8 図版　第73・77・83号住居址
第 9 図版　第76・79・80号住居址・第 2 号建物址
第10図版　第82・84号住居址
第11図版　第85号住居址・第 2 ・ 3 号建物址
第12図版　溝址 2
第13図版　溝址 3 ・井戸址 3 ・ 4 ・第75号住居址
第14図版　第59～63号住居址出土土器
第15図版　第64・65・67号住居址出土土器
第16図版　第71号住居址出土土器
第17図版　第72・77号住居址出土土器
第18図版　第82・84号住居址出土土器
第19図版　第84号住居址・溝址 2 出土土器及び第59号住居址出土製品
第20図版　第59・72・79・82・85号住居址出土石器
第21図版　包含層出土石器・鉄器及び井戸址 2 出土木片
第22図版　調査スナップ
第23図版　調査スナップ

第１章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査に至る経過

昭和52年度より３ヶ年計画で実施してきた塩崎小学校校舎改築事業は、本年度で完了する運びとなった。本年度は学校敷地西側の管理棟の計画がされていたので、校舎改築に伴う破壊から遺跡を保護するため、前回と同様な方法により発掘調査を実施し、記録として保存する手段を講ずる必要があった。そのため事業実施の学校施設課と調査期日・期間・面積等の協議を重ね、旧校舎解体及び他遺跡の調査期日のかねあいをみ、６月28日から15日間の予定で面積約 780㎡を本格的調査を実施することになった。第１・２次の調査経験から調査地全面に遺構の存在が予想することができるので、機械力により、校舎解体後全面の表土を除去することにし、請負業者柳原・笠井建設共同体に依頼する一方、事務局は調査団の編成・調査器材の調達等を行なった。この間ＰＴＡ会長及び役員の皆さんのてをわずらわせて、この調査への参加者の編成作業が行なわれていた。

第２節　調査日誌

５月26日　本日より西側から表土除去作業を行う。この作業は30日まで続く。機器材の調整と搬入を行う。

５月27日　一時降雨の中で遺構検出を行う。

５月28日　結団式を行い、本日より人力により残土処理を行うも、昨日の雨で土が重い。

５月29日　残土処理を続ける一方、遺構プランの追求を行う。

５月30日～31日　昨日と同様作業を行う一方、西端に位置する第66号住居址から遺構の検出を開始する。

６月１日　昨日と同様作業をする。第59号住居址の調査を開始する。完形に近い須恵器坩・土師器把手付甕形土器が出土した。

６月２日　第66・59号住居址の調査を続ける一方、第60・61・62・63号住居址のプラン追求と調査を開始する。第59号住居址内に井戸址１があり一緒に掘り進める。第66号住居址の精査後写真撮影・実測を行う。

６月３日　新しく第64号住居址及び第１号柱穴配列址（建物址以下同じ）の調査にかかる他は昨日と同遺構の調査である。第60・63・64号住居址の写真撮影・実測作業を行う。

６月４日　第65・67・69号住居址、井戸址２、第２・３号柱穴配列址及び周辺の柱穴のプラ

ン追求と、それがすみ次第調査にかかる。第59・61・62号住居址、井戸址１の精査後写真撮影・実測作業を行う。

６月５日　昨日と同様作業を行う。第65・67号住居址及び第１号柱穴配列址を完掘する。第２・３号配列址に全力を上げる、この一つから石囲の炉が発見され、調査に活気をつける。また第67号東より弥生時代壺形土器が正位の状態で出土した。

６月６日　第69号・井戸址２の完掘後写真撮影・実測を行い、新たに第70・71・72・73号住居址のプランを追求し、順次調査にかかる。柱穴配列址に遣り板を組む。

６月７日　第70・71・72・73号住居址精査後写真撮影・実測作業を行い、第74・76・77・78号住居址及び溝址１・２の調査を開始する。柱穴列付近の清掃及び写真撮影を行う一方、一部実測作業にかかる。

６月８日　昨日の遺構・実測作業を続ける一方、第79・80・81号住居址の調査を開始する。溝址１・２、第74・76・77・78号住居址完掘する。終了遺構から写真撮影・実測作業を行う。

６月９日　昨日の遺構の精査を続けるとともに、完了遺構から実測及び写真撮影を行う。本日新たに第75・82・83号住居址、井戸址３・４のプラン追求と調査にかかる。石囲炉は第82号住居址のものと確定する。

６月10日　調査期日が迫ってきたので、残りの遺構検出にピッチを上げる。本日までに第75・83号住居址、井戸址３・４を完掘し写真撮影・実測作業を行い、新たに第84・85号住居址の検出を開始する。

６月11日　第82・84号住居址の精査後写真撮影・実測作業を行う。本日でほぼ調査を終了し、一部器材の徹収をする。全体写真撮影する。

６月12日　第85号住居址の精査及びカマドのたち割り等細部調査を実施する。

６月13日　小雨が降る中第85号住居址の実測及び西側壁土層の実測を行い、この壁で確認された住居址を第86号住居址とする。

６月14日　全体図面の再確認と溝址２の再確認を行い全調査を終了する。器材を撤収する。

５月31日～６月14日　土器洗浄作業を行う。

８月～９月　土器復元・注記及び図面整理作業を行う。

１月～３月　報告書原稿執筆・図面整図・土器実測・製図作業を行う。

３月　報告書を刊行する。

第３節　調査会（団）の編成

調査会（団）の編成は下記のとおりである。

１　調査会

会　長　中村　博二　（長野市教育委員会教育長）

委　員　米山　一政　（長野市文化財保護審議会々長）

第 1 図　第 3 次調査遺構分布図

委　員　桐原　　健　（長野市文化財保護審議会委員）
〃　　森嶋　　稔　（調査団長）
〃　　千野　和徳　（長野市教育委員会管理部長）
〃　　関川千代丸　（　　〃　　嘱託）
〃　　矢口　忠良　（　　〃　　社会教育課主事）

2　調査団

調査団長　森嶋　　稔　（日本考古学協会々員・上山田小教諭）
〃 主任　矢口　忠良　（　　〃　　・長野市教委主事）
調 査 員　宮下　健司　（　　〃　　・長野県史刊行会）
原田　勝美　（長野県考古学会員・長野市役所）
小柳　義男　（　　〃　　・松代小教諭）
高原　英男　（　　〃　　・長野市消防局）
小林秀行・竹内　稔・直井雅尚・石上周蔵・臼田美智子・馬場長光・館松京子・石田成二・宮坂　享・米窪　泰（以上信大学生）
青木和明・奈須野由美（以上明大学生）・青木一男・森嶋乃利　（以上国学院大学生）は整理関係に携さわった。

3　調査参加者一覧

大谷詔子・水野茂利・山崎昭三・中島まさ子・楠喜代子・大矢秀子・山岸せつ子・中沢カツエ・田村良江・宇都宮貴子・宇都宮重子・藤本みどり・古屋幸子・宮崎雅子・清水桂子・岡田きのえ・鎌田重子・宮崎寿磨子・春原明子・宮崎信子・小島紀子・荒井喜子・風間文枝・星野千潮・北村優美子・星野秀子・中村康博・風間初子・宮崎利幸・山本芳子・樋口太一・荒井かち・宮崎政一・横田怜子・松崎田鶴子・渡利保美・西村好子・宮下昭子・小松愛子・倉石まさ・倉石貞子・石川千代子・北沢友江・伊藤靖子・小幡智子・利根川節子・中村秀子・松橋房子・・北村ケイ・北村信子・工藤法子・矢島秀子・馬場あや子・渡利美和子・新井尚武・北沢やすい・北沢幸子・倉石実雄・樋口英子・滝沢利子・駒村敏子・矢島貞・深沢由紀子・松崎巳保子・田中栄・井堀務・沓掛堯春・権田隆美・五十嵐二男・田中貞次・阿野巌・宮下政代・多賀谷照子・市川とよ子・北村孝子・小山さちい・山本孝子・北沢暁子・武さだ子・水野恒雄・宮崎けさ子・荳戸けさみ・橋詰敬子・北村みち江・丸山俊敦・北原久美子・祢津悦子・西沢かつ子・宮坂三枝子・小島志江子・西沢京子・山田ケサミ・百瀬京子・田中冴子・青木久子・北山けさ江・横井秀子・野本みち子・小林重子・小池千鶴子・西沢とあ子・月岡より子・塚野靖史・亀山貞子・清水富子・風間豊子・鈴木小春・宮崎やす子・宮崎恒子・小林章子・宮崎和子・宮崎公子・荒川淳一・宮崎富子・田中たけ・小島紀子・国政槇子・宮島幸子・半田由利子・北村光子・辻紀代子・外谷豊子・斉藤貞子・山崎はな子・荒井清子・石井のぶい・春原貞子・藤本久代・後藤君子・倉石靖次・田中京子・倉石智恵子・清水千鶴子・北沢なつ江・伊藤けさと・松橋由子・石川芽子・円山節子・丸山さくよ・臼井当子・風間央子・臼井まさ子・大日方綾子

・市川英子・山崎利子・上原光子・星野秀子・小島久子・酒井寿美子・柴田輝子・飯島申江・伊藤律子・宮本陽子・成沢進・立山恵美子・沓掛節子・山田節子・風間嘉子・牛澤みな子・清水松枝・三宅文雄・馬場澄子・北村敦・上野きく江・関光栄・荒井和枝・小林とよ子・矢島教子・仲俣孝男・宮崎なみ・北沢道子・飯島さつき・武村猶子・北村信幸・坂口礼子・沓掛百合子・沓掛静男・樋口満郎・田中則由・駒村敏子・小林一良・高野孝子・杵渕てる子・永井好子・西仲子・森山弘美・梅村房子・立川孝子・北田圭枝・新津百合子・宮崎房子・笠井文子・五十嵐滋子・宮崎桂子・関房江・小山恵美子・竹田きよ子・島田久江・岩佐貴代子・宮崎満涛美・富沢勝江・田中澄子・青山治子・高橋要・大日方恵美子・宮崎政子・鳥羽けさ子・酒井久子・風間信男・風間久子・風間よさ子・丸山絹子・丸山初枝・田中武代・鈴木広子・風間道夫・高森進・臼井ちえ子・山上知江・宮崎秀夫・岡田夫美恵・宮崎新一郎・宮崎留吉・松井恒子・宮本百合子・大井和歌子・古旗清美・小宮山孝一・山本貞子・伊藤紀美子・高津幸治・倉田美智子・丸山道子・竹村法子・笠井幸江・田中紀伊子・松村とみ江・久保田大・多賀谷照子・小林智枝子・樽田きよ子・近藤節子・小林和子・今井文夫・池田悦子・武貞子・北原久美子・柳原久美子・高梨千枝子・林登代・倉石金治郎・林かよ子・山本和彦・根村美智子・斉藤好子・見崎金三・本道千恵子・小山みすい・市川美智子・赤沢和恵・若林清子・石田静・松林博子・倉石きよ子・関口文範・宮本ひろ子・中島真甲子・吉沢喜代登・滝沢とく江・小山静子・楠ハル子・九島きく江・高橋智江・石川守男・後藤優子・伊藤照子・荻原泰子・須田とめ子・小島良子・宮崎郁子・風間悦子・寺島福子・祢津いく子・内山純子・島田かつし・祢津昭子・寺島美南子・小島三重子・小林加代子・村松枝子・松村役紀子・風間明子・松林泰子・堤雪子・小出史子・飯島広子・矢島千鶴・市川紀雄・田中礼子・田中宣子・田中つね子・荒井積江・馬場澄子・井堀幸子・若林昭子・鳥原緋紗代・矢島登代子・南条まち子・田中実・田中則由・田中勝子・坂口礼子・沓掛みはる・荒井昭子・腰原孝弘・住沢章・飯島艶子・鶴田茂子・宮崎昇・松尾たか子・越恒子・横井せい子・宮崎せい子・宮崎音和・轟あき子・宮入治子・中村勇雄・北村孝之・矢島幸江・北村喜多子・田中喜代枝・西沢清充・山口幸男・丸山勝己・丸山いつ子・阿部喜代子・根岸洋子・南久美子・杉田寿子・高野千代恵・小島京子・土屋美代子・宮崎利忠・宮崎幸一・米沢栄子・矢島たき江・山崎浄子・岡沢泰子・町田起代子・滝沢千代・宮崎志づ子・荒井静子・宮入房子・内山廣子　（会長北村孝之・校長岡沢英一・教頭小林一良）

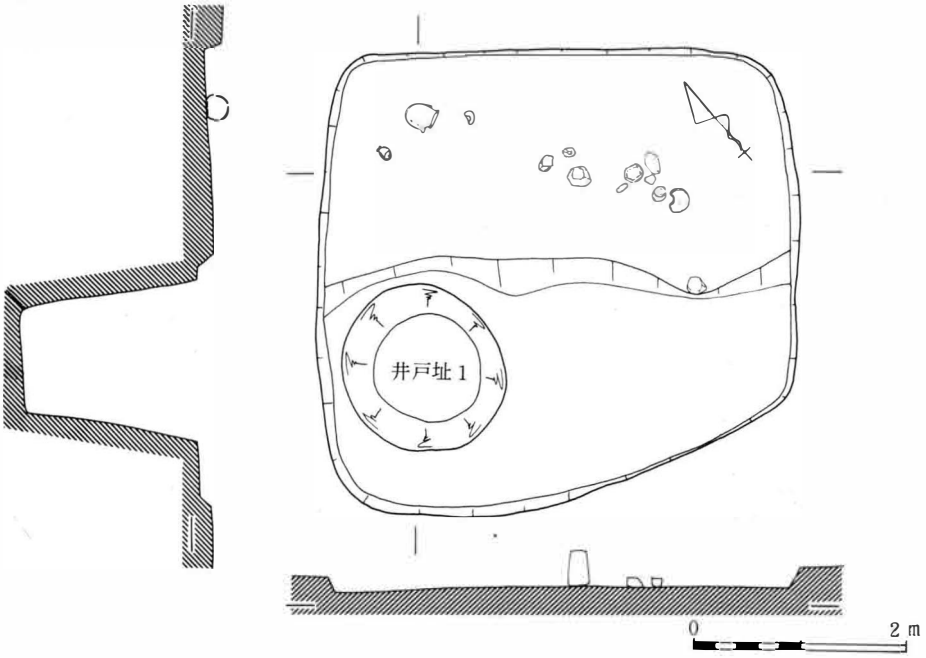
これらの方々の他、塩崎小学校、ＰＴＡ、柳原、笠井建設共同企業体に並々ならぬ御援助をいただいた。記して感謝の意を表します。　（事務局）

第２章　遺構と遺物

今次の調査で確認・検出した遺構の種別は第59～86号までの28軒の住居址、３軒の建物址、４基の井戸址、それに２～５までの４基の溝址である。第１・２次調査同様に調査地全面に認められ、そのほとんどが他遺構と重複関係にある。掘り込み確認土層は黄褐色砂混り粘質土層で、古墳時代以降のものの覆土は黒褐色粘質土を基本としているが、弥生時代のものはより多くの炭化物を含み、黒味が強い色調になる。

なお、遺構の番号は第１・２次調査報告のものに継続するように呼称した。

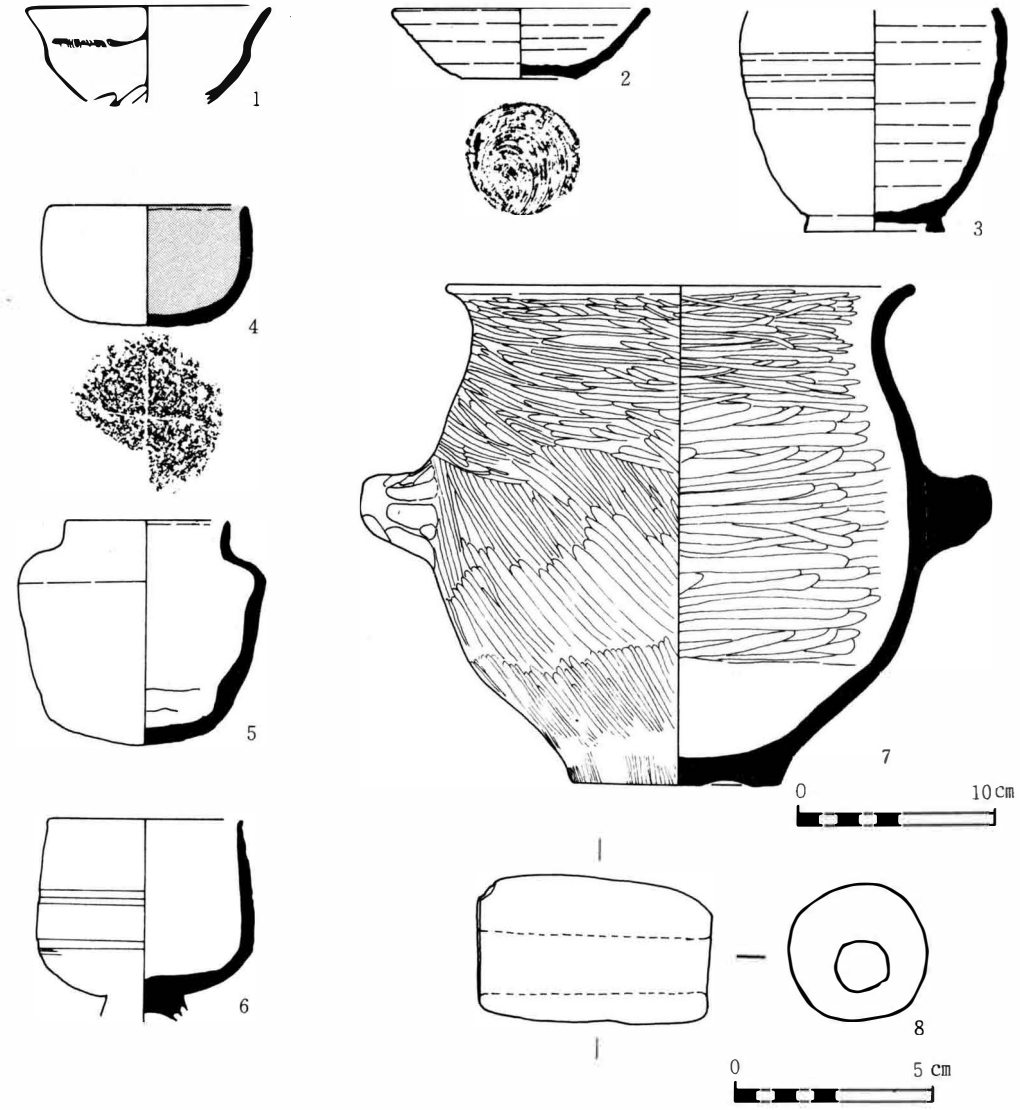
第１節　住居址



第２図　第59号住居址、井戸址１実測図

１　第59号住居址（第２・３図、第２・15図版）

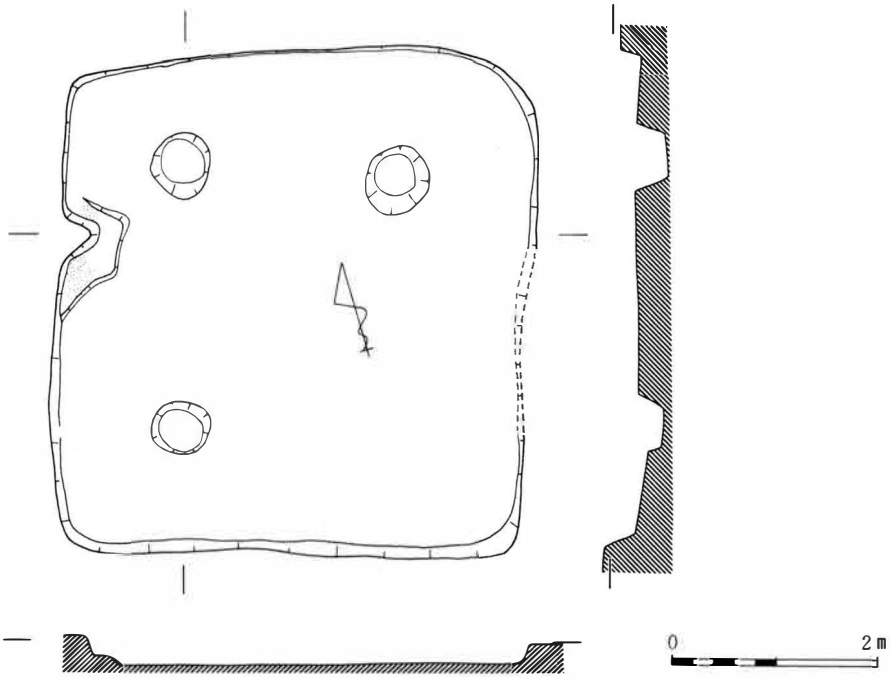
遺構　調査地東端に位置し、第84号住居址を切り、井戸址１に西隅を破壊される。プランは不整形を呈し、南北 4.2ｍ×東西 4.3ｍの規模になる。南北軸の方向はＮ－38°－Ｅを指す。壁は直に近く掘り込まれ、西壁16cm・東壁16cm・南壁20cm・北壁12.5cmの壁高を測る。床面は平担であるが、南半分は不整形に約６cm程落ちこんでいる。何のためか不明である。この床面の北側の上段には礫が散在しており、床面からの遺物はこの礫中からの出土である。ただ北壁中央



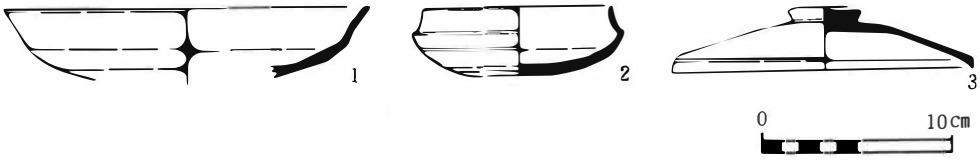
第３図　第59号住居址出土土器（１～７）・土製品

内側に長楕円形の河原石が床面に埋め込まれ、周辺に焼土が認められた。これもまた不明の遺構である。床面は軟弱で、この面から柱穴等の内部施設はなかった。

遺物　出土量は多く、完形に近いものはそのほとんどが床面及びその直上である。土師器坏（１・４）・甕形土器（７）・須恵器坏（２・６）・坩（５）・壺形土器（３）・土錘（８）等が出土しているが、１は古手の土師器で、２・３は底部に糸切り痕を有する須恵器で新しい時期のものであり混入であろう。４は内面を黒色処理された土師器坏形土器で、口縁部が直からやや内弯気味になる。底部にヘラによる十字形の刻印がある。５は完形の短頸坩で、外面に



第４図　第60号住居址実測図

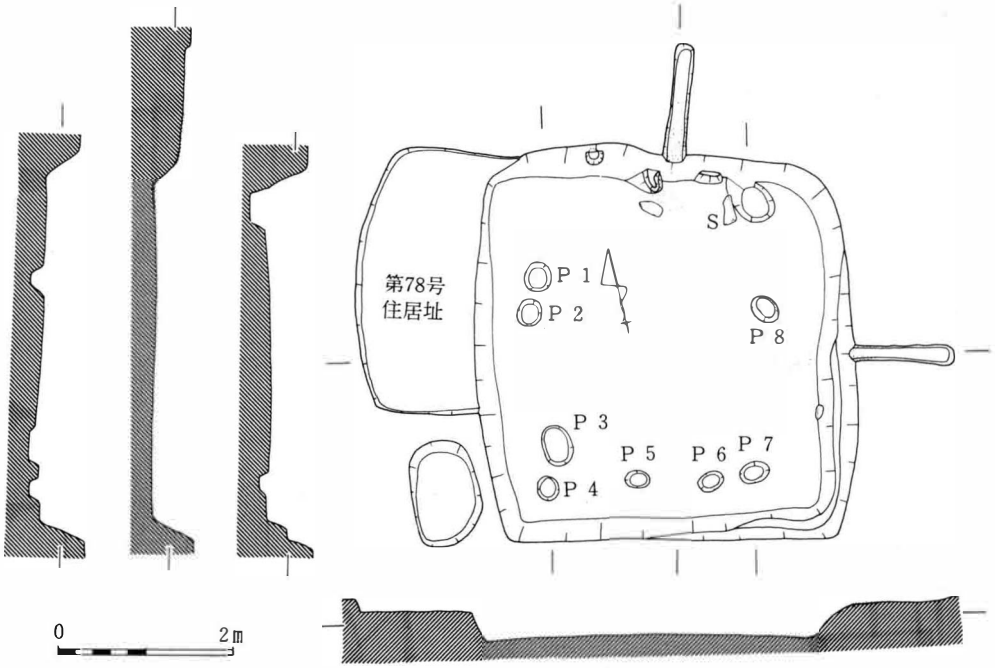


第５図　第60号住居址出土土器

は部分的に自然釉がかかり、内部に成形時の凹凸を残している。６は台付のコップ状の坏形土器で、体部はやや内屈し、口縁部はわずかに外反する。また外には上段に２条の、下段に１条の沈線がめぐる。７は一対の把手がつく球形胴の甕形土器で、内外面ともにヘラ磨きにより丁寧に整形されている。８は土錘で、外面は使用により磨滅をうけている。この他、莚編み用に使用されたかと思われる、中央部が磨耗した長さ15cm前後の方柱状の河原石が４点出土している。　（直井雅尚）

２　第60号住居址（第４・５図、第15図版）

遺構　調査地東側住居址群中に位置し、第67・69号住居址及び溝址２の上部を切り、井戸址４に切られる。プランはやや隅丸の方形を呈し、一辺 4.7m、主軸方向N－73°－Wを指す。壁は直に近く、その高さは北壁20cm・東壁18cm・南壁30cm・西壁37cmを測る。床面は中央より北にかけてやや傾斜し、軟弱である。主柱穴は未確認の１個を除く３個を検出し、その配列は方



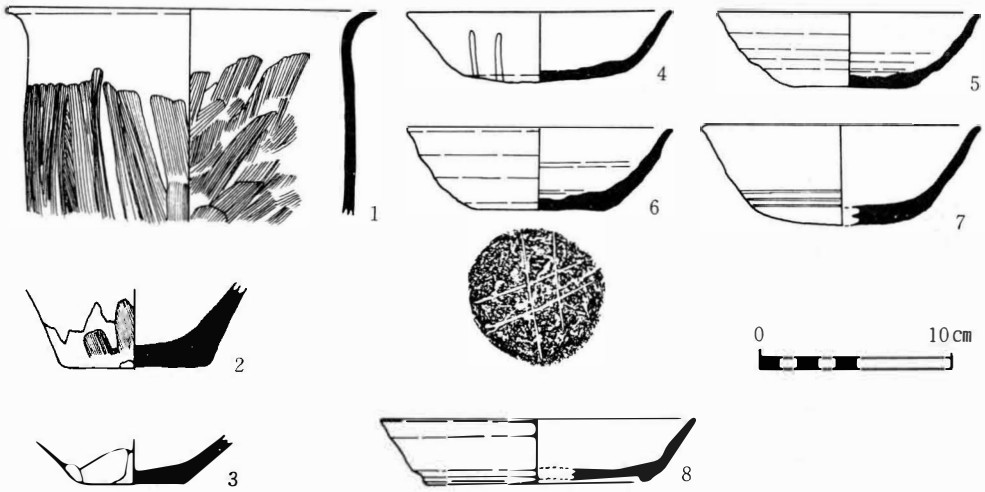
第６図　第61・78号住居址実測図

形になるものと思われる。いずれも径約60cm、深さ30cm内外の同規模のものである。カマドは西壁中央よりに設けられるが、調査では右の袖部分を検出したにすぎない。

遺物　出土量は少なく、そのほとんどが覆土出土である。土師器坏・甕形土器・須恵器坏・蓋形土器片等が出土しているが、図示できるものは３点にすぎない。１は体部がいくぶん内弯気味に立ち上がった後、鈍い稜をなし、そこから口縁部が外開する。いわば口径に対し器高の低い盤形になる須恵器で、２は蓋坏の身部で、短かく内屈する口縁部で体部の立ち上がり低く、蓋受部のつくりも雑である。３は蓋形土器で、扁平なつまみを有し、天井部に丸味があり、口縁部が折れる嘴状を呈する器形になる。これらには時期差があるようであるが、坏形土器底部にはヘラによる切離痕を有する点注意したい。　（直井雅尚）

３　第61号住居址（第６・７図、第３・15図版）

遺構　調査地中央部第２号柱穴群西側に位置し、北西隅は78号住居址と重複し、それよりも新しい。プランは方形で、主軸方向はN－17°－Wを指し、主軸4.40×東西軸4.32ｍを測る。壁は直に近く、壁高を東西南北順で記すと、45・56・50・42cmで、他の住居址に比し掘り込みは深い。南東隅には段を有す。床面は平担で、中央部は堅緻である。床面上には薄い灰と焼土の



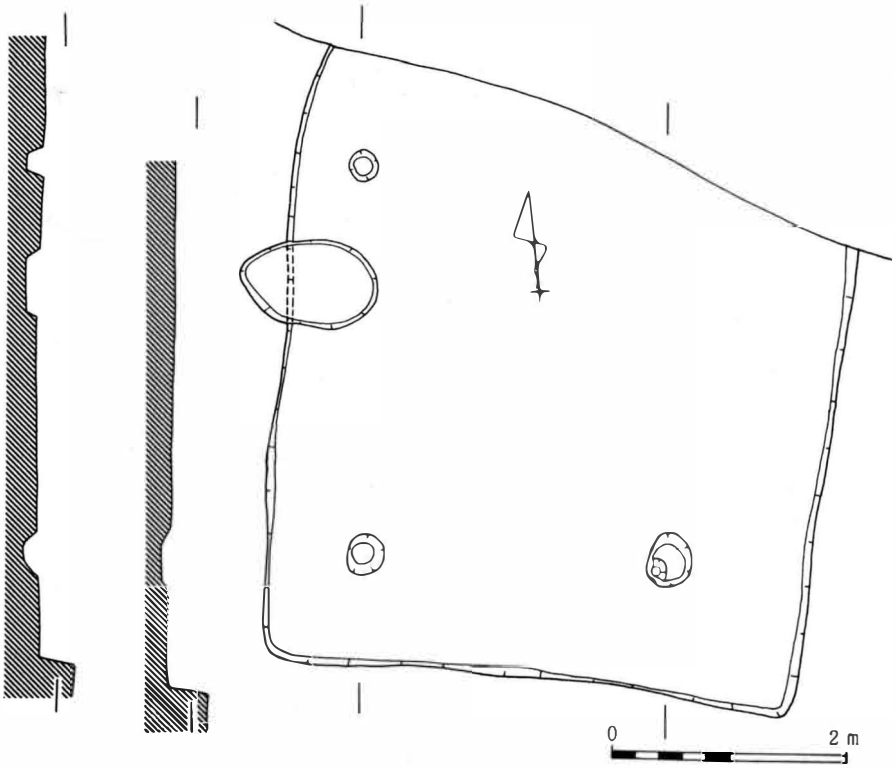
第７図　第61号住居址出土土器

層が認められた。柱穴は８個確認されたが、主柱穴は方形配列の４本柱を想定する。カマドは住居址外に煙道が東壁と北壁に２ヶ所確認された。北壁中央のものには袖部が残存しており、焼土のあり方から東壁より新しいカマドであろうと推定する。このカマドは袖石を有する主軸44cm・巾40cmの粘土製両袖形のものである。内部から煙道にかけ焼土が認められ、煙道は1.35ｍを測る。東壁のものは火床と1.２ｍの煙道が残存するのみである。北壁のカマドの右側には灰が確認できる。主軸68cm・短軸38cm平面楕円形すり鉢状を呈する。貯蔵穴様のピットがある。左側壁面には意味不明の内面が焼けた横位の穴が開口していた。尚、本遺構に関係を有しないと思われるが、住居址南西隅の外部には、床面に厚い炭化層を有し、長軸 120cm×短軸80cm、深さ30cmを測る楕円形の土坑が存在する。

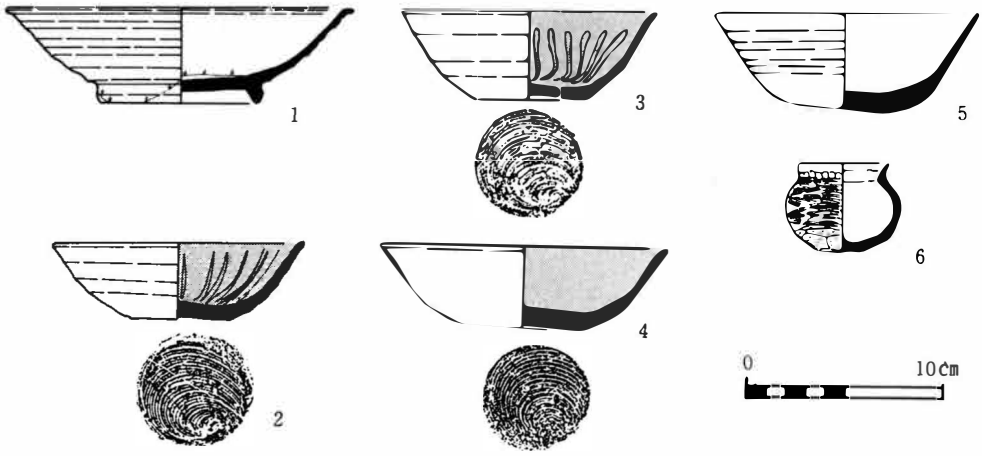
遺物　すべて覆土の中の出土で、土師器坏・甕形土器と須恵器坏形土器等が出土している。１～３は土師器甕形土器の体部上半及び底部片である。１は口縁部が短く反り返り、体部は筒形の長胴を呈し、内外面ともに刷毛で整形されている。２・３は底部片で、ヘラナデ整形で平底をなし、２には水濾し粘土による再調整がみられる。４～８はいずれも底部が丸味を帯び、ヘラキリ痕をもつ須恵器坏形土器である。８には外開する高台が付される。　　（竹内　稔）

４　第62号住居址（第８・９図、第15図版）

遺構　調査中央北寄りに位置し、北側一部及び北壁が調査地外にかかり未調査である。プランは長軸が不明であるが、短軸 4.6m の長方形を呈するものと考えられ、主軸方向はN－11°－E を指す。壁は直に近く、西壁20～30cm・南壁29cm・東壁30cmの掘り込みになる。床面は中央部が上がり、壁沿いが低くなり軟弱である。主柱穴は３個確認され、４個方形配列で、その



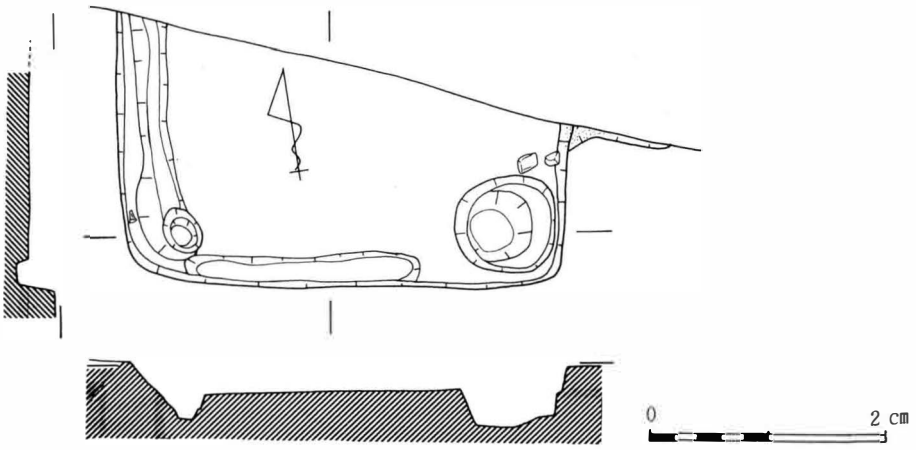
第８図　第62号住居址実測図



第９図　第62（１）・63（２）・64（３・４）・65（５・６）号出土土器

規模は径22～40cm・深さ10cm前後である。調査ではこの外の施設は確認できなかった。

遺物　出土量は少なく覆土中からのものである。ロクロ成形痕・底部糸切痕を残す土師器坏形土器及び、体部がヘラケズリされる土師器甕形土器などが出土しているが、いずれも破片である。



第10図　第63号住居址実測図

図示したものは灰釉陶器で、透明の緑がかった釉がほぼ全面に施されている。内面底部に焼成時の重ね焼き痕が明確に残っている。　（直井雅尚）

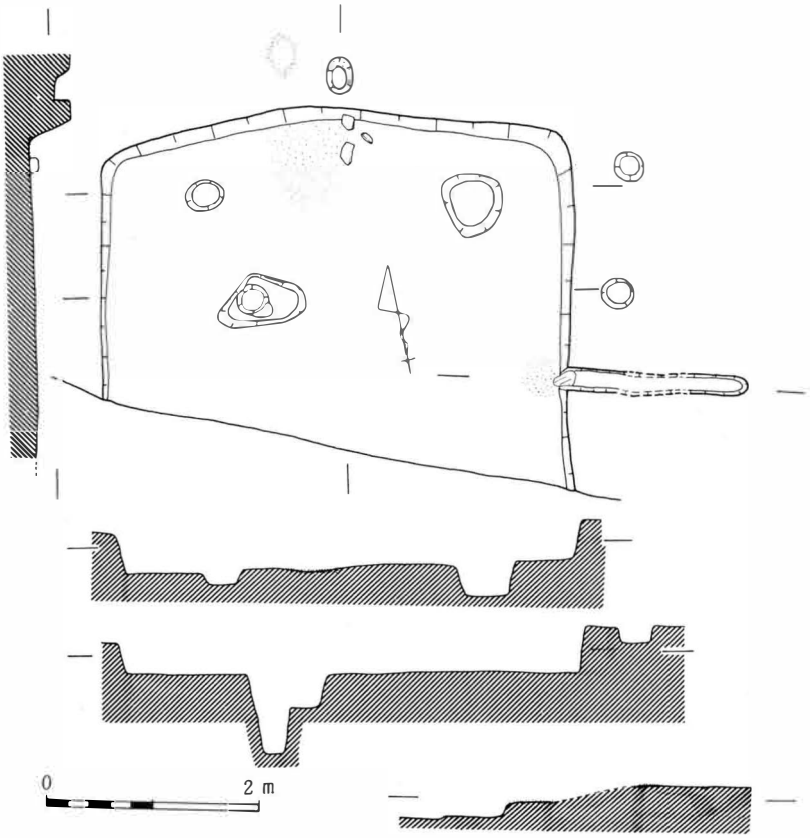
5　第63号住居址（第９・10図、第３・15図版）

遺構　調査地中央よりやや西よりに検出された。プランは東西壁間 3.7m 測る方形を呈するもので、北半分が調査地外にかかっている為、詳細は不明である。主軸方向はS －79°－E を指す。壁は直に近く、各壁とも20～30cmの壁高を測る。床は平担で良好である。柱穴は２個検出されたが、うち一個はカマドのすぐ右脇にあり、径90cm・深さ32cmで、下部に段を持つ大きいもので、柱穴であるかどうか疑わしい。カマドは東壁中央よりやや南寄りにあり、ほぼ半分が調査地外にかかって、全容はつかめなかったが、袖端部の芯の角礫が残存し、長さ80cmの煙道を確認した。以上の施設の外に、西壁及び南壁下に巾25cm・深さ10cm程の周溝がめぐる。

遺物　土師器坏・甕形土器の破片が出土しているが、すべて覆土中からで、量も少ない。図示したものは土師器坏形土器で、ロクロ目が外面に残り、内面は黒色処理され放射状の暗文が浮き出している。底部は糸切り痕を残し、上げ底になる。　（小林秀行）

6　第64号住居址（第９・11図、第４・16図版）

遺構　調査地ほぼ中央南側に位置し、重複する第76・81号住居址より古い。南側は調査地外にかかり未確認である。プランは一辺 4.4ｍの方形を呈するもので、主軸方向はN －11°－E を指すものと思える。壁は直に掘り込まれ、北壁43cm・東壁43cm・西壁35cmを測る。床面は平担でわずかに東へ傾き軟弱である。主柱穴は径30cmの円形で、深さ10cmのものと、径58cm、深さ30cmの不整円形のもの２個が確認されたが、基本形態は方形配列になると思われる。中央やや西寄りに、不整形で下部に段をもつ深さ70cmあまりのピットがあるが、柱穴とは考えられない。



第11図　第64号住居址実測図

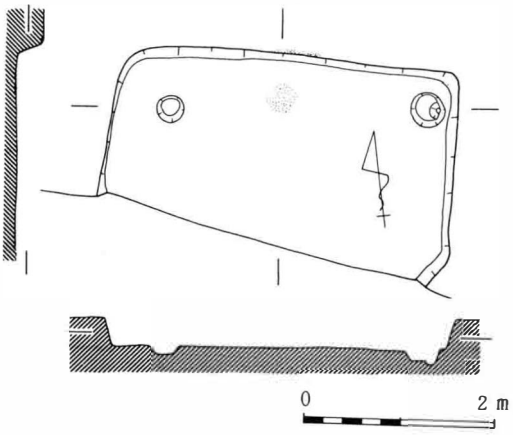
カマドは北壁と東壁から確認され、その残存形態から北壁のものが新しいものと思われる。またこの北壁のものには煙道が2個確認され都合3ヶ所のカマドを有する住居址である。北壁中央やや西寄りに接して残る90cm×70cmの範囲に多量の焼土及び礫が残存し、北壁上20cm程北のところにこれらのものと思われる径約30cm×20cmの煙道が、30cmの間隔をおいて地表へ顔を出している。最も古いものは東壁中央やや南寄りに位置し、壁下にわずかな焼土を伴う火床と煙道を残している。煙道は壁に接するところにフタ石と思われるものを有し、長さが1.8 m巾が18cm深さが中央部で13cmを測り、第81号住居址のカマドの一部を破壊する。

遺物　すべて覆土中からの出土である。内面黒色処理され、ロクロ成形される土師器坏形土器、体部上半がロクロ成形される土師器甕形土器の破片が出土している。図示した3・4ともロクロ目・糸切り痕を持ち内面黒色処理されている。尚、3には内面に放射状の暗文が施されている。　（石上周蔵）

7　第65号住居址（第9・12図、第4・16図版）

遺構　調査地西よりに位置し、南側3分の1程調査地外にかかる。プランは一辺 3.9m の方

形を呈するものと思われ、主軸方向はS－78°－Eである。壁は直に近く、西壁29.5cm・北壁27.5cm・東壁23cmを測る掘り込みである。床面は平担で軟弱である。主柱穴は径30cm、深さ11cm程のものが2個確認されたが、そのうちの1個は極端に北東隅に寄っている。カマドは東壁中央やや南よりに存すると考えられる。以上の他に、確認された主柱穴間、及びそのすぐ北よりの北壁上にわずかに焼土が確認された。



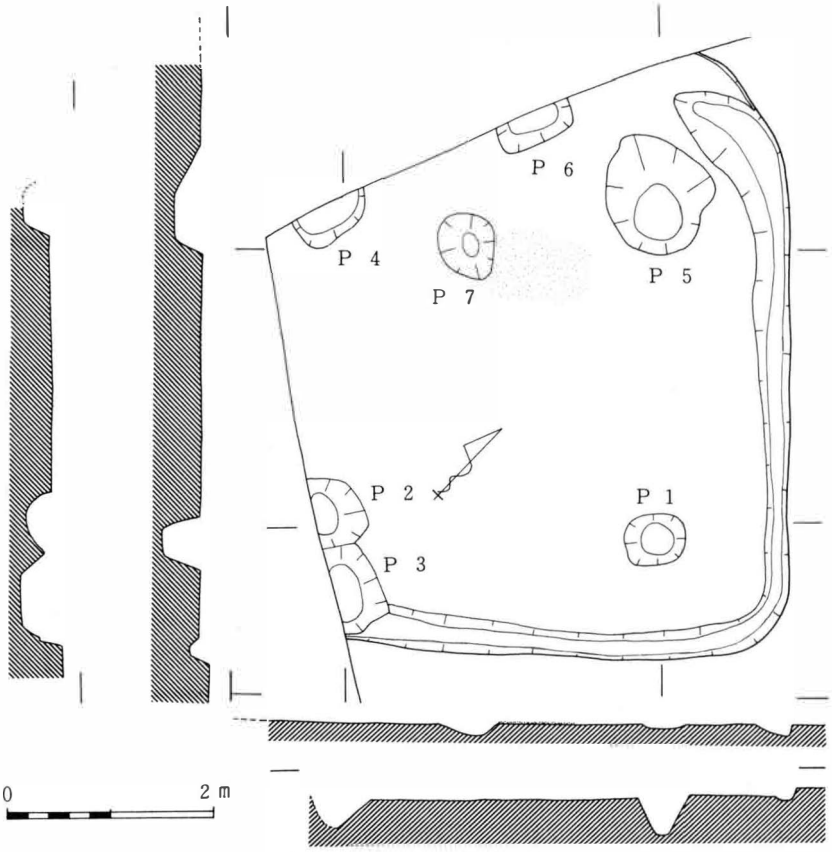
第12図　第65号住居址実測図

遺物　出土量は少なく、すべて覆土からのものである。器種としては土師器甕・坏形土器・須恵器坏形土器等がある。土師器の甕は長胴形になり、刷毛で整形される。図示した遺物で5はロクロ成形され、ヘラキリ底をもつ須恵器坏形土器である。6は土師器小形甕で体部は刷毛で整形され、底部はヘラケズリされている。　（直井雅尚）

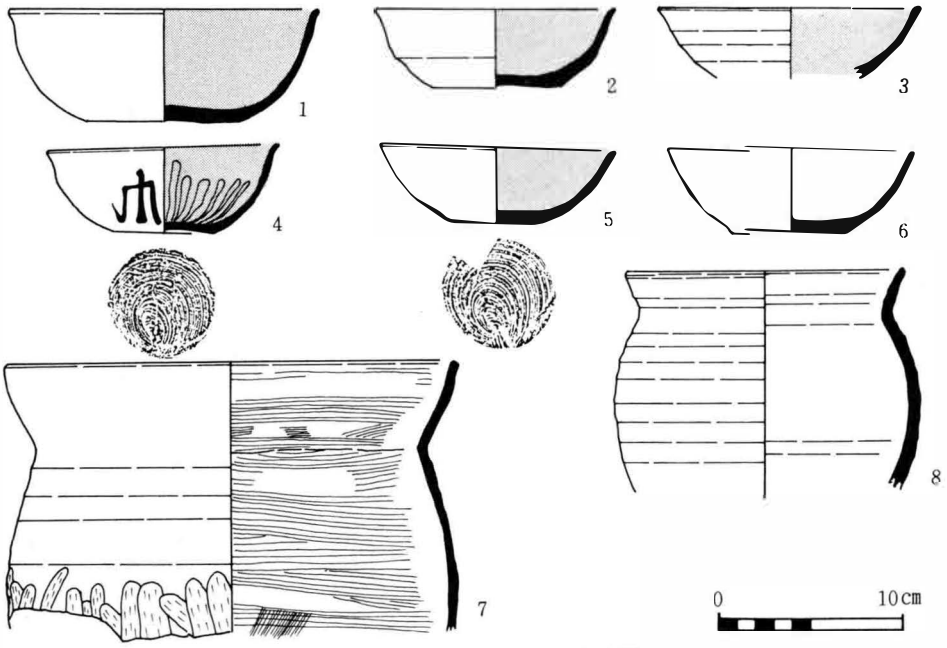
8　第66号住居址（第13・14図、第4図版）

遺構　調査地西端に位置し、他の遺構より50cm程低いレベルで検出された。北壁及び西壁は調査地外にかかり未確認である。プランは主軸方向がN－40°－Wを指し、主軸の長さ5.94mを測る隅丸方形を呈すものと思われる。壁は検出のレベルが低かった為、不明瞭で2～10cm残存していた。床面は凹凸があるがよくつき固められて堅緻である。主柱穴は方形配列で4個確認され、径70cm内外・深さ25～35cmを測る。この他に同規模のピットが南壁と北壁よりに各1個あり、深さ10cmの浅いものが中央やや北よりに1個ある。カマドの所在は不明であるが、未調査の北壁に接してあると推定される。カマドの他に床面中央北より付近に、1m×50cm位の範囲に焼土及び灰層が確認され、地床炉的遺構と思われる。以上の住居址内施設の他に南壁直下すべてに巾30cm程・深さ10cm程の周溝がめぐっている。床面東壁よりから赤色顔料の小さいかたまりを得た。

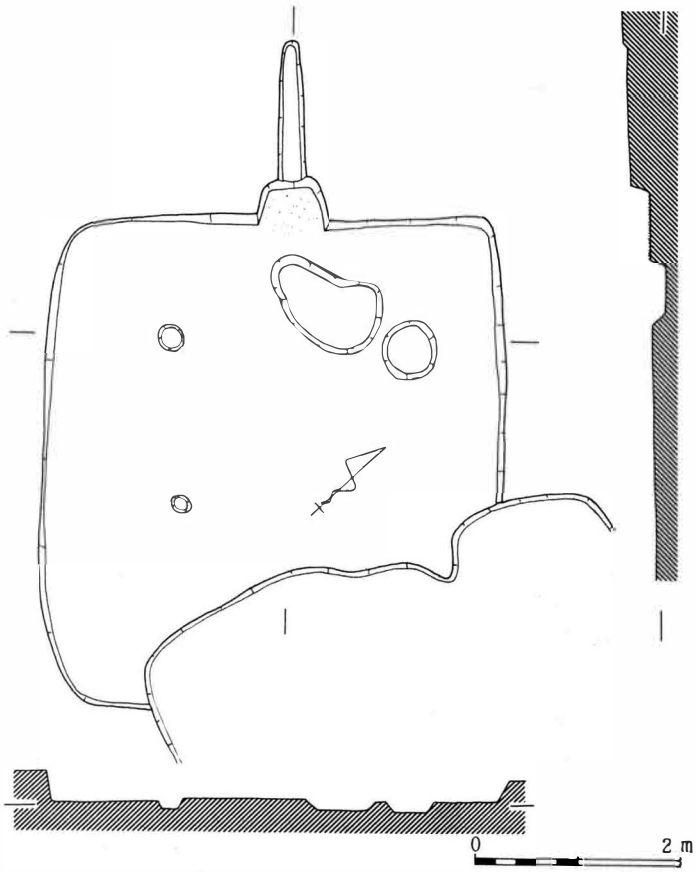
遺物　出土量は少なく、すべて床面直上からのものである。内面黒色処理され糸切り底をもつ土師器坏形土器、体部がやや丸味を有し、下半をヘラケズリされる大形の土師器甕形土器等が出土している。1～6は土師器坏形土器で、外面にロクロ目が残り、糸切り底になる。6以外は内面が研磨され、黒色処理されている。4は放射状の暗文が施され、外面には墨書がある。7・8は土師器甕形土器である。7は体部にやや張りをもつ長胴形になると思われ、口縁部は外開しながら上部でわずかに内弯する。口縁部から体部上半にロクロ整形痕を残し、それ以下はヘラケズリによって器壁を薄くする。8は体部がやや球形を呈し、全体にロクロの整形痕を残す中形のものである。　（直井雅尚）



第13図　第66号住居址実測図



第14図　第66号住居址出土土器

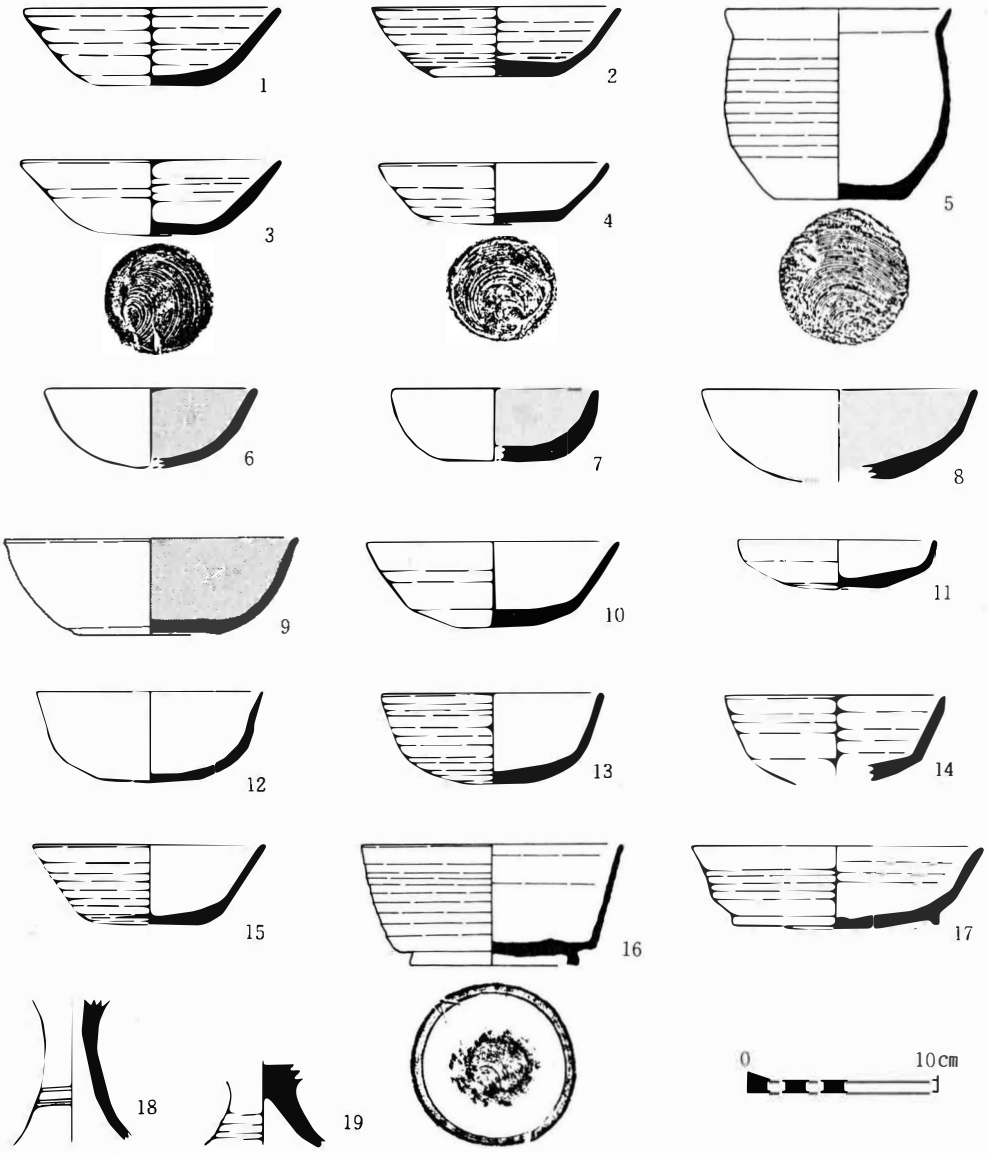


第15図　第67号住居址実測図

9　第67号住居址（第15・16図、第５・16図版）

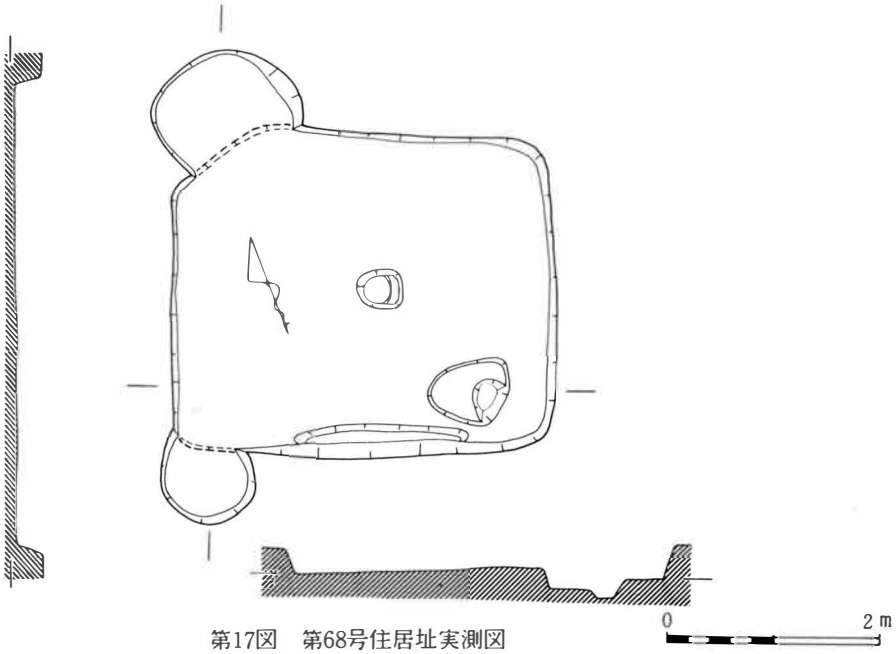
遺構　調査地東側住居址群中に位置し、第71号住居址、及び第70号住居址南東隅を切り、第60住居址に南東壁部分を切られる。また溝址２・３より新しい住居址である。主軸方向をN－47°－Wにとり、主軸 4.8ｍ・南北 4.5ｍをはかるほぼ方形のプランを呈す。壁は直で南壁28cm・西壁29cm・北壁20cmの壁高を測る。床面は西から東に緩傾するが、概して平担で良好である。主柱穴は確認できたもので規模が径22cm・深さ８cmのものと、径50cm・深さ７cmで、不揃いの浅いものである。カマドは西壁中央に築かれており、壁外へ張り出し、袖はなく、規模が開口部66cm、軸長40cmで、外周はよく焼き込まれている。火床には焼土・灰が多量に残っていた。煙道部はカマド中央から壁外に延び、長さ 1.4ｍ・巾24cmを測る。

遺物　出土量は多く、覆土上層及び床面から出土している。器種は坏形土器・甕形土器・高坏形土器等がある。１～５は本址中央やや南寄りの所で、覆土上層から集中して出土したものである。床面出土のものよりやや後出するものとみられ、上面で検出できなかったが、他の遺構が存在しそれに属するものだった可能性が強い。６～12・15・16・18・19は住居址内のそれ

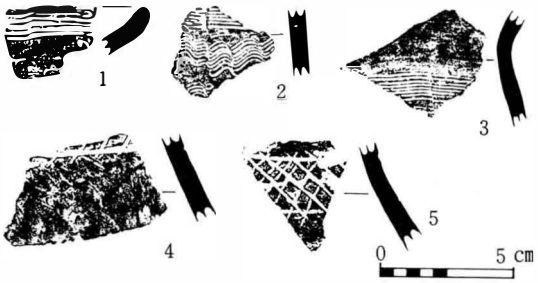


第16図　第67号住居址出土土器

以外の覆土下層、13・14・17は床面から出土したものである。1～4はロクロによる水引きにより造り出され、底部に糸切り痕がある須恵器坏形土器である。5は外面全体にロクロ成形痕を残し、底部に糸切り痕を残す小形の土師器甕形土器である。6～9は土師器坏形土器で、内面は良く研磨され黒色処理される。このうち8・9は底部に回転を利用してヘラケズリ痕が残る。10～17は須恵器坏形土器で、いずれもロクロを利用した整形が施される。10・15は体部が直線的に外開し、底部にヘラ切離痕を残している。11は口縁部が短かく立ちあがる皿形で、底



第17図　第68号住居址実測図



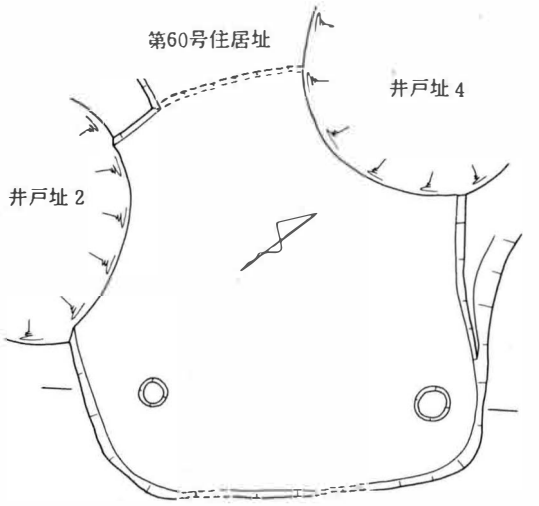
第18図　第68号住居址出土土器拓影

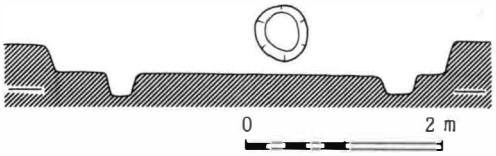
部は雑なヘラ切離痕を残す。12～14はいずれも椀形をなし、底部はヘラにより切離され丸底気味である。16・17には高台が付されるが、16は体部が直線で直立気味に立ち上がり深い。高台も直立し底部中央に糸切り痕を残すもので、やはり後出のものと考えられる。17は皿形で体部下半に鈍い稜を残し、口縁部が外反し、底部はヘラケズリが施され丸くなる。18は須恵器高坏形土器の脚部片である。下部がラッパ状に開く細長い形で、3本の横位の沈線がめぐらされる。19は脚部上部から大きくラッパ状に外開する盤の脚部であろう。（小林秀行）

10　第68号住居址（第17・18図、第5図版）

遺構　調査地中央やや東寄りの建物址、住居址群に属し、第82号住居址を切る。長軸 3.2m・南北軸 3.1mでほぼ方形のプランを呈し、N－70°－Wに長軸方向をとる。壁は直に近く、北壁27cm・東壁29cm・南壁31cm・西壁18cmの壁高を測る。床面は平担で軟弱である。柱穴は南東隅から楕円形のもの1個確認され、主軸76cm×短軸64cmのもので、内部は2段になって、深さが18cmと浅い。炉は床面中央にあり、40cmの径で深さ20cm程の舟底状を呈し、焼土を薄く残している。この他に南壁中央部直下に長さ 1.6cm・巾18cm・深さ7cmの周溝状の細長い掘り込みがある。

遺物　出土量は少なく、すべて覆土中から破片出土である。器種は弥生式壺・甕・高坏形土器等で、一部に赤色塗彩されるものがある。図示した拓影のうち4・5は壺形土器の頚部文様帯部で、横方向に平行に引かれた沈線間に斜行沈線が充填される。3は甕形土器の口縁部で波長・振巾ともこまかい櫛描波状文が横に一条施文されている。2はやはり甕形上器の頚部で簾状文と櫛描波状文が施される。　（石上周蔵）





第19図　第69号住居址実測図

11　第69号住居址（第19図、第7図版）

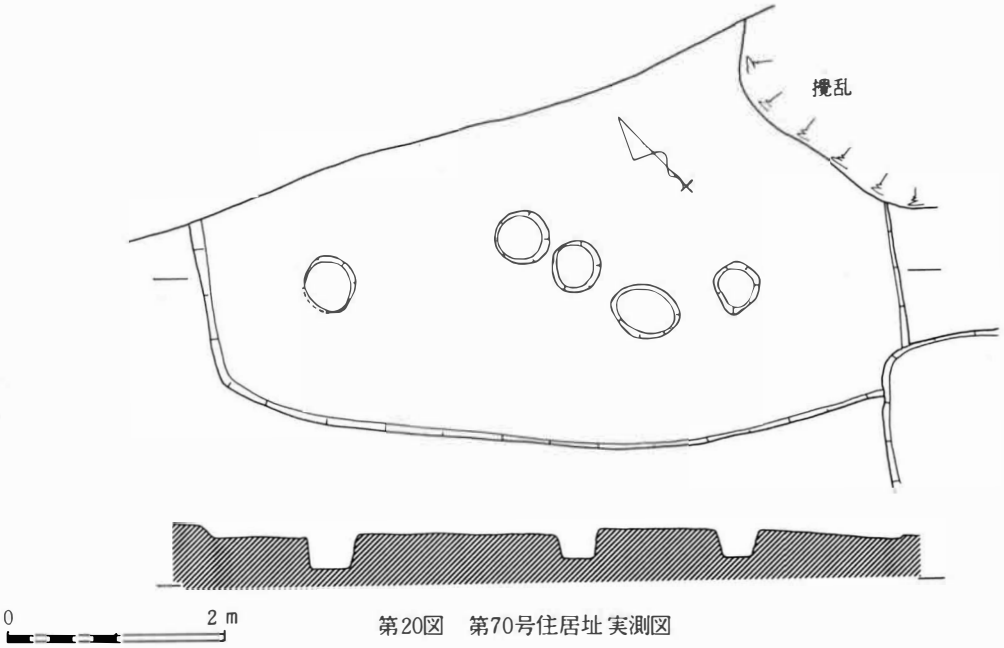
遺構　調査地東側住居址群中に位置し、第60号住居址、井戸址2・4によって西半分を破壊されている。規模は明らかではないが、北西方向に主軸をもつ、やや隅丸の方形プランになると思われる。壁は直に近く、東壁32cm・南壁34cmの掘り込みである。床面は平担で軟弱である。主柱穴は径30cm・深さ20cm程のものが2個確認されただけである。カマドは確認されなかったが、西壁に設けられていたと推定される。

遺物　出土量は少なく、すべて覆土中からである。器種はヘラで整形される丸底の土師器坏形土器、刷毛整形で器面が調整される甕形土器などがみられる。すべて部分片で図示できるものはなかった。　（直井雅尚）

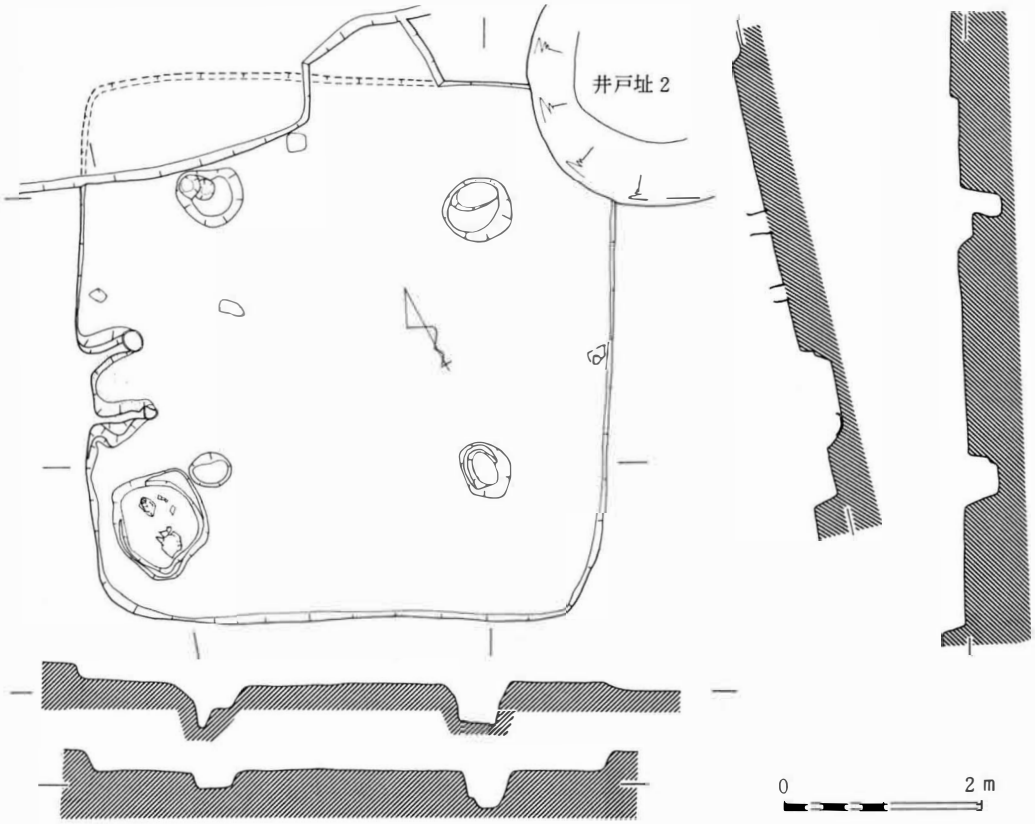
12　第70号住居址（第20図、第7図版）

遺構　調査地東側住居址群の北端に位置する。北半分は調査地外にかかり、南隅を第67号住居址に切られる。プランは一辺 6.3m 程の隅丸方形になると思われるが詳細は不明である。壁はいくぶん傾斜し、南西壁で15cm内外の掘り込みになる。床面はやや起伏があり軟弱である。主柱穴は南壁に沿って径40cmで、深さ30cmと21cmのものが2個ある。この他、内側に2個、東側に1個のピットがあり、径50cm程で、深さ26cm・19cmを測る。

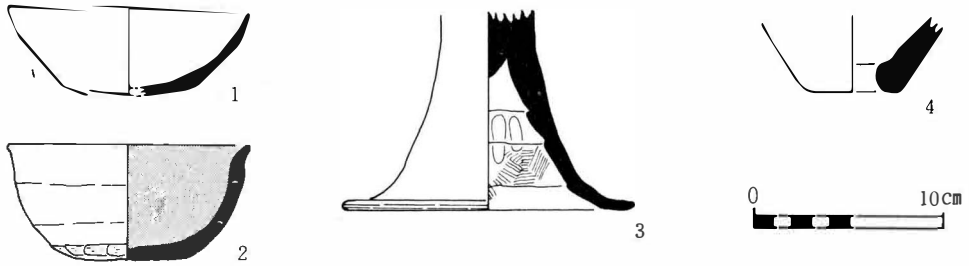
遺物　出土量は少なく、すべて小破片で図示できるものはなかった。器種としては底部をヘラケズリされる土師器・須恵器の坏形土器や、内外面を刷毛整形され、長胴になると思われる甕形土器などがある。　（直井雅尚）



第20図　第70号住居址 実測図



第21図　第71号住居址 実測図

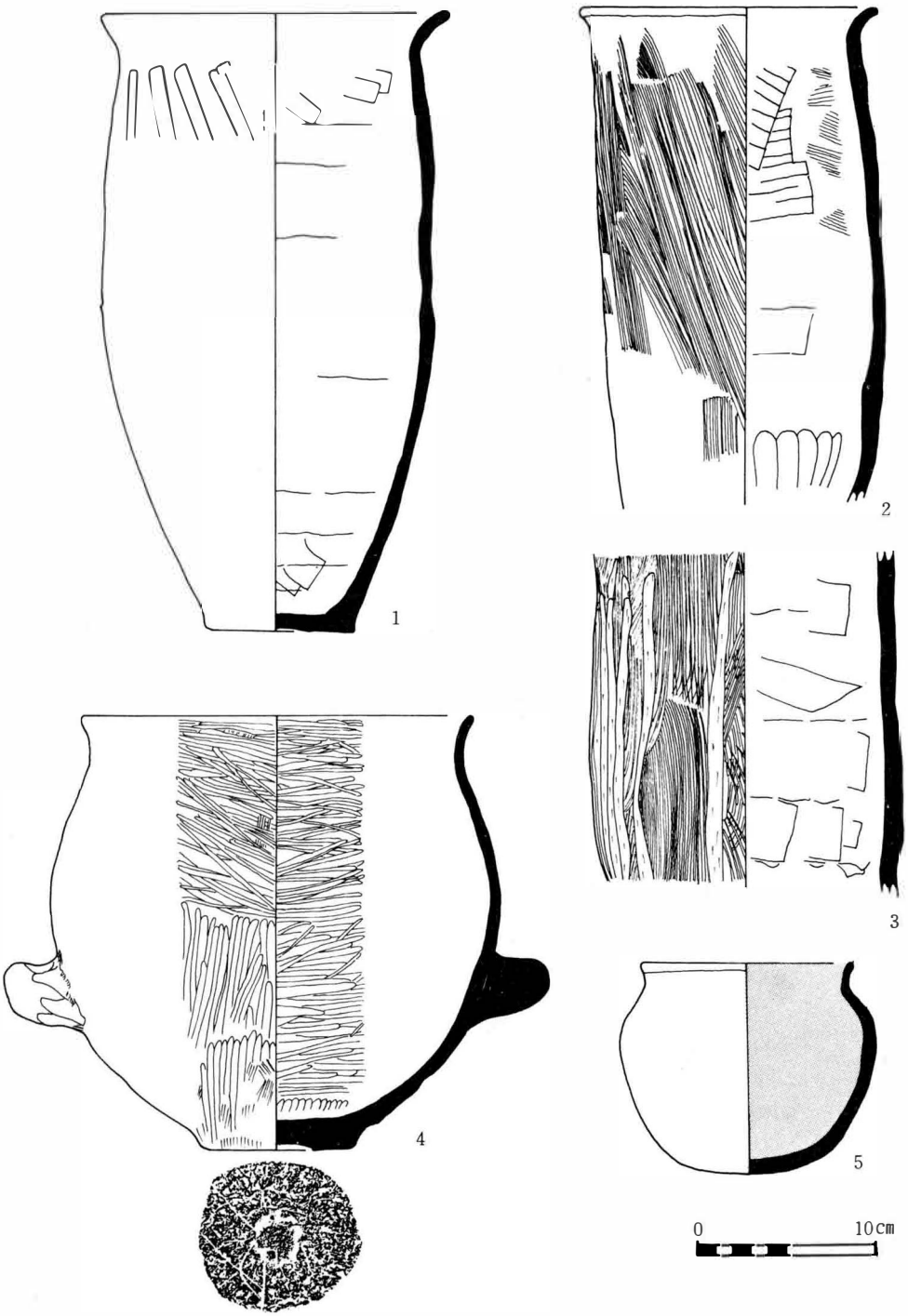


第22図　第71号住居址出土土器(1)

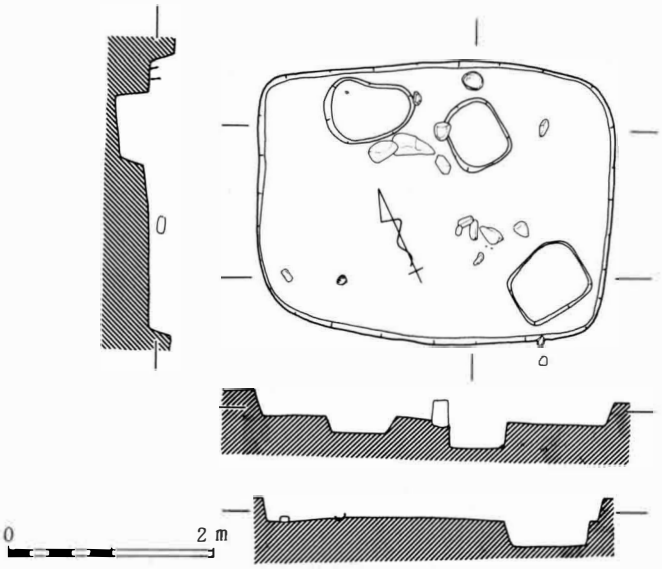
13　第71号住居址（第21・22・23図、第６・17図版）

遺構　調査地東側住居址群中に位置し、第67号住居址・井戸址２に切られ、第84号住居址を切る。プランは一辺 5.3m の隅丸方形で、主軸方向はN ―65°―Wを指す。壁は直に近く北壁10cm・東壁18cm・南壁25cm・西壁17cmを測る。床面は中央部がやや高くなり軟弱である。主柱穴は方形配列で４個確認された。規模は径40～70cmで、深さ26～56cmの範囲にある。北壁沿いのものには柱痕であろうか内に径20cm程のピットがある。西壁中央やや南寄りに設けられているカマドは粘土製両袖形のもので、両袖の先端部に長胴の甕形土器を逆位に立てて構築するという珍らしいあり方である。袖間50cm・奥行60cmを測るが、煙道は失われていた。この他、南西隅に98cm× 110cmの不整形の貯蔵穴がある。東側に段をもつ壁は直に近く、底部は凹凸があり深さ18～22cmである。

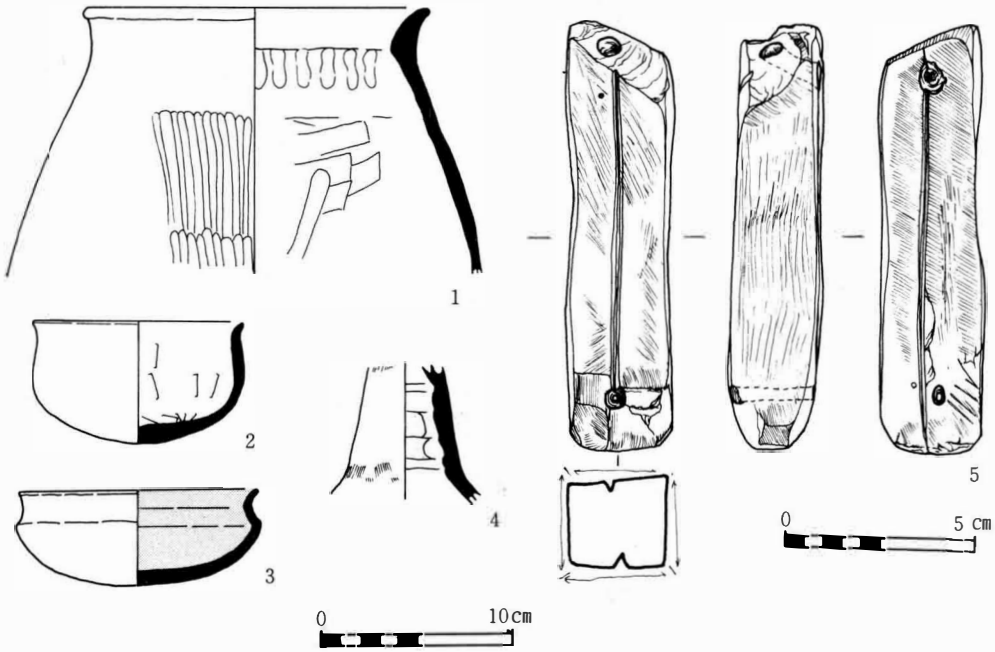
遺物　出土量は多く、ほとんどが床面、覆土下層からのものである。器種もすべて土師器であるが、坏形土器・大小の甕形土器・甑形土器・高坏形土器など多種にわたっている。図示した１～９までの遺物はすべて床面及びカマドから出土したものである。第22図１・２は坏形土器で、体部が内弯しながら立ち上がり、２の口縁端部はわずかに外反する。底部は丸底気味でヘラにより整形される。２は内面を黒色処理される。３は高坏形土器の脚部である。４は甑形土器の底部である。第23図１～３は長胴の甕形土器である。１はカマド内から出土したもので、胴部がやや張り、口縁が外反する器形を呈す。内部に輪積み成形痕を残し、体部下半は二次焼成を強く受けている。２・３はともにカマドの両袖の先端に埋め込まれていたもので、口縁部が短かく外反する他は直線的な器形で、長胴・平底になる。いずれも外面は縦方向に刷毛で整形され、内面は横方向の刷毛状或いは箆状の工具での整形である。ただ２は内面でも部分的に外面と同じ刷毛で横方向に整形される所があり、また３も外面に所々ヘラナデ或いはケズリ様ナデが施される。４はカマド左脇の貯蔵穴から出土したもので、内外面をヘラにより丁寧に整形され、胴部下半に一対の把手を持ち、一見して甑形土器に似るが、底部に穿孔はない。５はカマド左脇の貯蔵穴から出土した、短頸で肩部が張る小形の甕形土器である。整形はヘラで行なわれており、内面はこの器形では珍らしく黒色処理されている。　（竹内　稔）



第23図　第71号住居址出土土器(2)



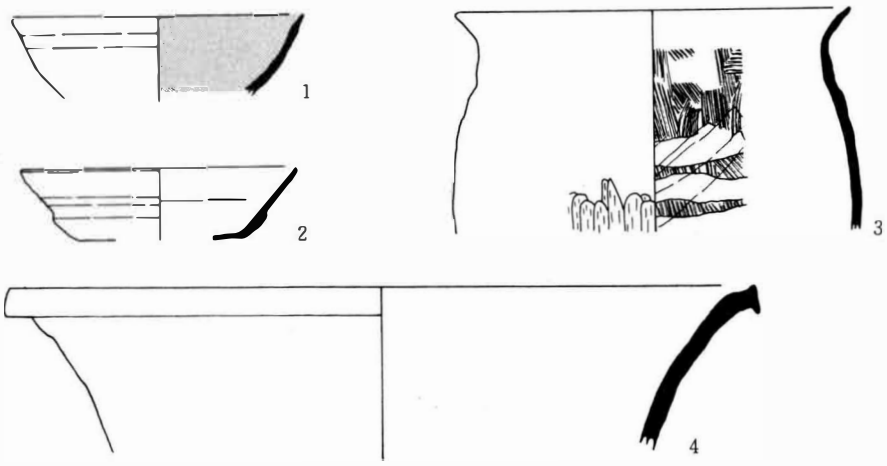
第24図　第72号住居址実測図



第25図　第72号住居址出土土器（1～4）、石器（5）

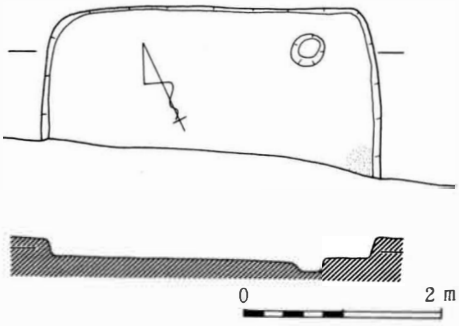
14　第72号住居址（第24・25図、第6・18・21図版）

遺構　調査地の西寄りに位置し、第85号住居址、及び溝址5を切っている。プランは長軸3.5m×南北2.7mの隅丸長方形を呈す。壁は直で北・西壁24cm・南・東壁22cmを測る。床面はかなり



第26図　第73号住居址出土土器

凹凸があり軟弱で、その上に20～40cmの礫がやや浮いた状態で散在している。その他柱穴・カマドはなく、北壁寄りに90cm×60cm・深さ15cm程の規模の意味不明の不整楕円形のピットがある。



第27図　第73号住居址実測図

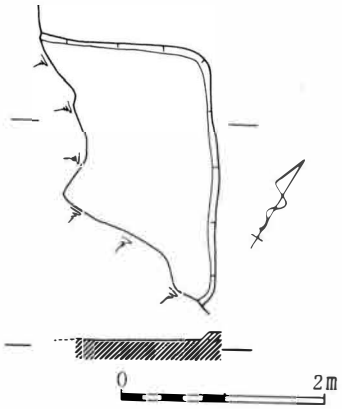
遺物　出土量は多くないが、ほとんどが床面・覆土下層からの出土である。1は覆土下層出土の長胴形を呈する甕形土器で、頚部内面に鈍い稜があり、そこから口縁部が短く外反し、体部がやや張る器形になる。内外面をヘラで整形されている。2・3は坏形土器でいずれも床面出土である。2は椀形・丸底で口縁部がわずかに外反するに対し、3は体部との接点が稜になり、そこから内屈した口縁部はその上半から強く外反する器形になる。尚3には内面が黒色処理され十字の暗文がある。4は覆土下層出土の高坏形土器脚部片で、内面に輪積み成形痕を明瞭に残し、袖部が外開するラッパ状の器形になる。5は覆土出土の砥石である。細長い方柱状で4面すべて研磨に使われており、非常になめらかで相対する2面に縦方向に1本ずつ溝がある。また両端に紐を通したとみられる孔が1個ずつ貫通している。　（直井雅尚）

15　第73号住居址（第26・27図、第8図版）

遺構　遺構群西側に位置し、南半分は調査地外にかかる。プランは一辺 3.2mの方形を呈すると思われ、南西軸はS —60°—E を指す。壁は直に近く、掘り込みは西壁8cm・北壁30cm・東壁19cmを測る。床面は平担で軟弱である。柱穴は径32cm・深さ12cmのものが1個確認されたにすぎず、配列状態は不明である。カマドは東壁中央に位置すると思われ、周辺に焼土の散布が

認められたが、大部分調査地外にかかり詳細は不明である。

遺物　出土量は多く、床面・覆土からの出土である。器種は土師器坏・甕形土器・須恵器がある。図示した遺物のうち1・2・4は覆土下層、3は床面東壁焼土中からの出土である。1は土師器坏形土器でロクロ目が残り、椀形の器形である。内面は黒色処理されているが不完全である。2はロクロ成形され糸切り底をもつ須恵器坏形土器で、体部中位がわずかにくびれている。3は長胴形の土師器甕形土器である。外面は上部をロクロで、下部を縦方向のヘラケズリで整形され、内面は縦方向の刷毛で整形されたのち、輪積み部分の隆起を指頭で平滑化し、更に斜方向に板状工具で整形される。4は大形の須恵器甕形土器の口縁部付近の破片で一部に自然釉がかかり、内外面にロクロ整形痕を残している。　（竹内　稔）



第28図　第74号住居址実測図

16　第74号住居址（第28図）

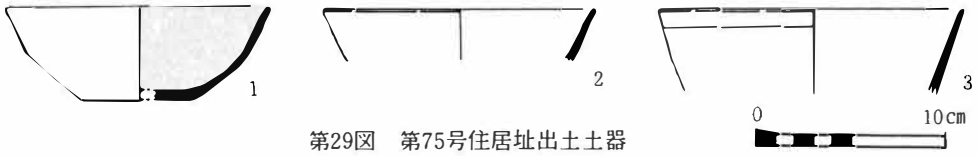
遺構　調査地西側に位置するが、検出時の手違いにより西半分を欠いている。第75号住居址を切る。規模は不明だが、方形プランを呈すものと思われる。壁は直に近いが掘り込みは10cmに満たない。床面は平担で軟弱である。柱穴・カマドなどの施設は確認できなかった。

遺物　覆土中から土師器甕形土器の胴部破片3点、外面にタタキ目をもった須恵器甕形土器破片1点が出土したのみである。いずれも小破片で図示できなかった。　（直井雅尚）

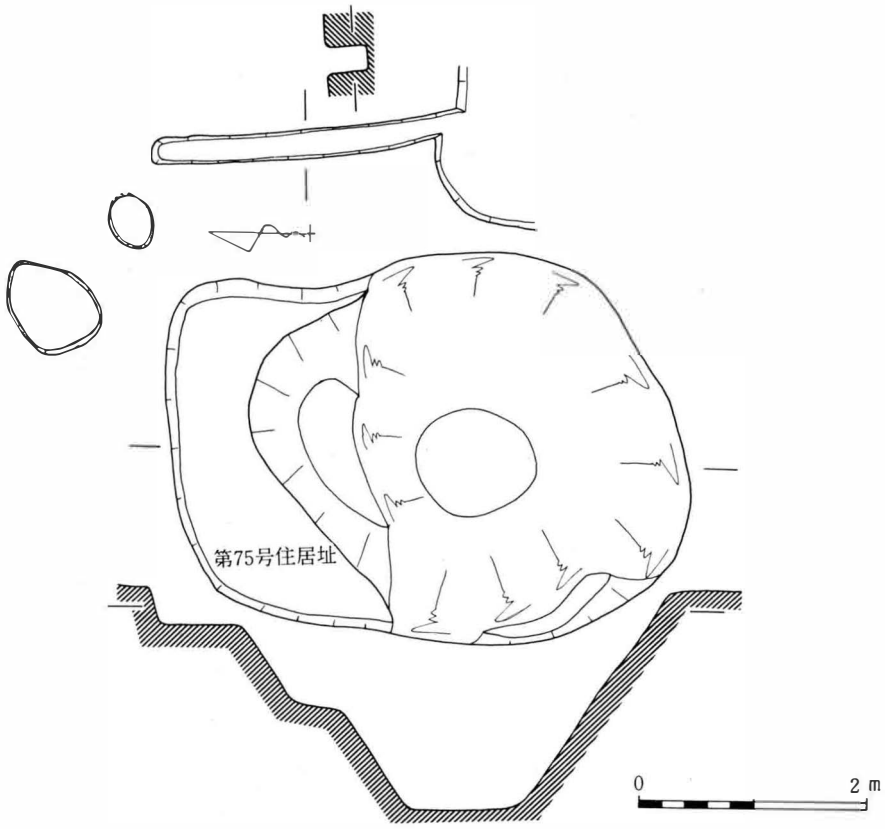
17　第75号住居址（第29・30図）

遺構　調査地西側に位置するが、第75号住居址及び井戸址3により切られていて、北側3分の1程が残存しているにすぎない。プランは隅丸不整方形を呈すと思われるが規模等は不明である。壁の掘り込みは傾斜を有し、25〜35cmを測る。床は平担で軟弱である。柱穴・カマドなどの住居址内施設はなかった。

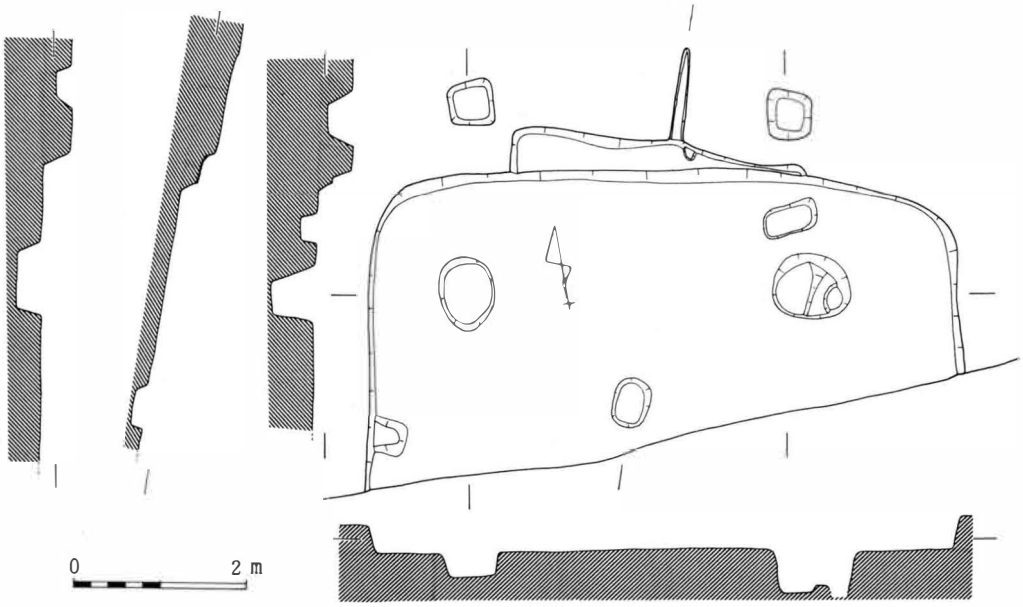
遺物　すべて覆土中からの出土である。量は少ないが、器種は土師器坏・甕形土器・須恵器杯及び外面にタタキ目のある甕形土器・蓋形土器等がある。図示したものは坏形土器で、1は土師器、2・3は須恵器である。1はロクロで成形され、底部はヘラによる切離痕を残し、内面を黒色処理される。2・3はともに直線的に外開する器形であるが、底部を欠き全形を知り得ない。　（直井雅尚）



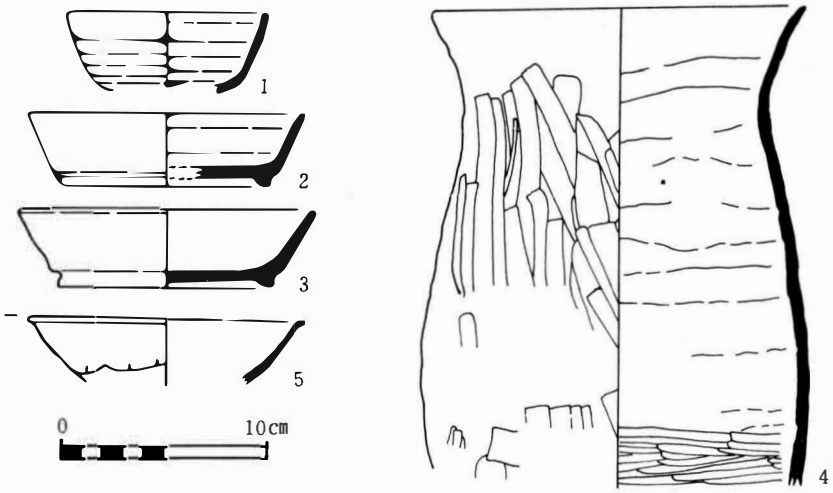
第29図　第75号住居址出土土器



第30図　第75号住居址、井戸址 3、溝址 5 実測図



第31図　第76・80号住居址実測図



第32図　第76（1～3）・77（4）・78（5）号住居址出土土器

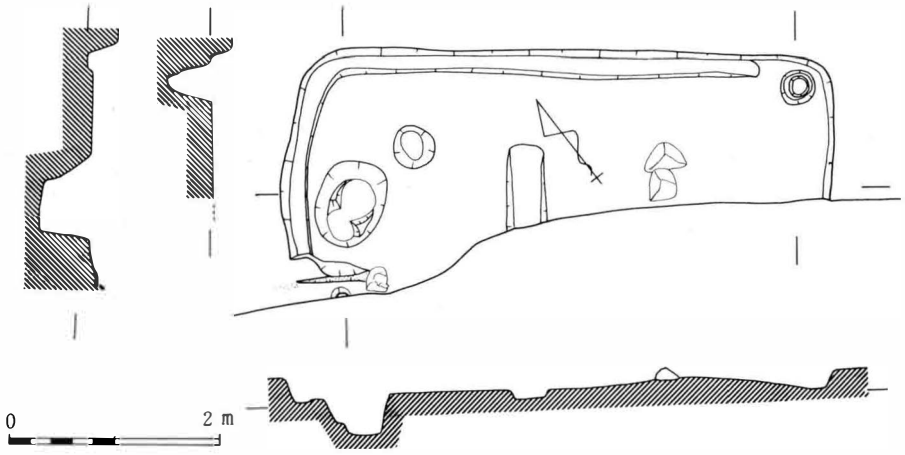
18　第76号住居址（第31・32図、第8図版）

遺構　調査地中央やや西寄りに位置し、第80号住居址を切り、第64号住居址によって東側半分が破壊される。また南壁とその付近は調査地外にかかっている。プランは一辺 6.7m のやや隅丸の方形を呈し、主軸方向はN－79°－Wを指す。壁はやや傾斜を有し北壁35cm・東壁28cm・西壁29cmの壁高になる。床面は平担で軟弱であり、第80号住居址の床面より平均して約17cm程低い。主柱穴は北壁に沿って径68・90cm、深さ27・49cmの不整円形のものを2個確認した。カマドは西壁に袖部の一部であろうと思われる焼土を伴う張り出しを確認したにすぎない。

遺物　すべて覆土中からの出土で量は少ない。土師器坏形土器、須恵器坏・甕形土器などの器種がみられる。図示した遺物はいずれも須恵器坏形土器で、内外面にロクロ目を残す。1は椀形で、2・3は直線的に外開する体部になり、口縁部はわずかに外反する皿形の器形になる。底部はヘラ切離痕を残し丸味をもち、外周に外開する高台を付す。　（小林秀行）

19　第77号住居址（第32・33図、第9・18図版）

遺構　調査地西側住居址群の南端にあり、南側半分が調査地外にかかる為未確認である。第83・84号住居址を切る。プランは一辺 5.1m の方形をなすと思われ、主軸方向はN－50°－Wを指す。壁は直に近く西壁20cm・北壁29cm・東壁17cmの壁高を測る。更に西・北壁直下すべてに周溝がめぐらされており、巾20cmで深さは床面より西壁下5cm、北壁下は中央が最深で9cmを測る。床面は中央がやや高く、たたきしめられており堅緻である。柱穴は北西隅付近に径38cm・深さ20cmのもの1個を確認した。カマドは東壁中央に設けられているものと思われ、ほとんど調査地外にかかっていて全容は確認できなかったが、粘土製両袖形のもので片袖に袖石を持ち、奥行き約90cm、更に煙道が70cm程延びていた。床面中央の主軸に対して垂直に走る溝は巾34cm、深さ9cmを測り、第83号住居址の周溝と考えられる。



第33図　第77号住居址実測図

遺物　床面・覆土から出土しているが、量はあまり多くない。器種としては土師器坏・甕形土器がみられた。図示した長胴の甕形土器はカマド内に横転していたもので、頚部は明確でなく口縁部がゆるく外開し、体部は直線的で体部中位付近に最大形のある器形になる。外面を刷毛状工具で整形され、内面に輪積み成形痕を残している。　（石上周蔵）

20　第78号住居址（第６・32図、第３図版）

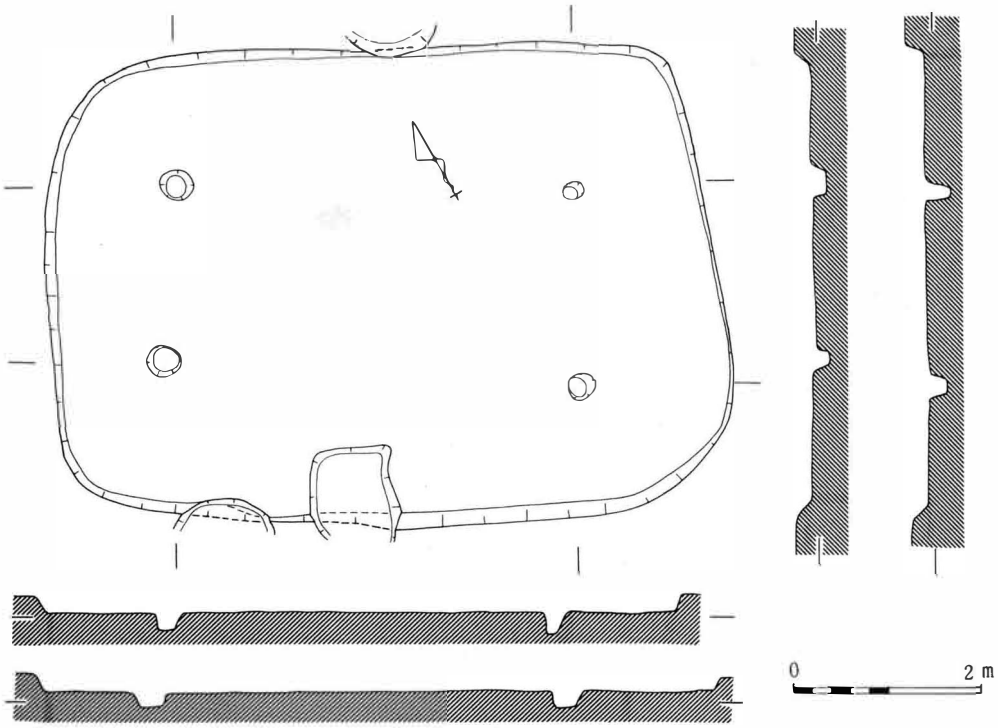
遺構　調査地中央付近に位置し、第61号住居址より新しい。南北軸は3.06ｍを測り、東西軸は調査手順の手違いにより不明であるが、不整方形を呈するものと思われる。掘り込みは直であるが浅く、10cmにすぎない。床面は平担で堅緻である。柱穴はなかった。

遺物　出土数４点で、覆土出土である。器種は土師器甕形土器片と図示した灰釉陶器である。灰釉陶器は口縁部が外反する皿形の器形を呈し、内面の釉はわずかに緑色を帯びている。

（直井雅尚）

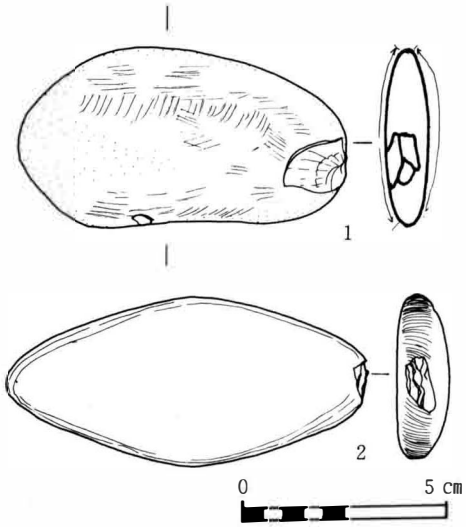
21　第79号住居址（第34・35・36図、第10・21図版）

遺構　調査地中央西寄りの建物址・住居址群中に位置し、第82号住居址を切り第２号建物址に切られる。プランはやや不整な隅丸長方形をなし、長軸 7.1ｍ・短軸 5.1ｍの規模を持つ。主軸方向は炉の位置からみて短軸と一致しＮ－32°－Ｅを指す。壁はやや傾斜を有し、壁高は北壁22cm・東壁16cm・南壁15cm・西壁18cmを測る。床面は平担で非常に堅緻であるが、わずかに西に傾く、主柱穴は方形配列で各隅付近に４個確認された。規模は径24～38cmで深さ15～36cmの範囲にあり、割と小形なものである。炉は北壁沿いの柱穴間内側にあり、その形態は主軸34cm・短軸24cmのわずかに窪む程度の地床炉であり、内に焼土を残す。また周辺に炭化物・灰の散在が認められた。



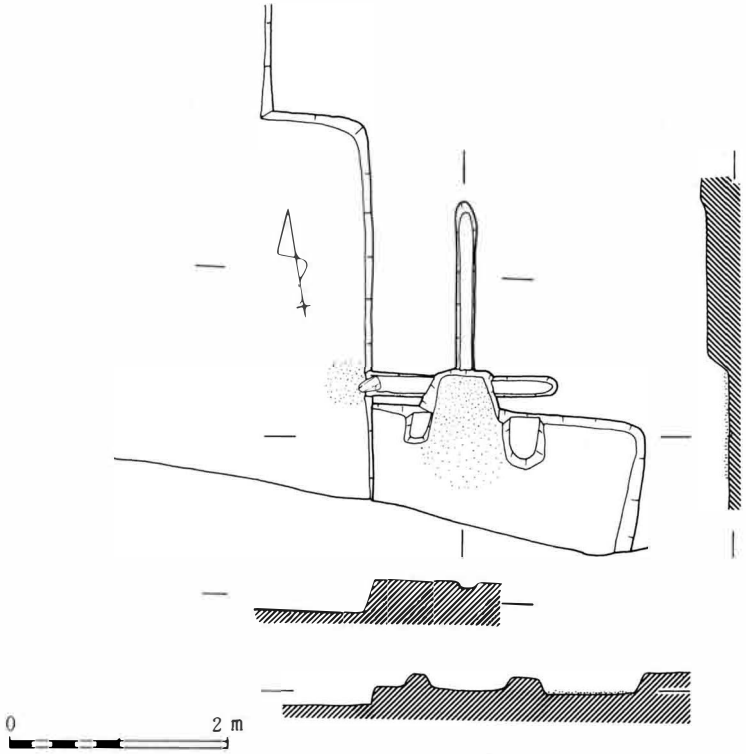
第34図　第79号住居址実測図

第35図　第79号住居址出土土器拓影



第36図　第79号住居址出土石器

遺物　出土量は少なく、すべて小破片で覆土中からである。器種には壺・甕・高坏形土器などがある。第35図1～4は壺形土器片で、1は口縁部が受け口の器形になり、頸部に簾状文がめぐり、文様帯以外は赤色塗彩されている。2～4は頸部片で櫛描平行線がめぐる。5・6は甕形土器の体部及び頸部で、櫛描波状文と簾状文が施されている。この他石製品に飾り玉様の磨石2点（1・2）が床面南西隅から出土している。2点とも扁平長楕円形で、1は一部に自然面を残すが、2は全面にわたってよく研磨されている。端部に敲打痕が見られる点は注意される。　（竹内　稔）



第37図　第81号住居址実測図

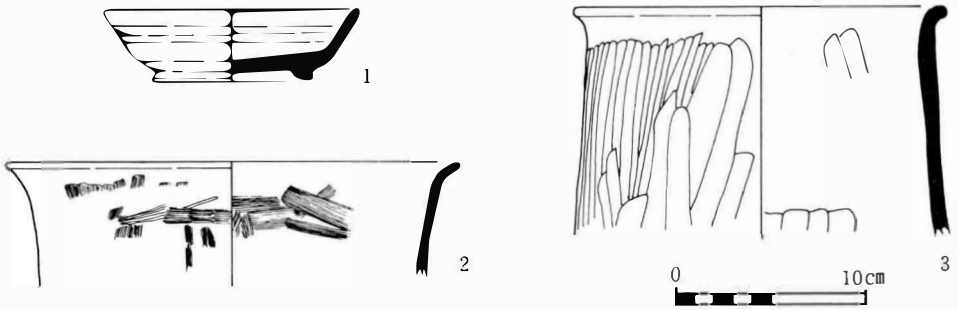
22　第80号住居址（第31図）

遺構　調査地中央やや西寄りに位置し、第76号住居址に切られ、北壁及びカマド付近がわずかに残存するのみである。プランは残った北壁より推定すると一辺 3.3ｍの方形を呈するものと思われる。壁の掘り込みは18～25cmを測り直に近い。わずかに残った床面は平担で軟弱である。カマドは北壁中央につくられており、調査時ではわずかに片袖の痕跡と煙道を残していたにすぎない。煙道は長さ 1.1ｍ・深さ16cmを測る。柱穴等は不明である。

遺物　第76号住居址に切られて遺構の残存部が極わずかだったので、遺物は数点の土師器坏形土器の小破片を得たのみである。　（直井雅尚）

23　第81号住居址（第37・38図）

遺構　調査地中央南側に位置し、南側半分以上は調査地外にかかり未確認である。第64号住居址に西側を切られ規模は不明である。プランは方形を呈するものと思われ、N－20°－E の主軸方向になる模様である。壁は30cmの掘り込みで、床面は平担良好で西側へ緩く傾むく。柱穴は確認できなかった。カマドは北壁中央やや東寄りに設けられ、両袖形で壁外へ張り出し、規模は奥行80cm・袖間70cm・煙道の長さ 1.6ｍ・深さ15cmを測る大形のものである。袖間には焼土がレンズ状に残っており中央部で10cmの厚さを測る。



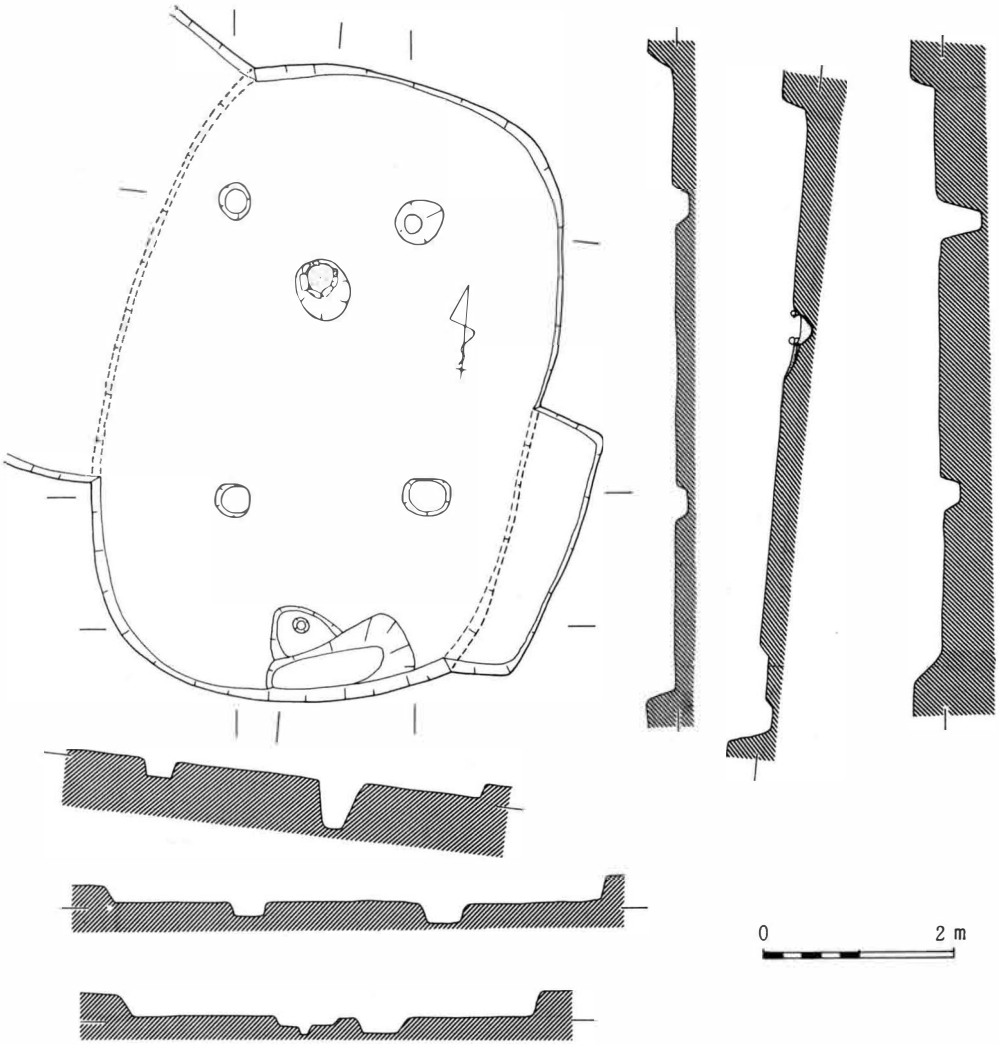
第38図　第81号住居址出土土器

遺物　調査できた面積が狭いため出土量も少なく、すべて覆土中からである。器種には土師器甕形土器・須恵器坏・甕形土器等がある。図示した遺物のうち1は須恵器坏形土器で、体部が直線的に外開し底部が平底状を呈し、ヘラケズリ痕が残る。高台は底部外周に外開するように付着される。2・3は土師器甕形土器で長胴形で口縁部が短かく外反し、体部が直線的になる点特色がある。主整形は2が刷毛、3がヘラ状工具による。　（竹内　稔）

24　第82号住居址（第39・40・41図、第11・19・21図版）

遺構　調査地中央西寄りの建物址・住居址群中で最も古い遺構で、第68・79号住居址に切られる。プランは全体的に丸味をもった隅丸長方形で、主軸方向を真北にとる。規模は主軸6.8m×東西軸 4.5m である。壁はやや傾斜を有し、27～30cmの壁高を有する。床面は平担で中央部はよくつき固められており堅い。主柱穴は方形配列で壁より内側で4個確認された。規模は径36～50cm・深さ15～50cmと不揃いである。炉は床面中央やや北寄りの北壁沿いの柱穴間内側にあり、径60cm程の円形の舟底状掘り込みに壺形土器の体部下半を埋設し、その周囲を長軸15cm程の細長い河原石で囲っている。炉内は炭化物が充満し、掘り込み内に焼土と炭化物の堆積がみられた。

遺物　土器・石器類が得られたが、量は少なくすべて床面及びその直上からである。器種には壺・甕形土器等がみられる。図示した土器はいずれも壺形土器である。1は頸部に横走する三条の沈線間を斜行沈線文を充填した横帯文とその下を鋸歯文で飾り、無文部分はヘラミガキされている。内面は橙色で刷毛により整形されるが荒れている。2は体部上半を欠き床面に炉として埋設されていたもので、内面は二次的な熱をうけて非常に荒れている。3は南西隅付近の床面につぶれた状態で出土したもので、内外面とも刷毛で整形されており、頸部に鋸歯文を伴う文様帯をもっている。内面は黒色処理をした如くに暗黒色を呈し荒れている。石器は他の遺構に比して種類が多い。1・2は磨石で、1は表裏に摩耗面を持ち、石質は硬砂岩である。2は摩耗面は一面だけで安山岩製である。3は砂石製の扁平な砥石で、表裏の主面の中央部がわずかに凹状になるが各側面とも使用されている。4は石包丁で刃部先端から裏側にかけて使用による摩耗痕をもつ。また表面稜部に手ずれによる摩耗と思われる光沢がある。側端部にもえ



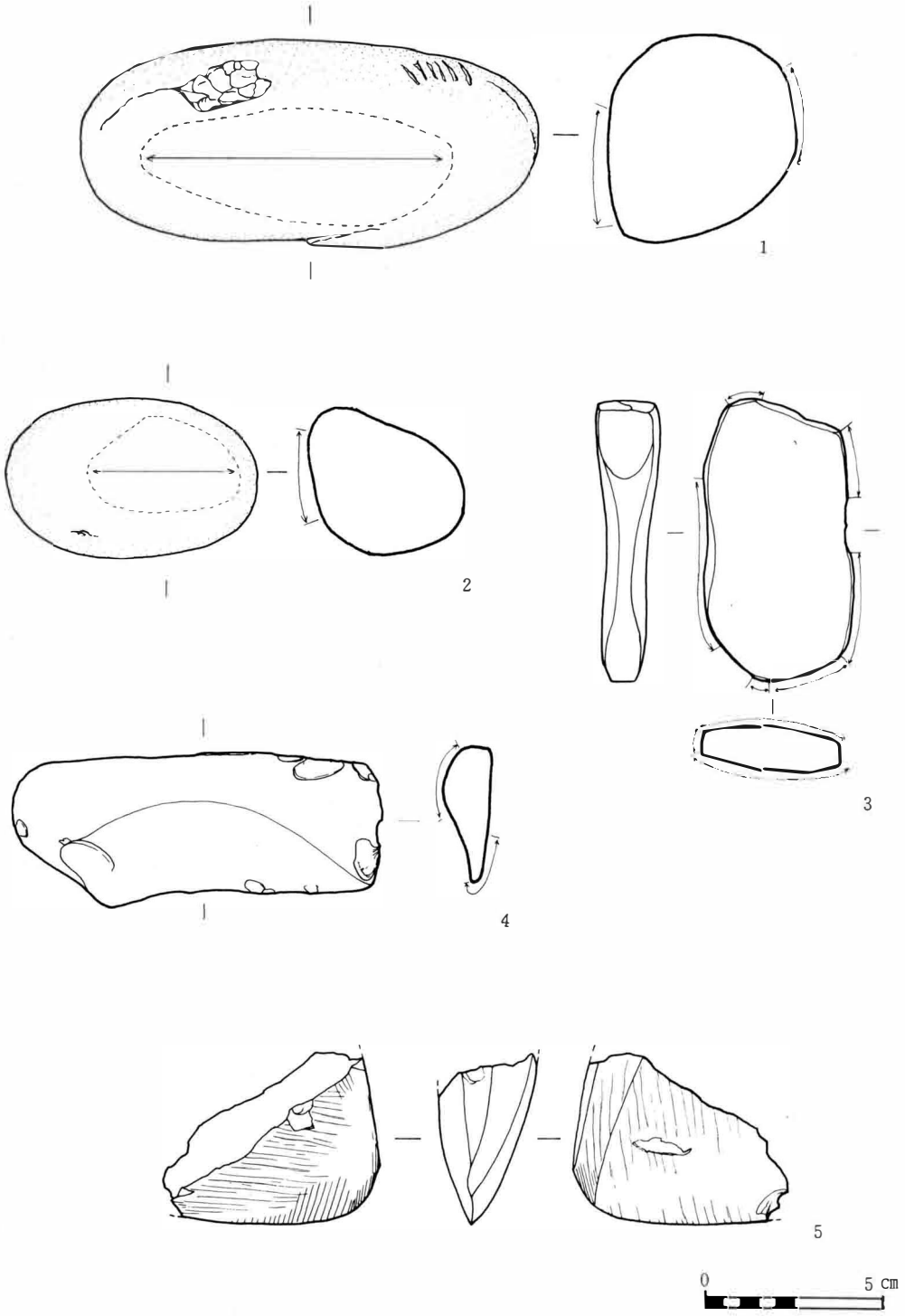
第39図　第82号住居址実測図

ぐりをもち手ずれの痕がある。5は太形蛤刃石斧の刃部破片で斜向する使用痕をもつ。

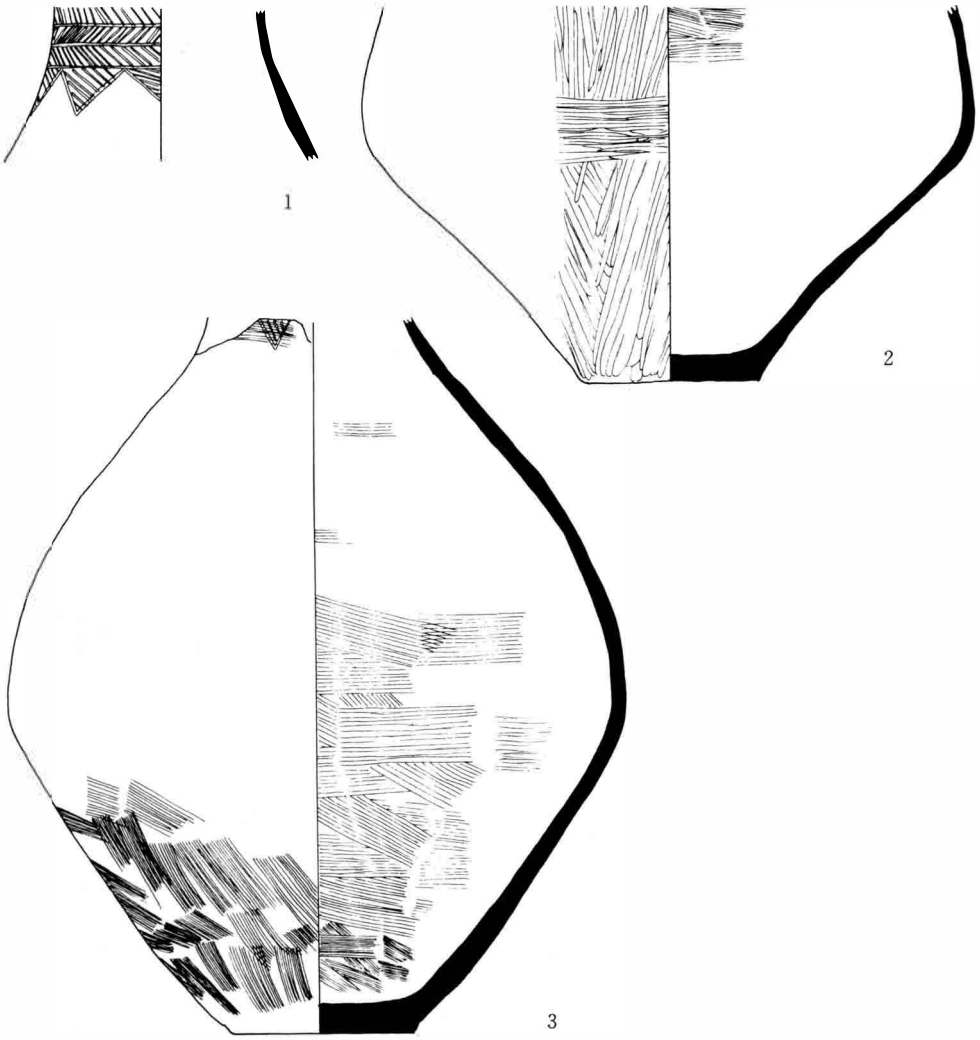
（竹内　稔）

25　第83号住居址（第42・43図、第9図版）

遺構　調査地西寄りに位置し、南側3分の2が調査地外にかかり、残りの東半分を第77号住居址に切られる。残存部分が少ないのでプラン・規模・主軸方向ともに不明である。壁は直に近く掘られ、床面まで26～30cmを測る。床面は平担で軟弱である。柱穴は北隅に1個検出され径46cm・深さ51cmを測る。他の2個は本住居址のものではない。調査範囲内では炉にあたるものは確認できなかった。



第40図　第82号住居址出土石器



0　10cm

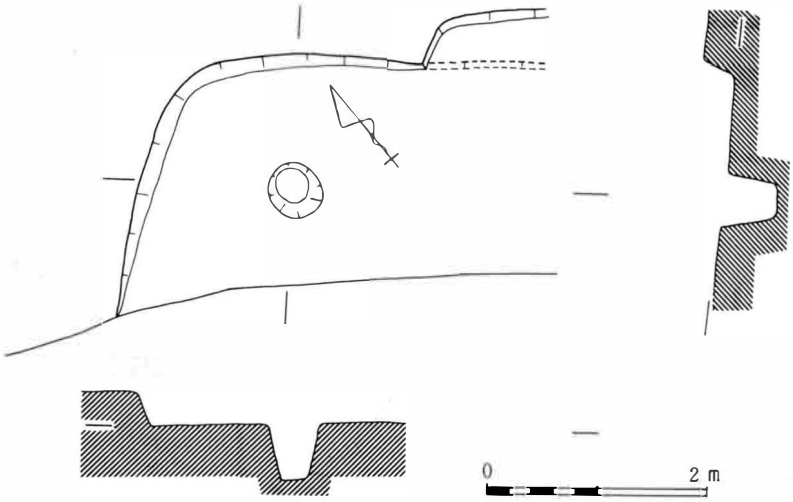
第41図　第82号住居址出土土器

遺物　調査面積が狭かったので出土量も少なく、土器片が数点あるだけである。器種には壺・甕形土器等がみられる。拓影で示した2点のうち2は焼成の非常に良好な淡黄色を呈す壺形土器体部上半片で、懸垂横帯文が施される。1は甕形土器の頚部で斜向する櫛描条痕文で飾る。

（石上周蔵）

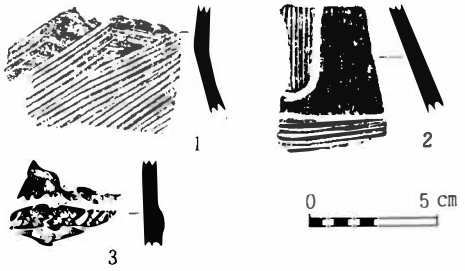
26　第84号住居址（第44・45図、第10・19・20図版）

遺構　調査地東側住居址群南寄りに位置し、南西隅コーナー部分を調査地外に残している。第59・71・77号住居址及び井戸址1に東隅を切られる。プランはやや不整な隅丸長方形を呈し、



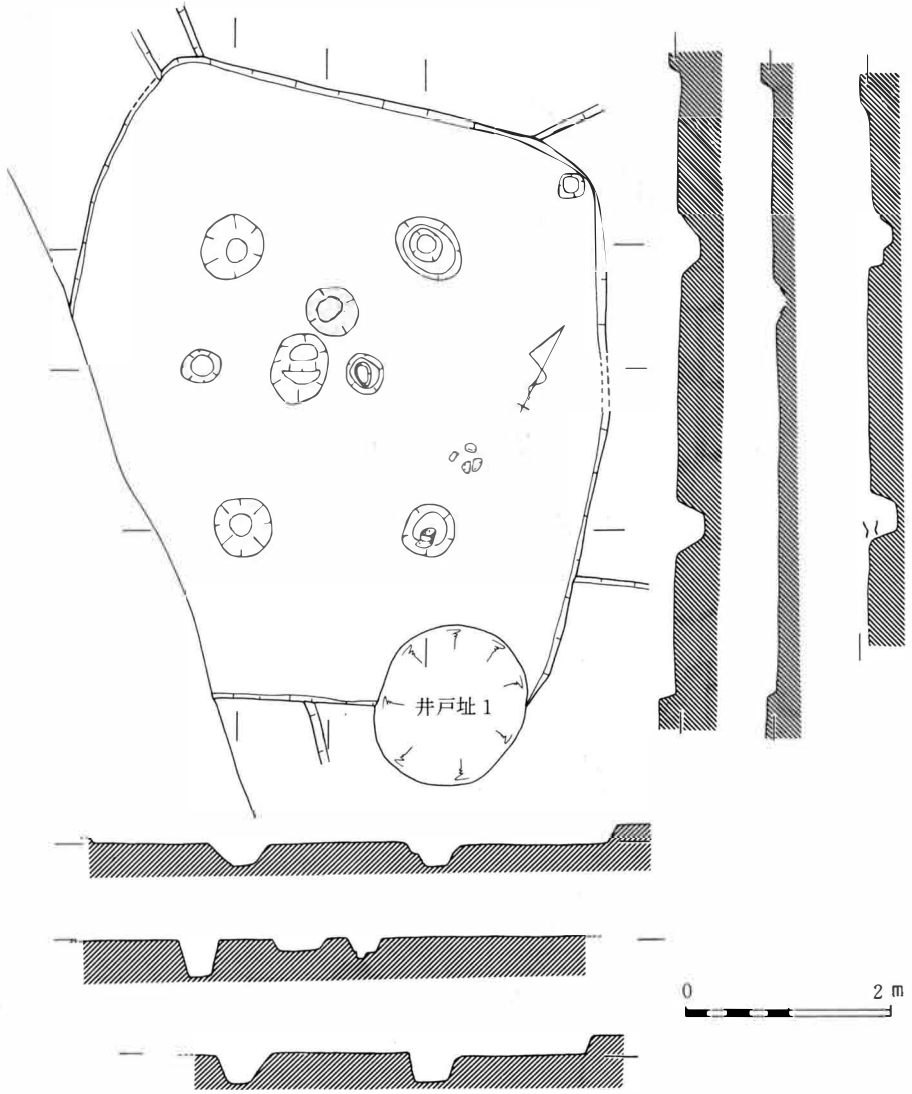
第42図　第83号住居址実測図

主軸方向がN —22°—Wを指し、主軸6ｍ×短軸 5.1ｍの規模である。壁はほとんどが他の遺構に破壊されて、わずかに北壁西隅で27cm・東壁19cm・南壁西半18cmの壁高数値が得られたにすぎない。床面は黄色の砂質層からなっており凹凸がみられ、柱穴間内側は堅くつき固められていたが、他は軟弱である。柱穴は方形配列でその規模は径50～70cm・深さ22～28cmの範囲にある。炉は床面中央やや北寄りに設けられ、径53cm・深さ12cmの円形ピット状を呈し壺形土器の体部下半を埋設し、内部には灰・炭化物が充満していた。



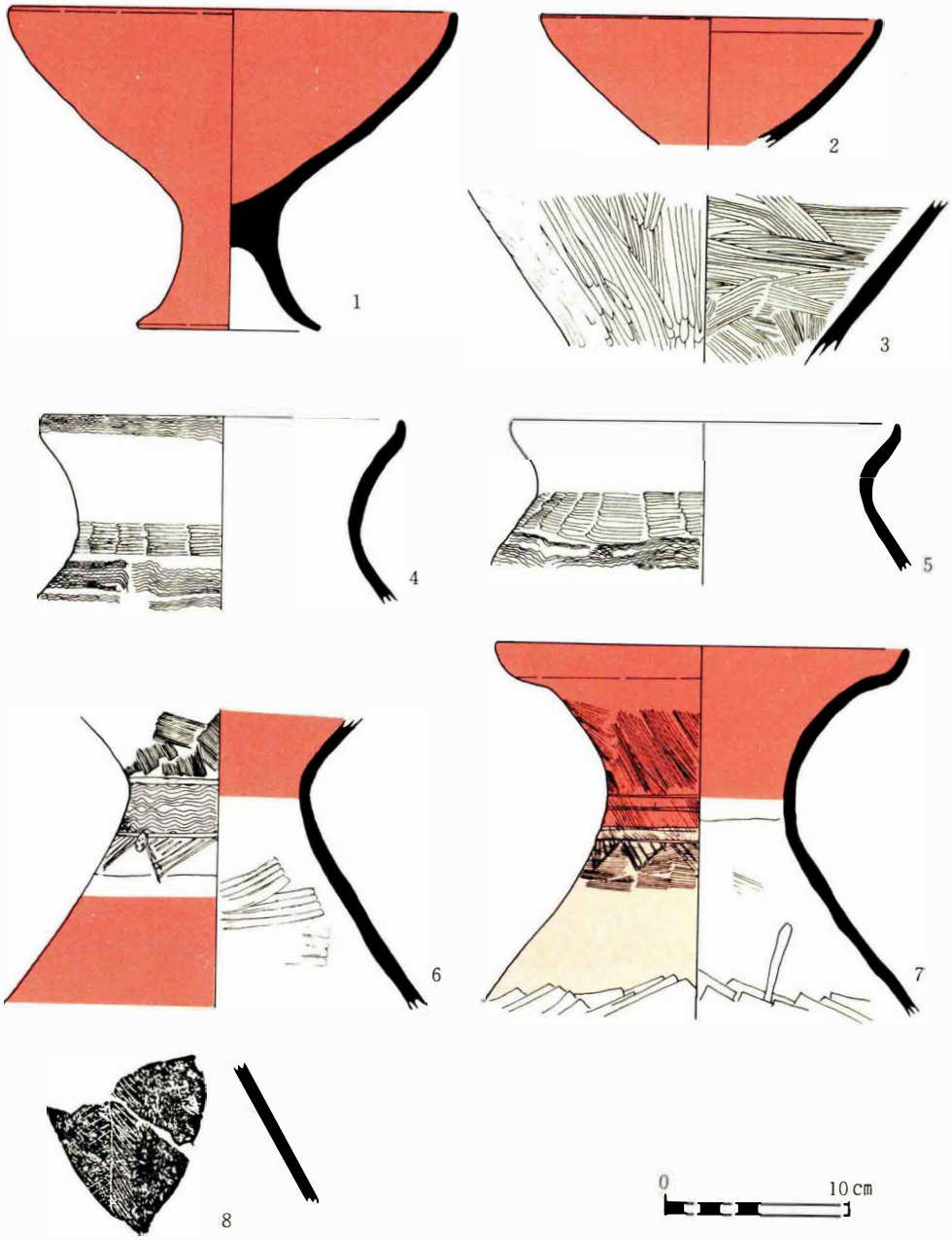
第43図　第83号住居址出土土器拓影（1：3）

遺物　出土量は多く、ほとんどが床面及び覆土下層からの出土である。器種は壺・甕・浅鉢・高坏・甑・蓋形土器等多岐にわたる。壺・高坏形土器などには赤色塗彩されるものが多い。図示した遺物はすべて床面出土である。1は柱穴内から出土した半完形の高坏形土器で、外面と坏部の内面に赤色塗彩が施されている。2は底部を欠くが浅鉢或いは高坏形土器になると思われる。内外面とも丁寧にヘラミガキされ赤色塗彩が施される。3は底部を欠く壺形土器の体部下半で、炉体として床面に埋設されていたものである。外面をヘラ、内面を刷毛で整形されている。4・5はともに甕形土器の頚部及び口縁部片である。4はやや内弯気味に立ち上がる。口縁端部と体部に振巾が小さく細かい波状文が櫛によって描かれ、頚部には簾状文が施文される。施文に使用された櫛は全て同一で9本歯のものとみられる。5も4と同様な文様帯をもつが、口縁部の波状文が施されない。櫛は6本歯のものを使っており簾状文は二段重ねになっている。6・7は壺形土器の体部上半で頚部に文様帯をもつものである。6は柱穴内から出土したもので焼成は良好で、色調は黄褐色を呈しているが、文様帯を除く外面全部と内面の頚部以



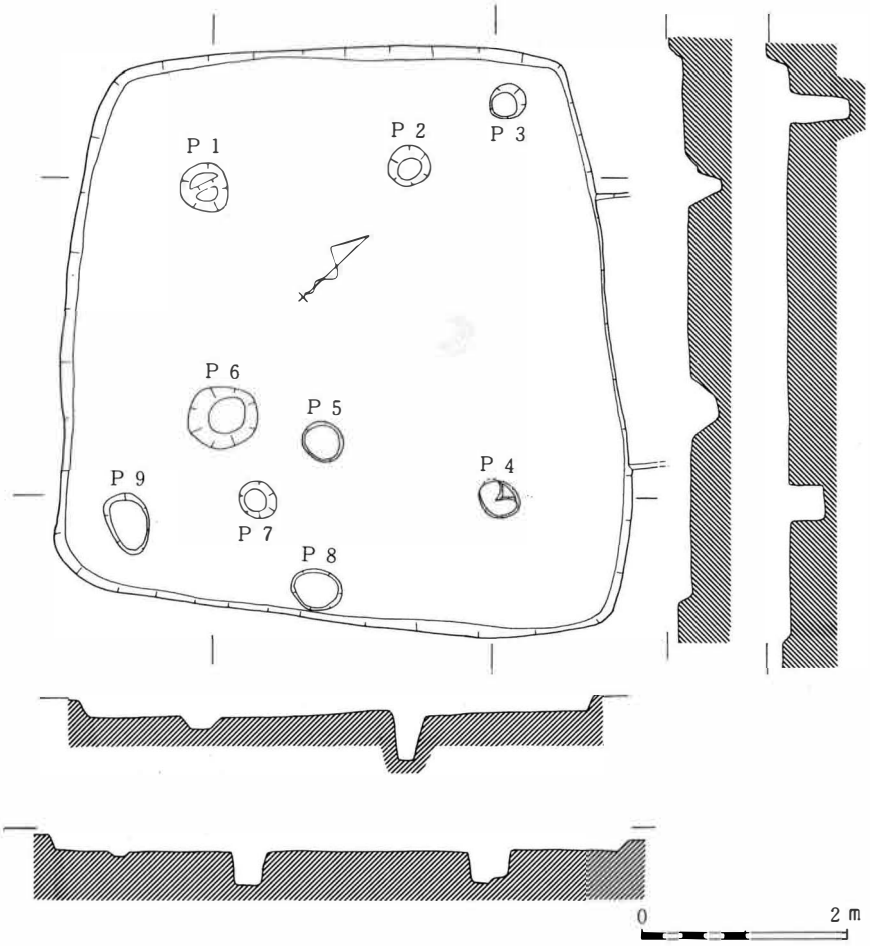
第44図　第84号住居址実測図

上に赤色塗彩された痕が明瞭に残っている。文様帯の施文順序は、①まず8本の歯をもつ櫛によって上から2条の波状文を描く、②その上下に横方向の沈線を引く、③鋸歯文の外枠を引く、④鋸歯文の内部沈線を充填する、⑤ボタン状の貼付文を貼りつける、という工程とみられる。整形は文様帯の付近と内面は刷毛状工具で、他の外面はヘラミガキされている。7は本住居址から出土したのは頚部以下であるが、第2次調査（昭和53年度）の際、土坑5から出土した口縁部と接合したのでその形で図示した。文様帯は頚部に横方向に4本の平行沈線を引き、その下に鋸歯文を配している。整形は文様帯付近と内面の所々に刷毛、他はヘラが使われている。頚部以上は内外面とも赤色塗彩され、文様帯にも施されていた痕跡がある。文様帯以下の体部



第45図　第84号住居址出土土器

には隣と２～５cmの間隔をおきながら、配列は不規則だが巾 0.5～１cmの線状で縦方向に赤色が残っている。しかしこれは液状の塗料が単にぬられていたと思われる状態で、全面に磨き込まれた痕とするには問題がある。拓影の８は赤色塗彩される壺形土器の胴部で、縦方向にヘラ描綾杉文が配され、文様内は赤色塗彩されない。　（小林秀行）

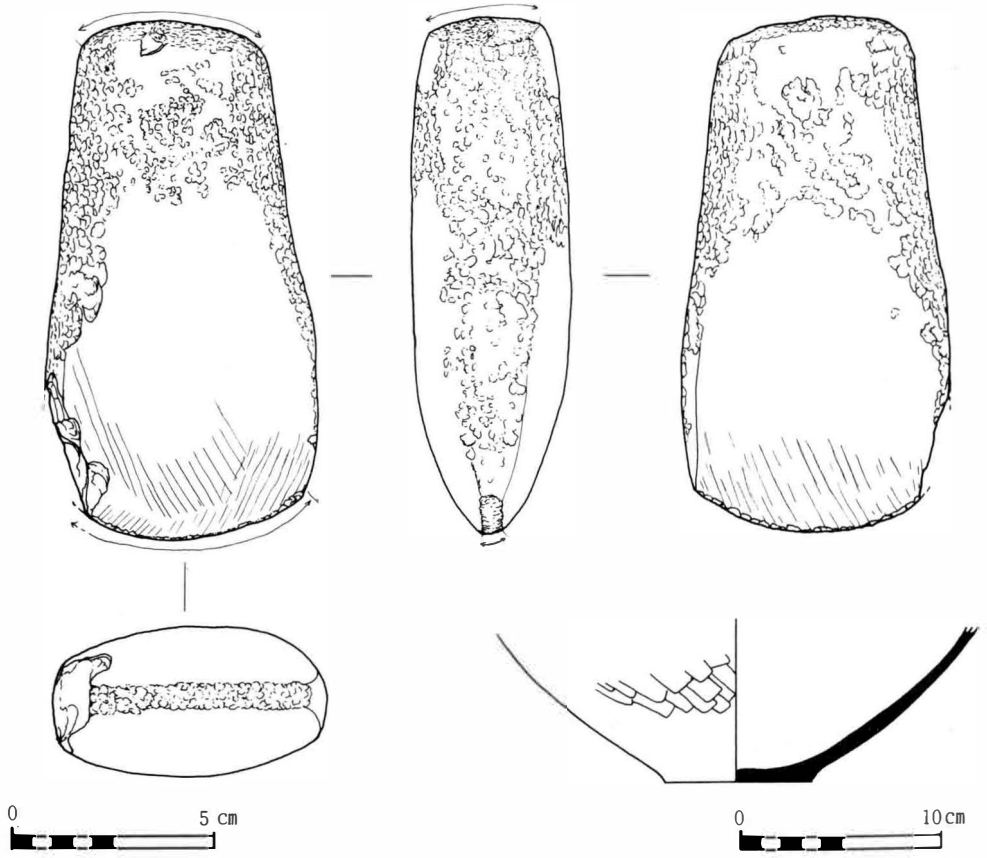


第46図　第85号住居址実測図

27　第85号住居址（第46・47図、第12・21図版）

遺構　調査地西寄りに位置し、第72号住居址に西壁の一部を破壊されている。プランは南北軸 5.6m×東西 5.4mのやや不整な方形を呈し主軸はN－45°－Wを指す。壁は傾斜を有し北壁10cm・東壁19cm・南壁14cm・西壁13cmを測る。床面は中央部は踏みしめられていて非常に堅緻で、その外周部も良好である。西壁の一部を切る第72号住居址床面より床面が3cmばかり低く、破壊をまぬがれていた。柱穴の数は多く、全部で9個検出されたが、主柱穴は不整方形配列の内側の4個である。規模は径32～50cm・深さ27～32cmの範囲にある。炉は床面中央やや北寄り、北壁に沿う柱穴の中間に位置する地床炉で、径1mに及ぶ灰の広がりを伴って、径34cm・厚さ5cmの焼土を残している。この他検出時から壁に沿って焼土粒が連なり、更に覆土中を掘り進むに従い、下層に多量の焼土粒及び炭化物が残っていた。

遺物　土器・石器の出土があったが量は少ない。床面・覆土中からの出土である。土器は体部が球形に近い甕形土器、赤色塗彩され脚部に3孔を有する小形器台形土器等がある。いずれ



第47図　第85号住居址出土石器・土器

も小破片で、図示できたものは１点にすぎない。石器は所謂太形蛤刃石斧で、東壁下の床面から出土した。刃部は使用によってつぶれ細かい敲打痕を残している。基部から刃部にかけて肩を有し、最大巾は刃部にある。使用痕の方向、刃部角の欠損、成形時の敲打痕の残存状態から平行刃斧（縦斧）であると思われる。再使用品であろう。　（竹内　稔）

28　第86号住居址（第48・62図）

遺構　調査地西端の第66号住居址の上部に存在したが、当初検出面を低く設定した為調査地の境界壁の断面の中で捉えられた。プラン・主軸方向等全く不明であるが、断面中の床面の長さは 3.8ｍを測る。壁は傾斜があり、25～30cmの掘り込みをもつ。中央に径65cm・深さ25cm程のピットがある。床面上には４～10cmの炭化物・灰を含む層があり、土器片が出土している。

遺物　土師器坏・甕形土器の破片が数点得られた。坏形土器はロクロ目を顕著に残し、糸切り底をもち内面黒色処理されるものである。甕形土器は上部がロクロ整形され、下部はヘラケズリされる。　（直井雅尚）

第２節　柱穴群

１　第１号建物址（第49図、第７図版）

遺構　調査地最東端にあり、８本柱で東西１間・南北３間の間取りを持つものである。第69号住居址をＰ２・Ｐ３が切っている。長軸はＮ―29°―Ｅの方向になる。短軸方向の１間の距離は3.1ｍ・長軸方向の１間は平均して1.65ｍを測るが、Ｐ１～Ｐ２、Ｐ７～Ｐ８間は２ｍ近く間隔にばらつきがみられる。ピットはＰ２・３・８が隅丸の方形を呈するが、全体に楕円形に近い形状である。長軸の長さ50～70cm、深さはＰ４が12cmである以外は約20cmである。Ｐ２・３・４には直径10cm前後の柱痕が確認された。

遺物　遺物の出土はみられなかった。

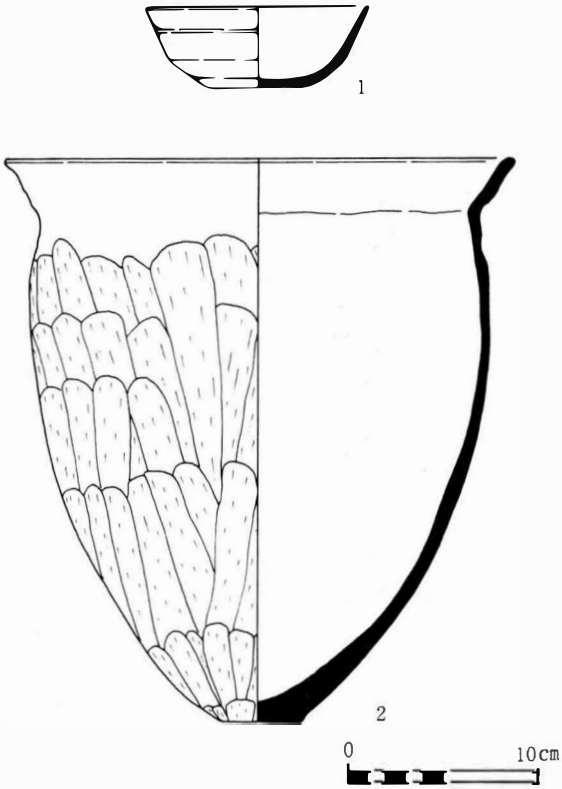
２　第２号建物址（第50図、第12図版）

遺構　調査地中央部に位置し、第79号住居址を切る。掘り方は10個確認されＮ―25°―Ｅに長軸方向を取り、２間・３間の方形配列を呈する柱穴群である。長軸方向の１間は1.3ｍ・短軸方向においては1.8ｍを測る。掘り方は0.7～1.0ｍの円形で、深さ17～33cmであるがほぼ同一な規模を持つ。壁は直で、床面は平担である。全体の配列の中でＰ５がやや短軸方向において北側へずれる。

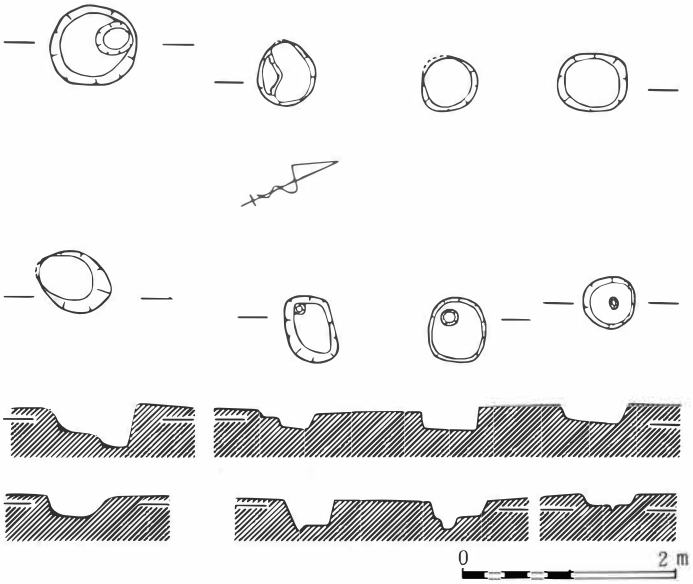
遺物　掘り方及び上面からこの遺構に関与すると思われる出土遺物はなかった。

３　第３号建物址（第51図、第12図版）

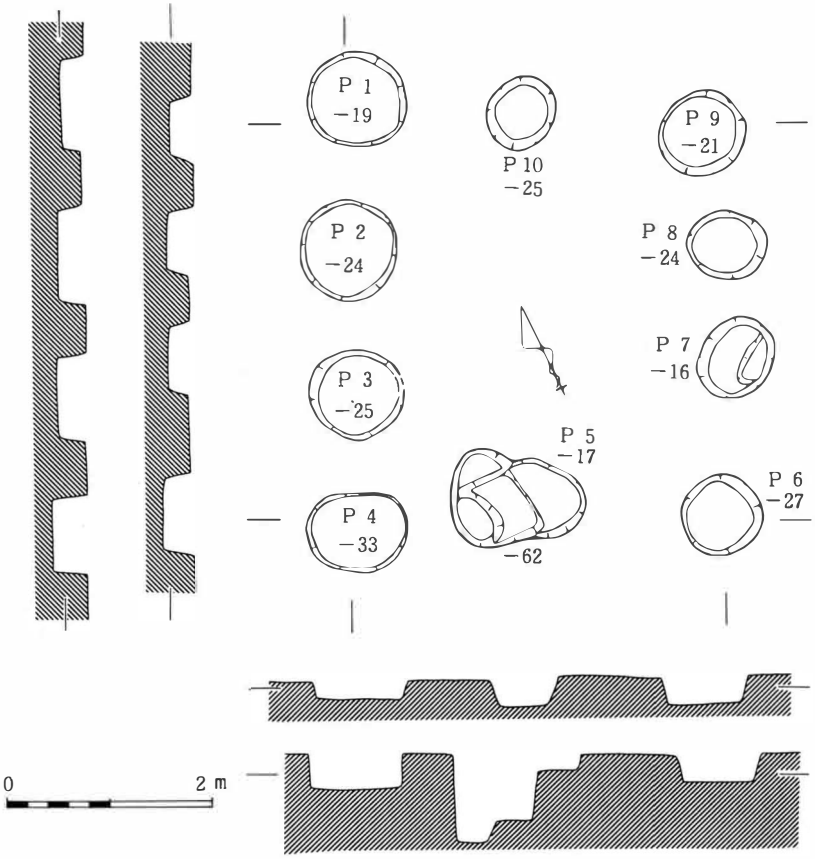
遺構　調査地中央部、第２号建物址の北側にあり、11個の掘り方の配列によって想定される。長軸の方角はＮ―38°―Ｅを指し、長軸３間・短



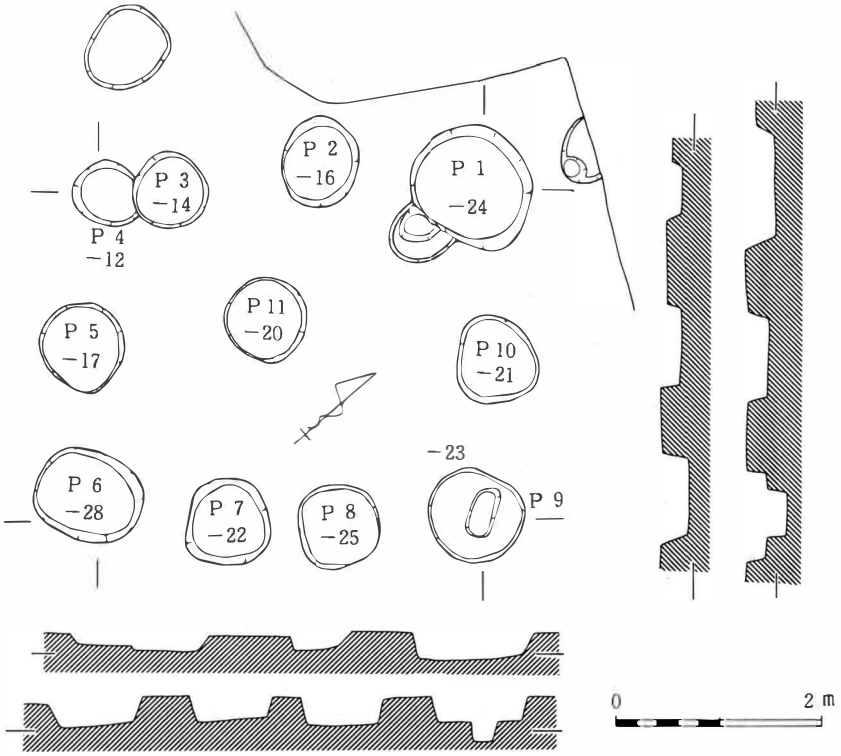
第48図　第86号住居址出土土器



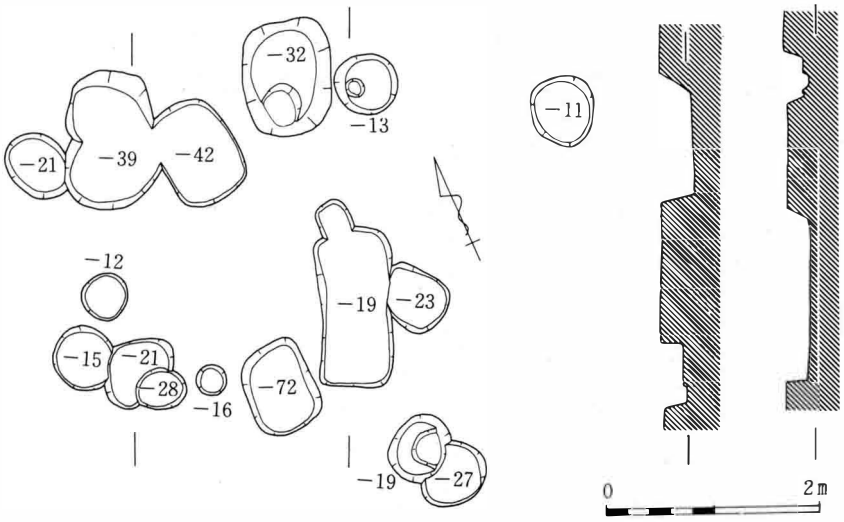
第49図　第１号建物址実測図



第50図　第２号建物址実測図



第51図　第３号建物址実測図



第52　その他の柱穴群実測図（1）

軸２間、１間の間隔は長軸方向 1.3ｍ・短軸方向 1.7ｍを測る。第２号建物址とほぼ同様な規模を持つものと思われるが、西側における長軸方向の掘り方は規則的な距離にならず、東側とは不調和である。また中央にＰ11がある点異なる。形状は不整円形であり、規模も 0.7ｍ（Ｐ３・Ｐ４）〜1.2ｍ（Ｐ１・Ｐ 6）と差が大きい。深さは12cm〜28cmの範囲にあるが23cm前後の

ものが多い。壁は垂直で、底面は平担である。

遺物　掘り方内及び上面からもこの遺構に関係ある遺物の出土はなかった。

4　その他の柱穴群（第52・53図）

遺構　2軒の建物址と共に調査地中央部南側に集中する。建物址の柱穴に比べるとより方形を呈する。径 0.3～ 1.5ｍ・深さ15cm～73cmと規模に大小はあるが、第2号建物址のＰ5を切る柱穴を頂点として、ほぼ南北・東西方向に展開する。柱穴列としての形態はとらない。中には柱痕の可能性あるピットを内包するものもある。

遺物　掘り方内及び上面から本遺構に関係する遺物の出土はなかった。　（竹内　稔）

第3節　井戸状遺構

1　井戸址1（第2図、第2図版）

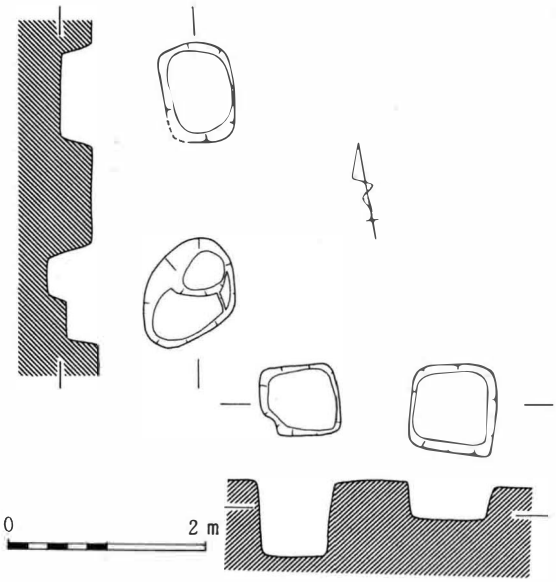
遺構　調査地南東端にあり、第57・84号住居址を切る。上部プランは直径 1.5ｍの円形を呈し、第57号住居址検出面より深さ2ｍを測る。壁はほぼ垂直で、底面は10cm程北に傾いていた。

遺物　出土量はほとんどなく、土師器・須恵器片数点を得たにすぎない。

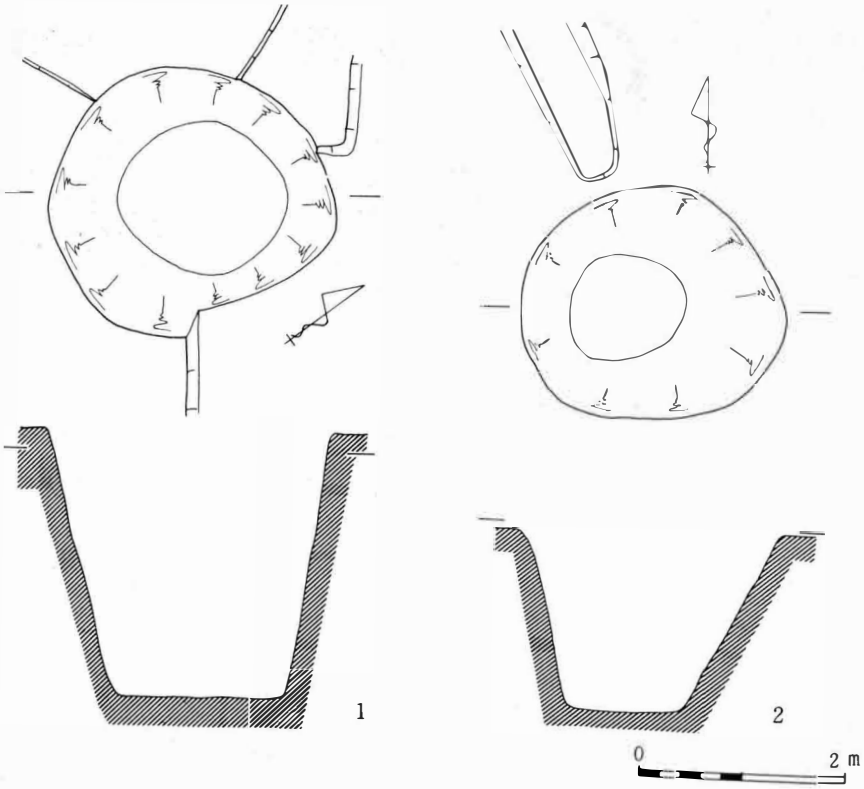
2　井戸址2（第54・55・56図、第22図版）

遺構　調査地東方、第1号建物址の西側に位置し第69・71号住居址を切る。平面形はほぼ円形で直径は検出面において3ｍ、底面では 1.5ｍを測る。深さ 1.8ｍと他の井戸址に比べ浅く、底部にゆくほど狭くなる擂鉢状を呈する。底面は平担である。

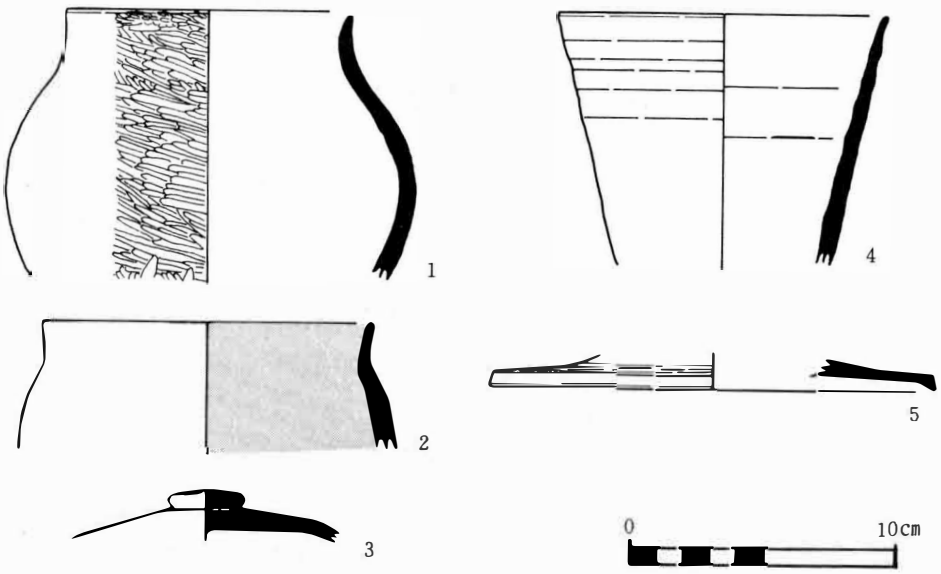
遺物　出土量は少ない。土器は弥生時代の丹塗土器片の他、土師器・須恵器の小片が十数点出土しているにすぎない。図示したものは1の外面を丁寧にヘラミガキした短頸壺形土器、2の内面黒色を呈する小形甕形土器、3の扁平なつまみを持つ須恵器蓋形土器である。また針葉樹の材を割り裂き、鈍い利器で小口を断ち切った薄板が1点出土している。



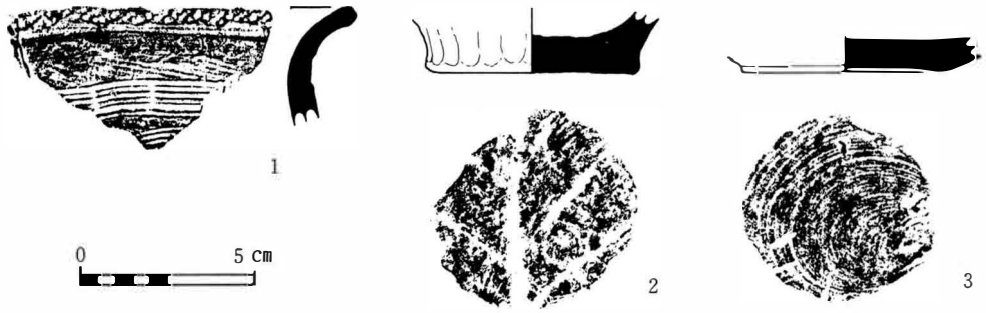
第53図　その他の柱穴群実測図（2）



第54図　井戸址２（１）・４（２）実測図



第55図　井戸址２（１～３）・４（４・５）出土土器



第56図　井戸址２（１）・３（２・３）出土土器拓影

３　井戸址３（第30・56図、第14図版）

遺構　調査地北西隅にあり、第75号住居址の大半を切る。平面はステップ状の中段を持つ不整円形で、上部最大径４ｍ・底面 1.1ｍの断面擂鉢状を呈する。検出面より底面まで２ｍ、中段まで１ｍを測る。

遺物　出土量は少なく、木葉痕を有し二次焼成をうけた土師器長胴甕形土器底部、内面黒色処理を施された糸切り痕を持つ土師器坏形土器底部が出土している。

４　井戸址４（第54・55図、第14図版）

遺構　調査地東隅住居址群内にあり、第60・69号住居址を切る。平面形はほぼ円形で、検出面における直径は約 2.5ｍ・底面 1ｍ・深さ 1.7ｍを測る。直に近い壁面を呈す。

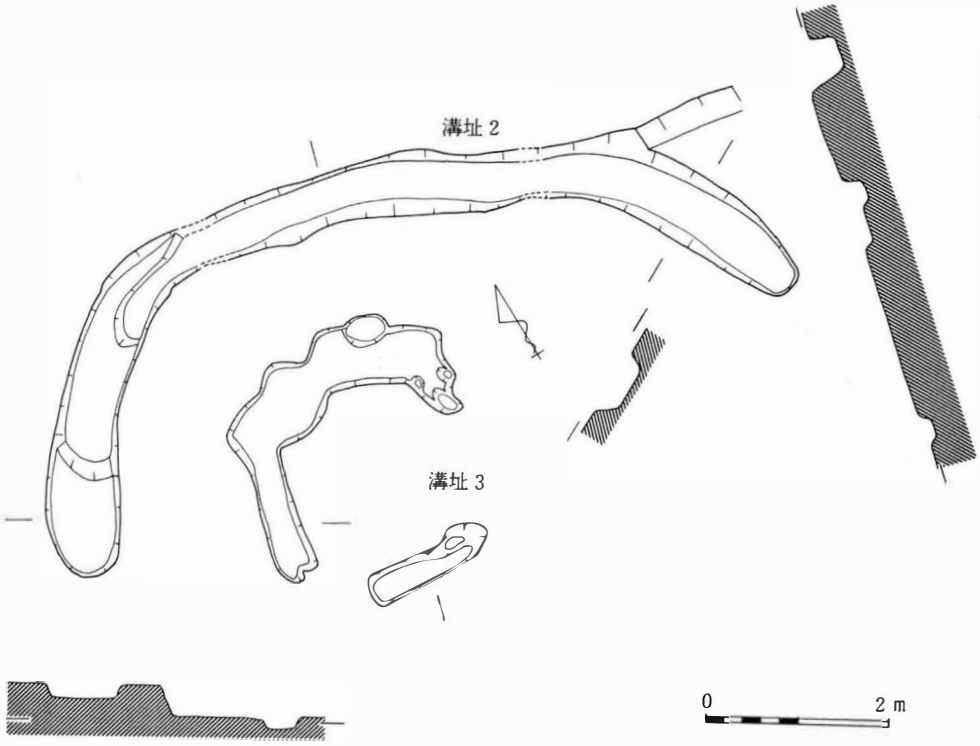
遺物　出土量は少ない。赤色塗彩された壺形土器、土師器甕形土器、須恵器コップ・蓋・甕形土器片等が出土している。　（竹内　稔）

第４節　溝状遺構

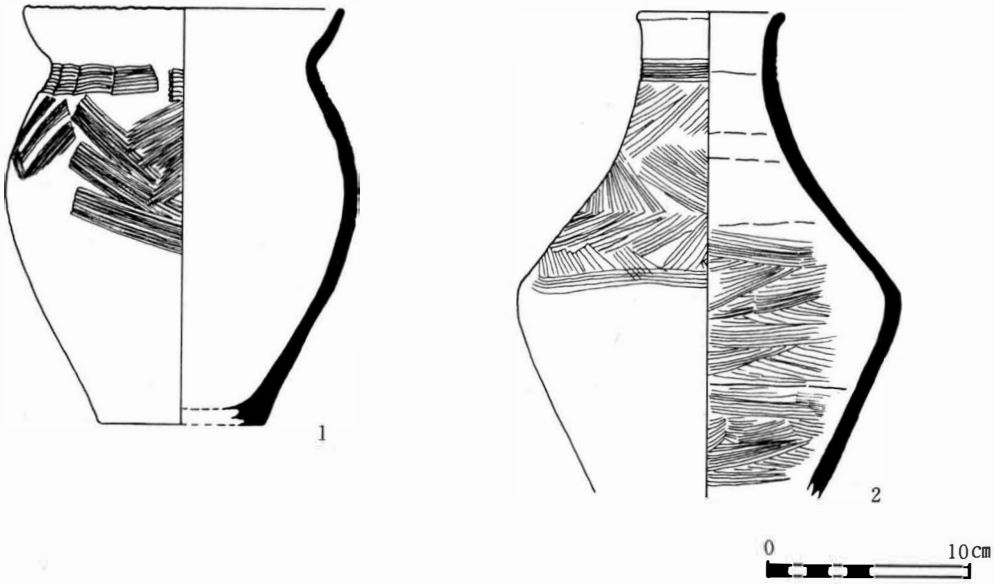
１　溝址２（第57・58図、第13・20図版）

遺構　調査地東方住居址群の北側において第60・67・70号住居址に切られる。南側に中心をおいて東西方向に弧を描く断面Ｕ字状の遺構である。長さ約11ｍ、幅はほぼ 0.6ｍであるが、深さは西方端が13cmであるのに対し東方の最深部では35cmを測る。検出面のレベルは東西において30cmの差がある点、フラットでない面へ掘り込んだ可能性もある。

遺物　覆土中からの出土は土器破片が数点あるのみだが、中央部及び西寄りの底面より半完形品が出土している。１は西寄り底面から出土した甕形土器で、口縁部が「く」の字形に外開し端部に至って内弯し、最大径が体部中央やや上方にある器形になる。施文は８本の歯をもつ櫛状工具により頚部に簾状文、体部上半に「ハ」の字をくり返す斜行条線文、また口唇部に刻みを施す。２は中央部の底面より出土したもので、底部を欠くだけの半完形品である。体部中央が「く」の字形に張り、頚部にかけて大きくつぼまり、そのまま口縁部に至り端部がわずか



第57図　溝址 2 ・ 3 実測図



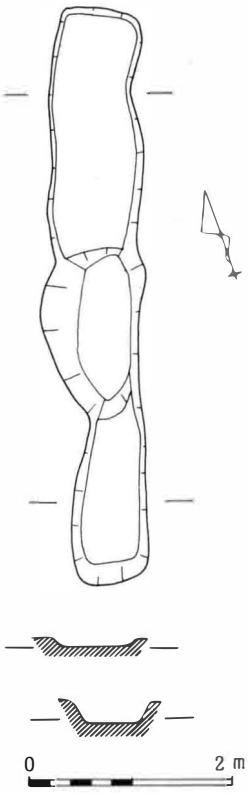
第58図　溝址 2 出土土器

に外反する器形を呈す。施文は4本歯の櫛状工具で頸部と体部中央に平行沈線文をめぐらし文様帯を画し、その中を同じ櫛で描いた連続する綾杉状の斜行条線文で埋めている。内面下部に刷毛整形がある他はヨコナデとミガキ様タテヘラナデ整形である。

2　溝址3（第57図、第14図版）

遺構　溝址2の南方に位置し、第67号住居址床面精査の際確認された。形状は不整形であるが溝址2の南部にあって調和的な弧乃至は一辺2mの方形を呈するようにも見える。巾は0.5～0.7m・深さ13cmを測り、底面には凹凸が見られる。

遺物　非常に少なく10数点の土器片があるのみで、すべて上部検出面からの出土である。上部に住居址があり土師器坏形土器片がみられたが、櫛描波状文を有する甕形土器片が出土している点注意される。



第59図　溝址4実測図

3　溝址4（第59図）

遺構　調査地中央部北側に位置し、第2・3号建物址の西方にあって、南北方向に直線的に延びる遺構である。長さ5.5m・巾0.6m～0.9m・深さ10cmを測り、遺構中央部に一部深さ25cmの楕円形のピットが存する。壁は直に落ち、底面は平担である。

遺物　出土遺物はなかった。

4　溝址5（第30図）

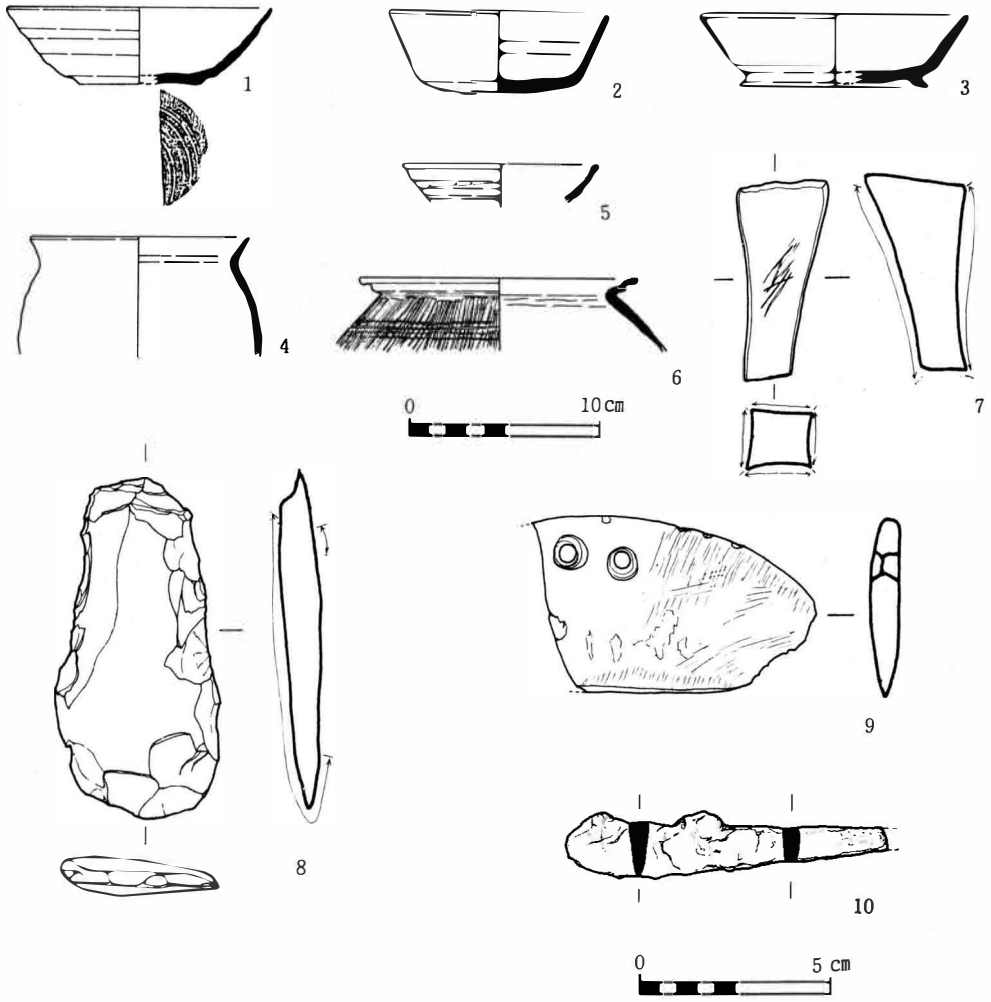
遺構　調査地西側において南北方向に延び、南端を第72号住居址によって切られる。長さ2.5m・巾0.2m・深さ35cmを測り、巾の割に深い。遺物が得られず、時期・性格は不明である。

遺物　遺物の出土はみられなかった。　（竹内　稔）

第5節　その他の遺物（第60・61図、第22図版）

遺構に伴わない遺物をとり上げる。調査地は遺構が密集するため、みるべきものはそのほとんどが遺構と関連し、包含層出土のものは意外と少ない。

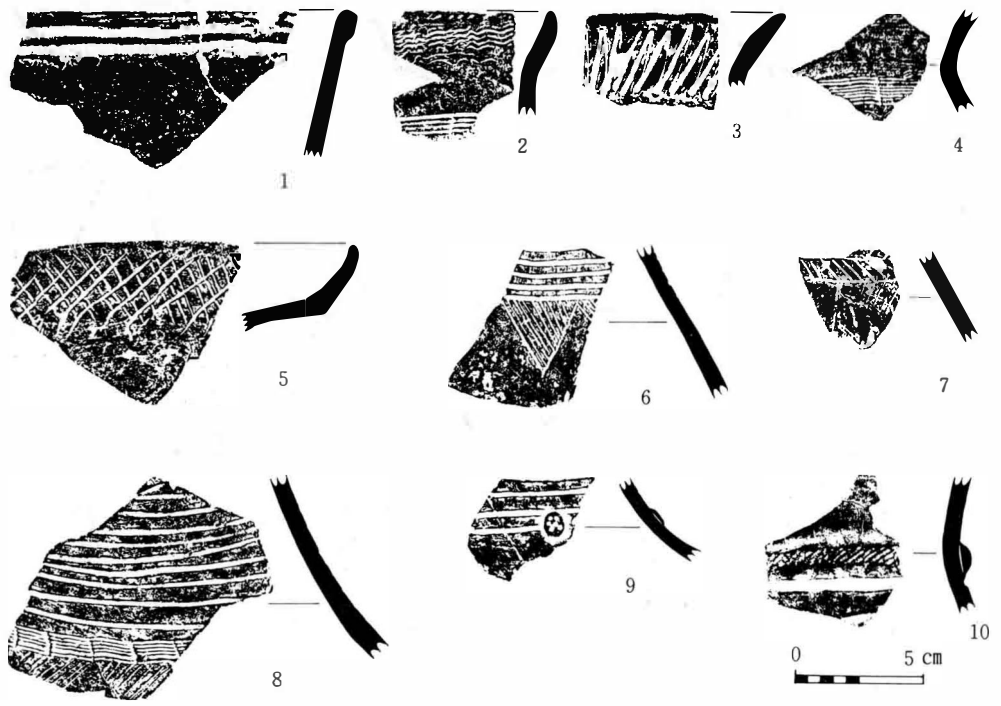
縄文時代（第61図1）　土器接合中発見したもので、出土位置は不明である。口縁部外面に太い2条の沈線をめぐらし隆帯をつくり出し、内面にも1条の沈線がめぐる晩期に属する深鉢



第60図　その他の出土土器（1～6）・石器（7～9）・鉄器（10）

形土器で、3次に亘る調査の中で唯一の縄文時代資料である。

弥生時代（第61図2～10）　すべて破片で、拓影でその文様が施される部位のみ提示した。2・3は甕形土器の口縁部付近片で、2は口唇部に列点様刻みを入れ、その下部に波状文をめぐらし頸部に簾状文を施す。3には振巾の大きいヘラ描き波状文が口縁部全体に施文される。他は壺形土器片で、口縁部（5）・頸部（4・10）及び体部（6～9）の部位である。10は他のものより先行する土器で、頸部くびれ部に粘土が貼りつけられ、その上を縄文で施文され、その下方に太い棒状工具で横走する沈線をめぐらす。他は同時期のものと思われ、5は口縁が受口になり、逆方向のヘラ描き斜行条線を組み合わせる文様になり、口唇部付近及び内面は赤色塗彩される。4は簾状文で、6は横走する平行沈線下の内を斜行条線で埋める鋸歯文を組合せ、更に8には平行沈線文下に簾状文を入れたもの、7は鋸歯文の上に2本の平行沈線文内を



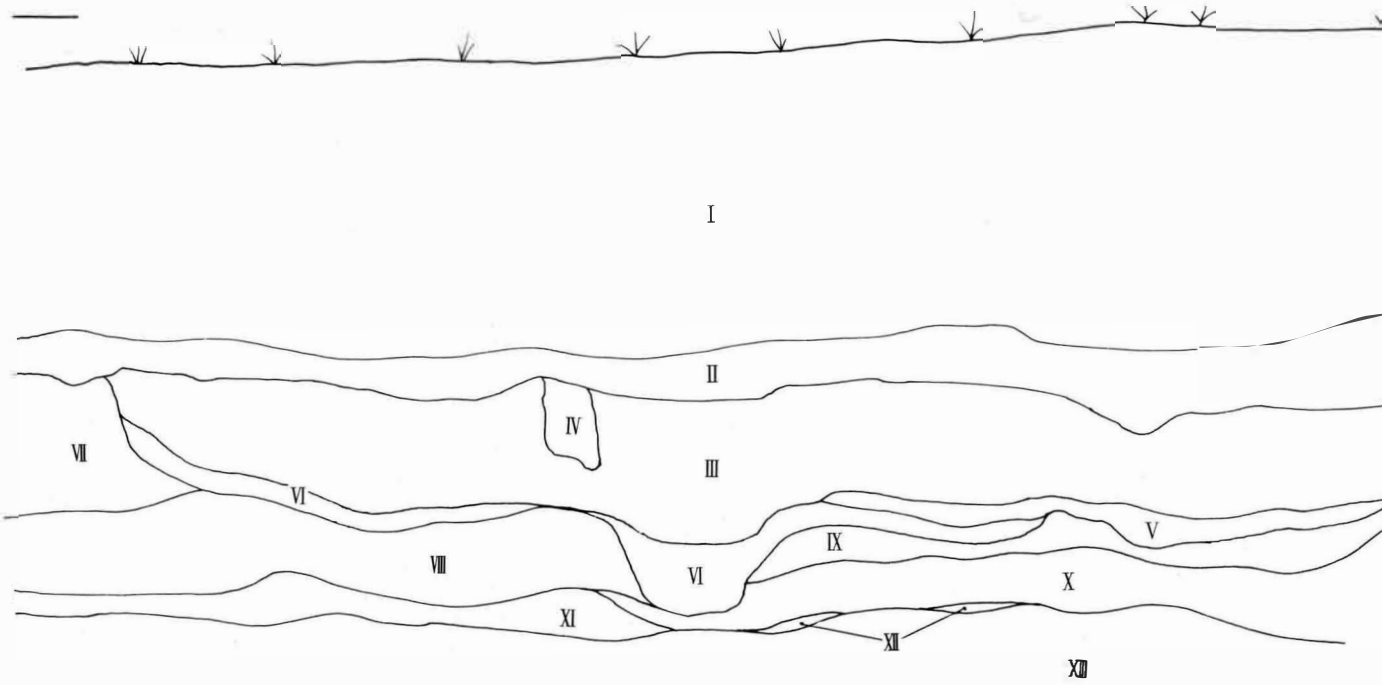
第61図　その他の出土土器拓影

斜行する条線でうめた文様帯を構成する。この他９にはボタン状貼付文がある。

古墳時代（第60図６）　所謂S 字状口縁をもつ甕形土器片で、第84号住居址プラン追求中に発見した。頚部が強く屈開し、口縁外部はS 字状をなしその稜は鈍い。整形は頚部下肩部にかけタテ方向の刷毛ナデが施され、肩部にヨコ方向に同工具による１回のナデが認められ、その痕跡は良く残っている。色調は淡白褐色である。

歴史時代（第60図１～５）　１～３は須恵器坏形土器で、２・３はロクロからの切り離しをヘラによっており、３には外開する低い高台が付される。１の切離は糸によりその痕跡を残している。４はロクロ水引技法によりつくり出された土師器甕形土器である。５は灰釉陶器で、やや青みがかった透明の釉がかかる。

石器・鉄製品（第60図７～10）　第60図８は粘板岩製の打製石斧で片面と刃部が著しく摩耗している。9は２孔を有する粘板岩製石包丁、7は白色の凝灰岩製砥石である。また図示できなかったが、第59号住居址から４点出土した長さ15cm前後の河原石が調査地東隅より10点採集されている。その他鉄製刀子が１点出土している。　（矢口忠良）



Ⅰ 茶褐色砂層
Ⅱ 黄褐色砂層
Ⅲ 黒褐色粘質土（焼土・炭化物含）
Ⅳ Ⅲに黄色土まじり
Ⅴ 黒色粘質土層
Ⅵ 灰黒色土層（灰混り）
Ⅶ 黄褐色粘土層
Ⅷ 灰褐色粘質土層
Ⅸ 茶色粘質土層
Ⅹ 灰黒色粘質土層（炭化物を含む）
Ⅺ 黒色粘質土層
Ⅻ 黄色粘質土層
XIII 黄褐色粘質土層

0

第62図　調査地西端土層図（第86号住居址付近）

第3章　結　　語

3ヵ年3次に亘って約2200㎡を調査し、その日数47日を要した。調査地内は隙間のない程、あるものは重複関係をもちながら弥生時代中期から平安時代後期の遺構が密集する。

第1～3次調査で住居址86軒・建物址3軒・柱穴群3ヶ所・土坑7基・方形周溝墓1基・溝址5ヶ所及び井戸址4基の多様種類の遺構を検出し、このうち今回の調査では住居址番号59～86の27軒・建物址3軒・柱穴群1ヵ所・溝址4ヶ所・井戸址4基を確認検出した。

以上の調査結果をもとに時代別に瞥見し、理解している範囲で問題点を整理してみたい。尚第1・2次調査の結果は長野市の埋蔵文化財第4・5集に報告書として提示してあるので参照にされたい。(註1)

縄文時代　今回の調査で包含層から口縁部に2条の沈線がめぐる晩期に編年されるであろう粗製の深鉢形土器片が1点のみ出土している。外縁の磨耗がほとんどない点、又周辺の遺跡から少量ながら出土例があるので、この時期に小規模な遺跡が存在した可能性がある。(註2)

弥生時代　第1次調査で第14・28・29・30号住居址の4軒、土坑1～3の3基を、第2次調査で第43・55～58号住居址の5軒、方形周溝墓1基、溝址1ヶ所、土坑5～7の3基を、今回の調査で第68・79・82～84号住居址の5軒、溝2の1ヶ所を検出した。

このうち土器等から中期に編年されるものは、第14・29・30・43・57・58住居址の6軒、土坑1・3・4の3基及び方形周溝墓、溝址1・2の2ヶ所が該期にあたると思われる。

遺物からみると第14・29・30号住居址に懸垂横帯文・列点文及び磨消縄文を用いた横帯区画文等文様に古い要素を残す土器を伴う住居址で、他のものより先行すると考えている。ただ第14・56・57号住居址の拓影の中に後出の遺物が数点混入している。まぎれ込みであろう。他の遺構のものは、受口口縁壺形土器には縄文地に山形沈線文が施され、甕形土器も同様であり、単純に外開するものは端部が面取りされその上に縄文又は箆による連続刺突文的押引きが施こされるものが一般的である。頚部文様は横走する太い沈線を基調とし、その間を押引文とが先行する古い要素をもつ縄文及び隆帯文が用いられる。前記した遺構・遺物と接続する関係にあるものと考えられる。甕形土器は口縁部が強く外開し、最大径がこの部にあり、体部は後述するものより直線的になるものと、頚部が立ち上がった後緩く短かく外開する口縁部になり、肩部がいくぶん張って体部下半は丸味をもって底部に接続する2形態ある。後者は最大径が体部中位にあり、砲弾形態になるものである。口縁部の文様は壺形土器の項で述べたとおり、前・後者共通しているが、前者の頚部以下の施文は櫛描波状文、それを縦に切るT字状文がある。この

施文上端にボタン状貼付文が付される例外的なものを除いて、前記したものが一般的な文様構成である。後者にはこれらの文様が用いられず箆描きによる列点文と右下がりの斜行条線及び平行沈線文によって施文される方法で、これはたぶんこの時期特有のものと考えられ、南信の北原式土器との関係を思わせる重要な資料である。(註3) 施文においてこの時期の櫛描文は回転への指向を目ざし、箆描文はそれを念頭におきながら回転に不向きな大形器形（壺）の施文へと文様分化したものと考えている。それ故これがやがて、壺形土器の頸部文様帯を規制する重要な要素になってくると思われる。この他第58号住居址の炉に用いられていた壺形土器は、頸部から体部上半のものであるが、ハ又はX字文を基点に粗く浅い箆描きにより、三角文あるいは菱形文を意図しているように思え、その系譜は畿内の木葉文を模していると考えるのはどうであろうか。本地において器形・文様構成において新知見のものである。石器には太形蛤刃のほぼ完形を含め断片を包含層より得ているが、完形のものは第85号住居址のもの1点がある。これは敲打器としての再利用されたもので、本来的な利器としてのあり方と異なっている点注目したい。(註4) これに反し磨製石包丁は住居址出土のものが多い点注目され、その用途が生産地における生産物と密接に関与するということに帰結されることを物語っている。生産物とは従来の説のとおり水稲栽培を考えている。しかしこれが普遍的に各住居址遺構から見られなく、5点中3点が第57住居址から出土した点、栽培管理の集約がここにあったのではないかと考えている。

遺構については、後出の遺構と重複関係及び調査外にかかるものが多く、全容を知りうるものはないが、その形態は長方形状を呈するものと推察される。これらの遺構から柱穴は確認できなかったが、徳間遺跡にみられるように4個方形配列が想定される。(註5) 床面は平坦で軟弱であるが、次期に比定されるものも含まれるが、住居址内に土坑を内包し、その上部が貼り床されるという特色がある。炉は住居址中央よりに主軸線に沿って奥まった柱穴間より内側にあり、その形態は地床炉である。しかし第58号住居址のように、その上に土器を設置するという形態に注目される。このあり方はこれより後出である水内坐一元神社遺跡第4号住居址に認められている。(註6) 土坑は住居址内又はそれに関与する位置にあることは先に触れたところであるが、その形態は整っており、覆土には炭化した植物の灰が泥炭化して詰っており、その性格を墓坑として理解を求めたいが、その土質において、アルカリ物質は残存する可能性があるのにその痕跡は土層においても確認できなかった。むしろ籾・雑穀類は壺形土器へ、これにたいし芋類をはじめとする根菜類を保存するためこのような施設が必要ではなかったかと考えている。次に方形周溝墓をはじめとする溝址のあり方の問題である。方形周溝墓は午王堂山Ⅱ形態の全周する溝の北辺中央部に陸橋部を有するものであるが、ここで問題になるのはその立地と関連遺構との関係である。県内において伊那谷では河岸段丘上に、千曲川水系でもやはり河岸段丘的な扇状地端部等に位置し、初源的古墳との関係から水田等の生産地を見下す地点にあるのが一般的位置と考えられている。(註8) ところがこの遺構が存在する場所は自然提防上で、それも生活遺構内に存するという点で、首長者層墓のあり方を考えるに重要なことを示唆しているように思える。即ち墓域を形成する初源的なもので、溝と主体部の掘り込みはその深さおいて大差なく浅いものであり、そ

れ故にそれ程の土盛が想定できないということである。また墓の立地的変遷で、この自然提防上で確立された墓形態が序々に変化しながら特異の位置を占めるようになり、やがて墓域変移がありこの地では山頂の前方後円墳である川柳将軍塚へとの動きが想定される。(註9) この他直線的な溝址1と今回の調査で検出した半円形に近い隅丸方形とも受け取れる溝址2も、遺構両端が明確であることと、掘り込みがしっかりしてい、溝址2には完形に近い壺形土器が正位の状態で出土したことからやはり方形周溝墓の変形と理解しているがいかがなものであろうか。これは先に記したこの墓址の変遷にかかわる問題を内包しているということである。

弥生後期初頭の吉田式期にあたるものとして第28・55・68・82〜84号住居址、土坑5・7をあてることができる。この期の土器は壺形土器の形態が前代のものに比べ、最大径の位置が上がり体部下半がこける器形が出現する点大きな相異を有し、この形態がやがて箱清水式期の無花果形壺形土器に発展していくことは確かなことであろうと思う。文様帯は頚部及び口縁部に限られ、これもまた箱清水式期への移行をうかがわせるが、肩部に前代様の数条の平行沈線文が残る。特色的施文とし箆先による鋭く浅い平行条線文またはその内側を斜行条線文で埋め、その下に加飾される内を斜行条線で充鎮する鋸歯文である。この施文の流れは北原・恒川式土器に想定でき、鋸歯文は歯の方向が逆になるが施文方法等に類似点が認められる点注目される。(註10) 口縁部が受口状のものには相対する斜行条線文・鋸歯文及び波状文が施され赤色塗彩されるものが多くなる。甕形土器も前代と比べ口縁部が受口状になり、肩部が張る器形が多くなる。文様はすべて頚部を中心に櫛描波状文になり、それは振巾・波長とも細かく、左回転で、右上りのていねいな仕上がりを呈する。この他高坏・浅鉢・蓋形土器があり、蓋形土器を除き赤色塗彩されるものが増加する。(註11) 住居址形態は方形に近い傾向を呈し、柱穴はこの期より明確になり各隅近くに4個方形配列を基本としていると思われるが、不整形を呈する。床面は堅緻である。またこの期の特色遺構として炉のあり方が上げられる。炉は柱穴中間の内側に設けられ、その形態は地床炉であるが、第28号では浅鉢、第82・84号で壺体部下半が埋め込まれ、第82号ではその上部に石囲がある点である。というのは伊那谷において北原式期から座光寺原式期・中島式期に普偏的に認められる埋甕炉とは若干趣きを異にしているということである。(註12) 伊那谷はそのほんどが口縁部をはじめその付近を生かしながら体部下半まで埋め込まれた形態が多いのにたいし、千曲川水系では土器を炉に使用することはないとの考え方が一般であったが本調査地から前記した遺構が確認され、甕形土器が使用されなく浅鉢形を呈する器形を意識し選定していることである。調査結果から時期を追うといまのところ第58号にその初源をみることができ、徳間遺跡の第1号住居址にもみられ、該期と併行する水内坐一元神社遺跡では埋め込まれていないが壺形土器頚部以上が炉として使用されている。(註13) 千曲川水系地域では土器を使用する炉の系譜は今のところ伊那谷と併行し、弥生中期に求められ、その展開は該期に隆盛を求められる。後の箱清水式期では舟底状ピット及び若干であるが縁石（枕石）を有するものになる。今のところ調査報告書では、伊那谷にその展開が顕著なものであるが、その初源は県下では早い位置にあり、その空間的広がりに問題を有している。

これらの展開に比べ弥生時代爛熟期の箱清水式期の遺構が、それも後葉の第79号住居址1軒確認されたのみで、興味あるあり方を示している。あれだけ豪華な器種と量と赤色塗彩され、ト占という祭祀形態を持ち広い分布圏を形成するこの文化のものが何故検出されなかったかいう点である。(註14) ただプールの造成時には完形品を含む夥しい量の土器が出土したと伝えられるが、学校の統廃合により今では幻の土器となっているのは残念である。この結果を重視すれば地点的集中地からはずれていたと結論づけられようが、そんなに単純なものであろうか、今後の調査に期待したい。唯一の遺構は第82号住居址からの動きの中にその系譜が認められるようで、プランが隅丸長方形を呈し、4本柱方形配列の柱穴がある。炉は柱穴中央付近にあるも、その位置が短軸方向にあるのは特異である。出土遺物は少なく、その様相は知り得ないが、飾玉様磨石が2点出土した。何に使用されたのであろうか。(註15)

古墳時代　前期初頭の弥生式的要素を強く残すものに今回検出した第85号住居址をあてることができる。ただ出土遺物量が少なく、全容が判明しないのが残念であるが、その特色的なものに器台形土器と第82号住居址付近の包含層出土のS字状口縁甕形土器片をあげることができる。後者は伴出資料がないのは残念であるが、弥生式文化を解体させる要素的土器と目されている資料で県下において北限的位置にある。この破片は肩部以上のもので、口縁部が大きく外開する新しい要素をもつBタイプの土器で、肩の刷毛目も雑になる傾向になる。また器台形土器は赤色塗彩され、脚部に3円孔がうがたれるという、前代の整形技法と新たな器種が融合する所に特色があり、この期及びそれに接続すると思われる。資料は御屋敷遺跡Y－1号住居址、四ツ屋遺跡第9・12・13号住居址・溝址12、篠ノ井遺跡群第15・29・30号住居址・方形周溝墓及び下条灰塚遺跡等に認められ、この内容は理解されつつあるが本格的解明はこれからというところである。(註16) ちなみに今回の調査で確認した前記した住居址プランは方形を意識した不整形なもので、その壁に沿って柱穴も不整形に4本配列される。炉は弥生期のものと同位置・同形のものである。やはりこの形態の流れは隅丸長方形から方形への移行を思わせる。またこの遺構から出土した太形蛤刃石斧は敲打器として使用され、本来の用途的意味を失っている点おもしろい事例である。

この期に続く資料として第2次調査で得た全国的に斉一性を有する善光寺平第Ⅰ様式（五領Ⅱ期併行）の壺・器台・坩形土器が出土してい、祭祀的臭いが強いセットであるが、遺構が明確でないのは残念である。この期の土器は川柳将軍塚等の前期的古墳の母胎になるものの指標と考えられるので、もっと普遍的に認められても良いと思うのだが、近くで遺構を伴う資料としては水内坐一元神社遺跡第2号住居址しか知らない。

この問題は次期の善光寺平第Ⅱ様式（和泉期併行）にもいえることである。調査ではこの期のものは確認することがなく、中郷神社前方後円墳をはじめとする中期後葉の古墳を考える時、この好条件下の本調査地にどうしてその痕跡を残していないのであろうか、そして近辺の遺跡でも明確になっていない点気になるあり方を示している。(註17) ただ駒沢祭祀遺跡・中村遺跡・大口フ遺跡等の祭祀遺跡から多量の土器が集積されている点等これからの調査結果を期待する要素

を含んでいる。(註18)

古墳時代後期になると爆発的展開を示すようになり、第1～3・9・15・19～21・24～26号（第1次）、第33・36～41・43・46・47・51～54(第2次)を検出し、今回の調査で第59・69～72・77・80号住居址の総計28軒を確認し、住居址総確認数の約3分の1にあたる。出土遺物は甕形土器が長胴形態のものが多くなり、又高坏形土器の坏部・脚部の稜があまくなる傾向がうかがえる。坏形土器も球形を呈する椀形のものが少なくなり、丸底的な扁平なものに移行するものと須恵器の影響を受け口縁部が体部から明瞭に外開するものや直立的になるものが多く、それも内面黒色処理されるものが主流を占めるようになる。須恵器の住居址からの出土例も増え、第15号でⅡ期の坏、第16号で同期蓋、第36号でⅢ期瑞、第59号で同期坩・台付コップ形土器、第60号で同期坏が出土している。これらをもとに遺構をあえて時期別に分けるとⅠ期を第19・20・33・41号住居址にあて、他はⅡ期に比定され得ようが、両者の間にそれ程の時間差はみうけられない。(註19)該期の遺物でみるべきものは第33号住居址出土の一括土器に代表される。これらはカマド及び床面直上からのもので、煮沸・貯蔵形態のものでは長胴の甕形土器4個出土しており、これには近頃出土例が増加している刷毛整形後水濾し粘土を体部外面に塗りつけるという再調整が施される。水漏れ防止のためであろうか、器肉が厚くなり煮沸の場合熱効率が悪くなると考えるのだが、理解に苦しむ。(註20)この他小形の断面三角形の甑形土器・甕形土器があり、特異な器形で、第59・71号住居址から出土した把手付大形甑形態で平底の甕形土器がある。これは把手付甑形土器の範疇に入るものと考えてい、特色ある土器だけに、時期を確定する一つの要素になろうかとも考えている。(註21)供膳・供献形態のものは意外と少なく、坏・高坏形土器が各2点出土しているにすぎないが、前記した器種とともに今後編年上問題にされるべき一括資料になると考えている。

住居址形態は第41号住居址の一辺7m前後のものを最大に、5～6m代のものが一般的であるが、第20・21・25・80号住居址のように3m代の規模のものもある。プランは方形に近い隅丸方形を呈するものが多い。カマドは北壁あるいは西壁中央付近に限られて構築される点注意される。風の方向等環境的なものより、時間差あるいは集落内の規制と考えた方がよさそうである。その形態は粘土製両袖形のもので、住居址規模の規制により比例的規模になるようである。袖部には石が据えられるものを普通とするが、第71号住居址では甕形土器を逆位に埋込まれている点特異なあり方を呈する。中央に支石が用いられるのが一般的である。袖部前面の特殊な遺構として、火災防止のためか、第1住居址に甕形土器を2個重ねた、第54号住居址には扁平な石をカマド前面に立てた遮蔽遺構がある。(註22)煙道は壁外に延びるU字形になる。主柱穴は4本方形配列で、床面は平担であるが、つき堅められなく軟弱である。周溝は第77号住居址に認められたのみで普偏化していない。

奈良時代　遺構は第1次の第10・16・22号住居址、第2次の第34・38～40・45・48・49号住居址、第3次の60・61・65・67・76・81号住居址及び確たる資料がないのであるが、意外と前記した住居址を避けている点を重視し、柱穴群・第1～3号建物址をあてる。尚この時期の判

別は須恵器の技法差によっていることをおことわりしておく。

これらの遺構の確認は集落址で、私の知る限りでは駒沢三才田子遺跡、県町遺跡、調査中である恒川遺跡ぐらいのもので、その内容はほとんど知られていない。多分に官衙・寺院等の行政・文化の中心にまとまって存在するものと考えられる故、本調査地も後述する遺構遺物からこの性格にあてはまるものと思っている。(註23)

時代を決した遺物は第48号住居址のものに代表される。ここで注意されるのはカマドを中心にその壁よりにあることは、前代と同じあり方を示すのであるが、その内容に著しい相違をみせる。煮沸用の甕形土器以外すべて須恵器であるという点で、蓋・坏・高坏・甕形土器等の器種がある。他の住居址でもこの傾向が認められ、ちなみにこの時期より須恵器生産の展開をみせ、須恵器の大量使用をうかがわせるのであるが、これは一般的傾向であろうか、それとも特別な遺跡に限られた現象であろうか、この問題は他遺跡からの資料の増加を待って検討したいと思っている。蓋形土器は扁平な天井部とつまみに特色があり、又口径にも大小等の多様性があり、このうち大きいものは19cm代を測る口径になる。坏形土器は体部が内弯形になるものと直線的で口縁部が外反する器形の2種あり、後者には底部外縁付近に外開する高台が付され、これの口径は他のものより大きく、浅い感じになり、一見皿形を呈す。底部は篦により切離及び再整形され丸味を有する。また量的に少ないが普遍的に高坏形土器が出土することもこの時期の特色の1つに上げられよう。甕形土器は大形のもので完形品がないのは、頑丈であったことと水甕としての性格から持ち移りされたものと推察している。外面に叩き目を、内面に青海波文を残す。土師器甕形土器は遺構数の割にはみるべきものが少なく、この住居址出土のものから判断すると、口縁部が短かくわずかに外反し立ち上がり気味になり、体部の丸味はなくなり直線的な器形を呈し、しばしば最大径が口縁端部にあるものが多い。(註24) 整形は刷毛が多用される。この他坏形土器は底径及び口径が大きく、一見皿形のものが目立ち内面黒色処理されるものも多い。やはり底部はヘラにより調整されている。(註25) 遺構は該期に比定する年代が短かいためか第60号と第67号が重複関係あるのみで、他は調査地全面に散在する。プランは規模に大小があり、長方形に近い隅丸方形を呈するようであるが一様でない。カマドの位置も東壁に設けられるもの（第34・40・61・65号）、北壁のもの（第16・61・81号）、西壁にあるもの（第22・48・60・67号）等統一性がくずれ、またその形態も明確に検出確認されたもので、粘土製両袖形のもの（第48・49・60号）、壁外に張り出す状態になるもの（第34・40・67・81号）、地床炉的なもの（第10・38・39号）がある。どのような背景のもとに前代より多様性をもつようになるのだろうか。(註26)

住居址の特色的なものに第22号住居址がある。この住居址は東西軸 7.0m ・南北軸 6.5m の大形で方形プランを呈すもので、各壁下に楕円形の自然石がカマド推定地を除き内側が直線になるように直列に並べられている。壁との間は周溝状になる。このような該期の遺構は恒川遺跡で確認されているがその性格はいまだに不明である。ただこの住居址はカマドが作られず、推定地に焼土が散在するところをみればいまだ県下では確認されていないが、移動可能なカマ

ドが想定され、またこの住居址のみ柱穴間内は堅くつき固められている点から何か特殊な使用があったことが想定される。今後の調査に期待したい。尚柱穴は各壁隅部による傾向があり、四本方形配列になるが、確認されないものが多くなる。

柱穴群は各次の調査で確認されたのであるが、柱列としてとおるものがなく、柱穴として認められる他その性格は不明である。ただ第1次調査で、遺構確認中に「専司」と刻字された須恵器坏形土器底部片を2点得た。何を意味しているのか、不勉強のため未だに理解できないままでいる。「司」は国司・郡司等の役職あるいは役所を代弁する語として理解している。それでは「専」とは何であろうか。調査時の調べのままで申し訳けないのであるが、中国の唐代の呼び方をここに提示するのもまた無恥の上塗りと思うが、解釈の手だてとして「船司控」をあえてとりあげ、注目したい。(註27)「専」を「船」への読み替えには無理かもしれないが、地理的環境でも触れたとおり、この地は水系を利した河川運搬の要地あるいは要地に近いところと理解される。即ち、縦谷を形成しながら蛇行してきた千曲川は本地上流から沖積地をつくり出すのであるが、主として犀川の押し出しによる堆積により流路を東へ大きく変える転換地にあるということである。渓流的なものから緩流的なものへの移行的位置にあるということである。それ故に船による運搬を重視している訳でこれにかかわる役所（職）を想定するのである。いささか我田引水型論理であるが、こと程さように河川運搬の要地であったことは変りないように思う。又その刻字は達筆であり、焼成前に書かれたもので、須恵器坏形土器の底部であるという点を重視すれば、移出先の決まった特注品とみている。(註28)この点もまた大方の御教示を願っている。

また柱穴群と違ったあり方を示す第1～3号建物址を確認した。それはある程度直列の柱列を有し、柱穴が一定で、対する柱穴を有する点である。これから記す遺構は今回の調査で初めて確認されたもので、第1号は柱列がいくぶん不整形であるが1間3間、第2・3号は2間3間の建物址を想定できる。これらは円形の掘り方を呈するものであり、その南側に展開する方形の掘り方を想定する時、柱穴群を含めるには問題が残るところであるが、これを含め、円形の掘り方はその規模・配列から倉庫址と思われ、方形のものは正に居住的な要素をもったものと考えている。(註29)

平安時代　住居址は第1次調査で第4・5・8・11～13・17・18・23号、第2次で第31・35号住居址、今回の調査で第62～64・66・72・74・75・78号住居址を確認した。この期のあり方の特色として、第4と5・8と11～13と31号が重複しているように重複関係を有する遺構が増加し、それも調査地東側により密集度がある。ちなみにこの結果は第2次調査において第35号の1軒を確認し、今回の調査では散在するあり方を示すことにより理解される。

この時期を特色づける遺物としては、技法的に前代と比べ、より一層ロクロによる成・整形が顕著になる点である。水引き技法はロクロ台上より器体の切離を糸によっているところに特色があり、これは土師器・須恵器とも一致している。大形の甕形土器の体部より上半はこの整形が施され、下半はタテヘラケズリがなされ、器肉を薄くする点に特色がある。この手法が用いられた本遺跡の主流を占める初期の坏形土器は須恵器の体部が直線的になるのにたいし、土

師器は内弯的になり、内面黒色処理されるものが多く、製作者の違いと器形に求める規範的なものがあったと想像している。尚黒色処理技法は頂点を極め、光沢を帯びるものが増加し、放射状暗文とともに磨きもさえを見せる。これがやがて両外面を処理する方向に進むのであるが、本調査地では遺構に伴うものは確認されていない。(註30) 甕形土器の器形は口縁部に最大径あるいはそれに近い数値を有し、内弯気味に立ちあがり、頚部がくの字形を呈し、肩部が丸くなり、体部が集約する底部に丸味があるという点前代とは趣きを異にしている。そして器種はこれらに限られ、日常什器しか出土しない点この時期の社会相を反映しているものと考えられる。この他灰釉陶器が今回の調査で遺構を伴うものとして初めて検出された。第62・63号住居址のもので、それも椀形なものに限られ、出土量も少ない。(註31) やはり各時期毎の密集地の問題にいきつくであろうと考えられる。

遺構は先に述べたとおり散在的あり方を示すが、そのプランは第4・35に代表されるカマドを有する壁を短辺とし、対辺は長くなる台形を基本とするが、その多くは不整方形になる。規模は第66号住居址を最大とするが、一辺2～3m代の小規模なものが多くなり、また前代に引き続きその形態・方向性のくずれが著しくなり、任意的な感じさえ受ける。その背後には律令体制の崩壊による荘園化としての私領地の拡大と技術の拡散に伴う職能分化の進行を意味しているものと考えている。カマド構築位置も任意的あり方を示しているが、南壁のみには前代同様設けられていない。これは集落の規制というよりも自然的なものが大きく作用しているようである。調査で検出したものは前代に引き続き第11・17・23号住居址のように壁外に張り出すものの他は、住居址規模に応じ小形の粘土製両袖形を推定している。石芯製のものはない。(註32) 床面は平担で軟弱であるが、掘り込みは遺構確認面のなせるわざであろうか意外と深いものが多く、そして前代まで普遍的に認められていた柱穴が、全く確認されなくなって、その事例は圧倒的に多くなる。これらを考えるに高床建造物を想定しながら新たな建築法、即ち土台を有する小屋組が主流的なものになると考えている。それ故奈良時代の項で記した柱穴群・建物址の掘り方はこの時期のものではなかろうというもう一つの伏流がここにある。この建築法がやがてこれ以降の住居形態を変え、考古学的調査法によって確認されにくい要因になっていると考えている。(註33)

以上「思われる」「考えられる（ている）」「想定・推察している」等断定なき語記を多く用い、理解しにくい個所が多々あろうと思うが、これが私にとって精一杯の考察の姿であるので納得願いたい。この意味で偏見的な私見がままあろうと思うが、課題として序々に埋めていくつもりであり、また文献を参照させていただいた方々にはその意にそぐわない点があると思う。これにたいしお許し願いたいし、御叱責と御教示を願うものである。　（矢口忠良）

註

註1　長野市教育委員会『塩崎遺跡群―塩崎小学校地点遺跡の第1・2次調査報告書―』昭和53・54年

註２　一本木遺跡・伊勢宮遺跡がある。

磯崎正彦「長野県篠ノ井伊勢宮遺跡の古式弥生式土器」「信濃」Ⅲ・11巻６号所収　昭和34年

註３　高森町教育委員会『北原遺跡―弥生中期北原式土器とその石器群』昭和47年

註４　千曲川水系古代文化研究所（主幹森嶋稔）土曜ゼミナールで佐原真氏の「石斧論」を学ぶ中で、この石斧の機能を刃部の形態・破損状態から主として加工用の縦斧と考えている。

註５　「徳間遺跡」本書所収

註６　米山一政・小林孚『三輪小学校遺跡・付水内坐一元神社（柳原小学校）遺跡調査報告一』長野市の埋蔵文化財第７集長野市教育委員会編　昭和55年

大塚初重・井上裕弘「方形周溝墓の研究」「駿台史学」24号所収昭和44年

註７　午王堂山に先行する形態に南滋賀型・二本松４号型があるようであるが、本遺構は出土遺物から南滋賀型に次ぐ、弥生時代中期後葉に位置するもので古い部類に入り、この型態は以外と初源的なものに求めることができるかもしれない。

註８　宮坂光昭「方形周溝墓の研究と現状―長野県の場合―」『中部高地の考古学』長野県考古学会　昭和53年

全国的には自然提防の縁に構えられる例はみられることであるが、宮坂論文は古式古墳とのかかわり主として述べてい、所在地形位置をそのかかわりの中で追求されないのは、立地論をぬきにしたといえる点残念である。

註９　長野市教育委員会『篠ノ井遺跡群』長野市の埋蔵文化財第８集　昭和55年

この調査で大溝を有するものを１基検出され、北東隅の一部の確認ではあるが、自然堤防の先端に位置しており、この位置を新たな墓域に転換する素地を生み出す基と考えている。またこれらがつくられる程千曲川の濫水から避けられる安定した地でもあった訳である。

註10　註３と同じ

宮沢恒之「飯田市恒川遺跡」「長野県考古学会誌」第４号所収　昭和42年

註11　笹沢浩「箱清水土器発生に関する一試論」「信濃」Ⅲ．22巻11号所収　昭和44年

〃　「吉田式土器関する基準」青刷　昭和50年

註12　「北原遺跡」　前出註３

酒井幸則『高松原』長野県立飯田高校　昭和52年

長野県中央道遺跡調査会『長野県中央道遺跡調査―飯田その１』

等の中央道関係の報告書に顕著である。　昭和45～47年

註13　「徳間遺跡」前出註５「水内坐一元神社」前出註６

ただこの形態の炉を検出したはやい例は、昭和40年に桐原氏を担当者に調査した中条遺跡にあるようで、「炉の形態は一種の埋甕炉であり、弥生後期箱清水式土器の壺形土器

上半部を逆さに埋めて中で火をたいている」と報告されているが、使用された土器の実測図・炉址断面図が提示されていなく詳細は不明である。

丸山敞一郎「善光寺平南縁の自然提上の遺跡について」「信濃」Ⅲ・26巻第5号所収 昭和49年

註14　森嶋稔・笹沢浩等『生仁』長野県考古学会研究報告書7　昭和44年

長野市教育委員会「四ツ屋遺跡一第1～3次調査報告書」本書所収

註15　縄文時代より磨き用具に箆状工具を想定し、本報告書でもその工具のものと表現するが、光沢を有する土器をみるにつけ前記した工具での整形が可能であるかと疑問に思っている。むしろ海浜石と呼ばれる小円礫にその施工具として考えている故にこれらがそれにあたると考える。尚この施工具を求めるにあたり海のない本地では第3紀の海生動物の化石が採集される事例が示すとおりその採集は容易であったと理解される。

註16　千曲川水系古代文化研究所「御屋敷遺跡考」　昭和43年

「四ツ屋遺跡」　前出註14　　「篠ノ井遺跡群」　前出註9

岩崎卓也他『下条灰塚』更埴市教育委員会　昭和46年

註17　丸山敞一郎「善光寺平南域の古墳立地について」「信濃」Ⅲ・28巻4号所収　昭和51年

この報文でやはりこの点を問題している。

註18　森嶋稔「長野市駒沢新町遺跡調査略報」「信濃考古」17・18号所収

長野市教育委員会『中村遺跡一松代西条小学校地点の調査』長野市の埋蔵文化財第3集　昭和52年

これらは遺構を伴う資料として提示したが、長野市においては四ツ屋遺跡で、竹内三千代、小林秀夫氏等の報文にみられるとおり、典型的なものがある。尚『上水内郡誌』で駒沢祭祀遺跡を駒沢新町遺跡としているが、この調査地上部で昭和43年に調査し、その名称を使用しているので別記する必要がある。

註19　主として器形の変移の中で判別した。坏は本文で記したとおりであるが、指標として甕形土器体部の変遷を求めた。即ちくの字形の頚部と球形胴の甕形土器の器形変移に求め、その整形も、箆によるミガキ様手法から、刷毛整形が主流になり、その痕跡を明瞭に残こす傾向になる。

註20　この傾向が認められる土器は大形で、しかも刷毛整形されたものに限られ、体部上半から底部にかけ塗られていたようで、その部位のみ本来の整形痕を消し、ありのまま図示したのが虫食い状の実測図がそれにあたる。刷毛目を利用して接着効果を上げるが、二次的な整形ということで剝落も著しい。この手法をもちいた遺物は近頃調査した三輪遺跡（註6）田中沖遺跡でも類例が確認されてい、資料が増加する傾向にある。意外にこの手法は善光寺平において時期判別の指標になる可能性がある。

長野市教育委員会『田中沖遺跡一国道18号線篠ノ井バイパス緊急発掘調査』長野市の埋蔵文化財第7集　昭和55年

註21　この器形の土器は長野市内で浅川扇状地の縁に位置する古屋敷遺跡第４号住居址及び田中沖遺跡第24号住居址(註20)にその類例が求められ・まだまだ数が少なく断定は避けたいところであるがその展開のし方から本文のような結論に達した。

「古屋敷遺跡」昭和45年度に笹沢浩氏の指導のもとに長野市教育委員会が調査した。

註22　この遺構は三輪遺跡第６号住居址（註６）でも確認されている。

註23　米山一政「三才田子遺跡調査概報」「信濃考古」№22・28号所収　昭和42・44号

多胡駅館址に比定されている。

笹沢浩「長野市県町遺跡緊急発掘調査略報」「長野」第30号所収　昭和45年一蹄脚硯等出土し、官衙址と推定している。

小林正春「飯田市恒川遺跡調査概報」「信濃考古」　昭和53年所収

田中地籍において銀銭「和銅開珎」、蹄脚硯等が出土し、建物址が想定される遺構が検出され郡衙址と想定されている。

註24　笹沢浩氏はこの遺跡西の中央山地に展開する窯址群を聖高原東麓窯址群と称している。今のところその始源は松ノ山古窯にあるが、この後断絶し該期よりその展開をみるようになる。この期の土師器が周知されながら、意外と理解されていない。というのは善光寺平第Ⅲ様式の流れの中にそれを位置ずけていなく、奈良時代といえば、姿勢を整えるという姿が多々あったように思う。即ち庶民的生活遺構の中で、住居址プラン・カマド位置及び形態等の不統一性を再考する必要がある。

笹沢浩・原田勝美「長野県下出土の須恵器」「信濃」Ⅲ．26巻９・11号所収　昭和49年

註25　高台付着の端部位置よりヘラケズリによる再調整により底部が割り出すという形態が認められる。これはこの期の特色的なあり方を示していると同時に、須恵器製作にあたっての器体製作分化を考えている。

註26　律令体制下の意の向くままの方向はありえないが、調査結果ではその姿を示しているよう思う。即ち政治的規制により前代の地縁的・血縁的共同体の規制の解体を意味していると考えられる。またカマドで壁外に張り出す形態は次に述べる平安時代でも認められるところであるが、第22号住居址のそれとのあり方を吟味する必要がある。

註27　『讀史総覧』人物往来社　昭和41年

註28　岡田正彦「墨書・刻書土器小考」「信濃」Ⅳ．25巻４号所収　昭和48年

「焼成前箆状工具で刻書したものには粘土の盛上りがみられ……」という。ただこの論文は墨書と刻字のもつ性格を述べながらも、刻字須恵器にたいし、資料の不足のためか論究がなされないのはものたりない心地がしている。

註29　三才田子遺跡では、桁行４～５間・梁間２間の建物址３ヶ所以上確認され、県町遺跡では規模の明示はないが「掘立式建造物址３軒」と記している（註23と同じ）。ただ本遺跡のものと異なり、円形のものはない点注目される。

註30　この資料は増えつつある。器形は断面三角形の低い高台が付く皿形ののである。前出

註９・14

註31　東濃系のものが目立つが、白灰色胎土に緑色系の透明釉の猿投系のものもある。

註32　石芯、石組の典形的例として、杉の木平遺跡第２号住居址を上げるが、善光寺平においては普遍的でなく、ただ三輪小学校遺跡にその事例がみられる。

註33　民俗事例にみられるコロバシ床（転材）とも思えなく、高床建物址を模した土台的基礎材を有した小屋組を想定している。

参　考　文　献

本文の基調として次の文献を参考にした。

森嶋　稔「原始・古代」『更級埴科地方誌』第２巻　更級埴科地方誌刊行会（柳沢　勲）昭和53年

笹沢　浩「弥生時代・古墳時代一生活遺構」『長野県上水内郡誌歴史編』上水内郡誌編集会（岩崎由一）　昭和51年

第1表　出土図示土器一覧表

遺物番号	器種	法量(cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調 外面	内面	出状
第59号住居址（第3図）											
1	坏		12.3		中央部内弯・口縁部外反	ヨコヘラミガキ・刷毛ナデ・底部ヘラケズリ	小砂	良好	黄褐色	黄褐色	覆
2	〃	3.5	12.7	2.9	口縁直線的・平底	ロクロ成形・糸切り	〃	〃	青灰色	青灰色	〃
3	壺			3.5	高台付頸胴部内弯・頸部欠損	〃　・止糸切り	〃・石	〃	海老茶色	灰　色	〃
4	坏	6.1	10.0		口縁部内弯・丸底	ヘラナデ・ヘラミガキ内面黒色処理	〃・〃	不良	黒褐色	黒　色	〃
5	坩	11.3	8.1		短頸直立・丸底	〃　・タタキ・ナデ・指整形	〃	良好	青灰色	青灰色	〃
6	コップ		9.7		胴部より内弯・口唇部外反・脚付	ロクロ成形・装飾帯状沈線	〃・〃	〃	暗灰色	暗灰色	〃
7	甕	25.3	23.1	5.1	把手付・球形胴口縁外弯・上げ底	ヘラナデつけ・ヨコヘラナデ	〃〃	〃	茶褐色	黄褐色	床
第60号住居址（第5図）											
1	盤		19.2		口縁部外反・体部に稜	ロクロ成形・底部ヘラキリ	小砂・石	良好	黄灰色	黄灰色	床
2	坏	3.6	9.9		受部付・口縁内傾しつつ立ち上がる	〃　・〃	〃	〃	青灰色	青灰色	覆
3	蓋	3.2	15.2		口縁部垂下・扁平擬宝珠付	〃　・〃	〃	〃	暗灰色	黄灰色	床
第61号住居址（第7図）											
1	甕		19.5		口縁部外反・長胴	刷毛ナデ・ヨコナデ	小石	不良	灰褐色	黒褐色	覆
2	〃			7.5	平底	〃　・ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃	〃
3	〃			5.8	平底・体部球形	ロクロ成形・ヘラケズリ	〃	〃	〃	〃	〃
4	坏	3.7	13.8		口唇部やや外反・平底気味	〃　・〃	小砂	良好	青灰色	青灰色	〃
5	〃	4.0	13.5	6.0	〃　・平底	〃　・〃	小砂・石	〃	灰　色	乳灰色	〃
6	〃	4.4	13.9	6.4	〃　・〃		〃	〃	赤褐色	赤褐色	〃
7	〃	5.2	14.6		〃　・底部器厚	〃　・〃	〃・〃	〃	茶褐色	茶褐色	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調 外面	内面	出状
8	坏	3.3	16.4	11.2	口縁部外反・付高台	ロクロ成形・底部ヘラキリ	小石	不良	暗灰色	暗灰色	覆
第62号住居址（第9図）											
1	椀	4.9	17.6	8.0	口唇部外弯・付高台付	ロクロ成形・底部ヘラキリ	良選	良好	緑灰白色	緑灰白色	床
第63号住居址（第9図）											
2	坏	3.9	12.6	4.8	口唇部やや外反・底部上底	ロクロ成形・ヘラキリ・内黒暗文	良選	良好	黄褐色	黒　色	覆
第64号住居址（第9図）											
3	坏	4.5	12.8	5.4	口唇部やや外反・平底やや上底気味	ロクロ成形・内面黒色処理・暗文・糸切り	小砂・石	良好	黄褐色	黒　色	覆
4	〃	4.2	14.6	5.4	〃　・　〃	〃　・　〃　・　・　〃	〃	〃	灰褐色	〃	
第65号住居址（第9図）											
5	坏	4.9	13.4	4.0	口縁部外開	ロクロ成形・平行ヘラキリ	小砂	良好	黒緑色	灰白色	覆
6	甕	4.4	4.6	2.4	小形・坩形	口縁部輪積以下手捏・刷毛ナデ	〃	〃	褐　色	黒褐色	
第66号住居址（第14図）											
1	坏	6.2	16.6	8.0	体部内弯気味・口唇外反・底部上底	ロクロ成形・内面黒色処理・糸切り	小砂	良好	黄褐色	黒　色	覆
2	〃	4.3	13.0	7.9	口唇部やや外反・体部に稜・　〃	〃　・　〃　・　〃	〃	〃	乳褐色	〃	
3	〃		14.2		口唇部やや外反	〃　・　〃　・　〃	〃	〃	暗黄褐色	〃	
4	〃	4.7	12.3	5.6	体部内弯気味・口唇部やや外反・底部上底	〃　・　〃　・　〃	〃	〃	黄褐色	〃	
5	〃	4.2	12.7	5.2	口唇部やや外反・体下部内弯・　〃	〃　・　〃　・　〃	〃	〃	暗黄褐色	〃	
6	〃	4.6	13.4	6.1	〃　・平底・体下部内弯	〃　・　〃　・　〃	〃	〃	黄褐色	赤褐色	
7	甕		24.1		胴部やや張る長胴・頚部くの字・口縁部内弯	〃　・ヘラケズリ	〃	〃	灰褐色	褐　色	
8	〃		14.9		中形・球形胴	〃	〃	〃	黄褐色	黄褐色	

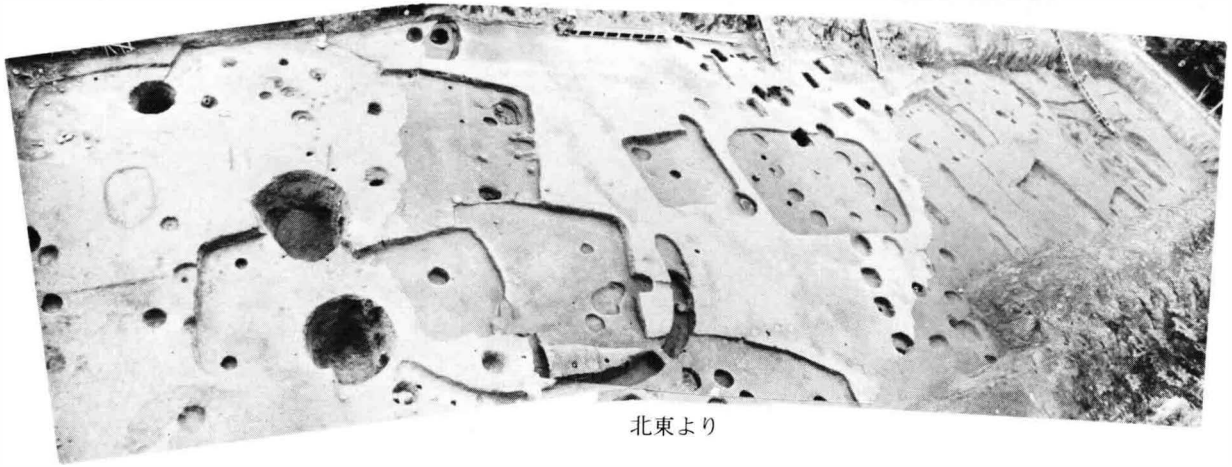
遺物番号	器種	法量(cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調 外面	内面	出土状
	第67号住居址（第16図）										
1	坏	4.1	13.3	6.3	坏形・体部直線的	ロクロ成形・糸切り	小砂	良好	暗灰褐色	暗灰褐色	覆
2	〃	3.6	12.9	6.5	椀形・上げ底	〃 ・ 〃	〃	〃	青灰色	青灰色	
3	〃	4.1	13.4	5.3	坏形・ 〃	〃 ・ 〃	小砂・石	〃	灰白色	灰白色	
4	〃	3.3	11.8	5.4	椀形	〃 ・ 〃	〃	〃	青灰色	青灰色	
5	甕	10.0	11.8	6.7	体部やや張る・口縁部外開	〃 ・ 〃	〃	不良	黒褐色	黒褐色	
6	坏		11.0		椀形・丸底	ヘラミガキ・内面黒色処理	〃	良好	灰褐色	黒 色	
7	〃	3.9	10.6	5.0	〃 ・上げ底	〃 ・ 〃	小砂	〃	〃	黒褐色	
8	〃		14.5		〃 ・丸底気味	〃 ・ 〃 ・ヘラキリ	〃	〃	橙褐色	黒 色	
9	〃	5.1	15.2	7.1	〃 ・平底	〃 ・ 〃 ・ 〃	〃	〃	黄褐色	〃	
10	〃	4.5	13.2	3.8	坏形・ 〃	ロクロ成形・ヘラキリ	小砂・石	〃	青灰色	灰白色	
11	〃	2.6	10.4		口縁部立ち上がる・底部凹凸がある	〃 ・ 〃	〃	〃	暗青灰色	青灰色	
12	〃	4.8	11.8		丸底気味・口縁部やや外開	〃 ・ 〃 ・ヨコナデ	〃	〃	〃	暗青灰色	
13	〃	4.8	11.5		椀形・丸底気味	〃 ・ 〃 ・ 〃	良選	〃	青黒色	青黒色	床
14	〃	4.3	11.5		体部に稜・口縁部直線的に外開	〃 ・ 〃	小砂	〃	青灰色	灰白色	
15	〃	4.2	12.1	5.3	坏形・体部口縁部直線的に外開	〃 ・ 〃	〃	〃	青灰色	青灰色	覆
16	〃	6.4	13.6	8.6	コップ状・体部直線的・付高台内弯	〃 ・ 〃 ・糸切り	〃	〃	暗青灰色	暗灰色	床
17	〃	4.4	15.2	10.8	体部に稜・底部が高台より張り出す付高台	ロクロ成形・ヨコナデ・ヘラキリ	小砂・石	〃	灰白色	暗灰白色	
18	高坏				脚部のみ・筒形・平行沈線	ヨコナデ	小砂	〃	〃	灰白色	覆
19	〃				〃 ・ラッパ状	ロクロ成形	小砂(小)	〃	〃	〃	

遺物番号	器種	法量(cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調 外面	内面	出状
	第71号住居址（第22・23図）										
1	甕	35.1	19.3	8.2	口縁部外反・長胴	刷毛ナデ・ヨコナデ	小砂・石(多)	良好	黄褐色	黄褐色	カ
2	〃		16.4		〃 ・ 〃 ・胴部直線的	〃 ・ 〃	〃	〃	〃	〃	〃
3	〃				〃 ・胴部直線的	〃 ・ヘラケズリ・ヨコナデ	〃	不良	〃	〃	〃
4	〃	24.5	21.9	7.7	胴部球形・一対の把手・上げ底	〃 ・ヘラケズリ	小砂	良好	〃	〃	貯
5	坏		12.6		椀形・丸底気味	ヘラミガキ・ヘラナデ	〃(少)	〃	橙褐色	橙褐色	床
6	〃	6.0	12.6	5.7	〃 ・平底	〃 ・内面黒色処理・ヘラケズリ	〃	〃	暗褐色	黒 色	〃
7	甑			4.6	底部のみ・1穿孔	ナデ	小砂・石	不良	灰褐色	黄褐色	〃
8	甕	11.9	11.5		小形・肩部が張る・短頸	〃 ・ 〃 ・ヨコナデ	小砂	〃	黄褐色	黒 色	〃
9	高坏			14.8	ラッパ状に裾部外開・脚部のみ	〃 ・指頭圧痕・ヘラミガキ	〃	良好	赤褐色		〃
	第72号住居址（第25図）										
1	甕		17.8		短頸・長胴の胴部やや張る	ヘラナデ・ヨコナデ	小砂・石	良好	赤褐色	赤褐色	覆
2	坏	6.5	10.9		体部やや内傾・口縁部外反	〃 〃	小砂	〃	〃	〃	〃
3	〃	4.9	12.4		体部に稜・口縁部「く」の字に外反	〃 ・内面黒色処理・十字暗文	〃	〃	〃	黒 色	〃
4	高坏				脚部のみ・裾部ラッパ状に外反	刷毛ナデ・ヘラミガキ	〃(少)	〃	橙褐色		床
	第73号住居址（第26図）										
1	坏		15.2		椀形	ロクロ成形・内面黒色処理	小砂	良好	黄褐色	黒 色	覆
2	〃	3.8	14.5	8.7	体部に段	〃 ・糸切り	〃(少)	〃	暗灰色	暗灰色	〃
3	甕		20.2		長胴・胴部やや張る・口縁部外反	〃 ・ヘラケズリ	小砂・石	〃	暗褐色	赤褐色	カ
4	〃		34.1		頚部口縁部のみ・大きく外反・口縁やや折り返し状	〃 ・輪積み痕・把手残る。	小砂(少)	〃	青灰色	青灰色	覆

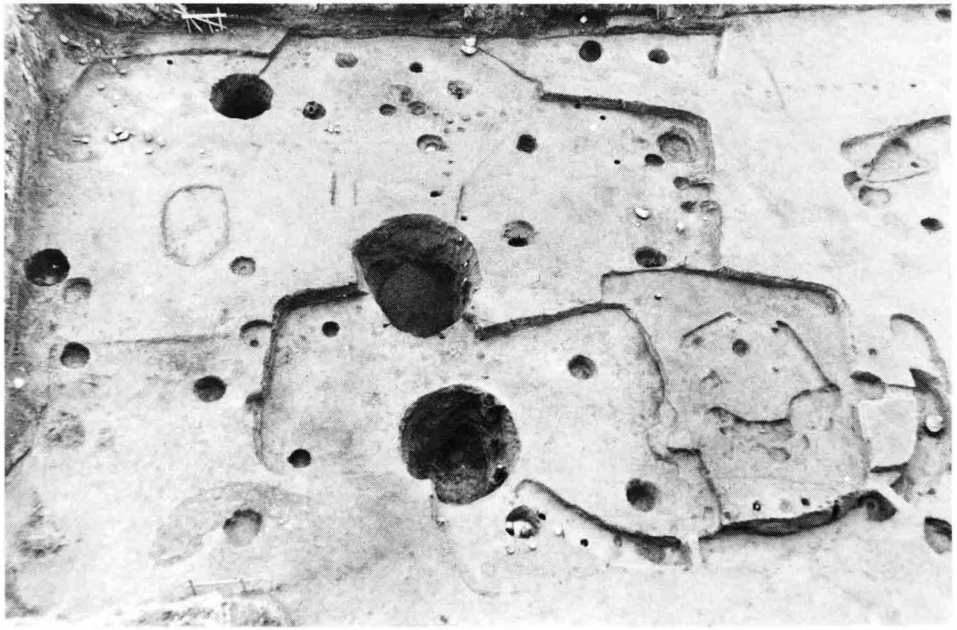
遺物番号	器種	法量(cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調 外面	内面	出
第75号住居址（第29図）											
1	坏	4.9	13.7	5.6	椀形	ロクロ成形・内面黒色処理・ヘラキリ	小砂	良好	灰白色	黒色	覆
2	〃		14.0		口縁部体部直線的	〃	〃	〃	青白色	青灰色	
3	〃		15.9		〃	〃	〃	〃	〃	〃	
第76号住居址（32図）											
1	坏		9.6		椀形	ロクロ成形	良選	良好	暗青灰色	暗青灰色	覆
2	〃	3.6	13.3	10.1	体部直線的・体部下端に稜・付高台外開	〃 ・ヘラキリ	〃	〃	青灰色	青灰色	
3	〃	3.8	14.2	10.4	〃 ・ 〃 ・ 〃	〃 ・ 〃	小砂	〃	〃	〃	
第77号住居址（第32図）											
4	甕		17.9		長胴・胴部やや張る・口縁部ゆるく外反	ヨコナデ・刷毛整形・輪積痕のナデツブシ・ヘラナデ	小砂・石	良好	赤褐色	黄褐色	外
第78号住居址（第32図）											
5	椀		12.9		椀形・口唇部外弯	ロクロ成形	小砂(少)	良好	灰白色	灰白色	覆
第81号住居址（第38図）											
1	坏	3.8	13.3	8.3	体部下方に稜・直線的に外開・付高台	ロクロ成形・ヘラキリ	小砂	良好	暗青灰色	暗青灰色	覆
2	甕		23.6		長胴・胴部直線的・口縁外反	ヨコナデ・刷毛整形	〃 ・石	不良	黒褐色	黄褐色	
3	〃		19.3		〃 ・ 〃 ・ 〃	〃 ・ヘラナデ・刷毛整形	〃 ・〃 (多)	良好	灰褐色	灰褐色	
第82号住居址（第41図）											
1	壺				頸部のみ	刷毛整形・ヘラミガキ・斜走沈線充塡鋸歯文	小砂・石 (多)	良好	黄褐色	橙色	
2	〃			9.0	胴下半のみ・胴部下半に最大径	〃 ・ 〃	〃 (〃)	〃	〃	暗褐色	
3	〃			9.6	胴部中央に最大径・頸部すぼむ	〃 ・ 〃 ・鋸歯文	〃	不良	〃	黒色	

遺物番号	器種	法量(cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調 外面	内面	出状
第84号住居址（第45図）											
1	高坏	17.4	24.6	9.6	坏部やや内弯しながら外開	ヘラミガキ・ヨコナデ・内外面赤色塗彩	小砂・石(多)	良好	赤色	赤色	柱
2	高坏?		18.3		坏部のみ・口縁立ち上がる	〃・〃・〃	小砂	〃	〃	〃	床
3	壺				胴部下半底部欠く・直線的に外開	〃・	〃	〃	赤褐色	暗褐色	炉
4	甕		19.3		口縁部内弯気味	〃・櫛描波状文・簾状文	小砂・石	〃	茶褐色	〃	床面
5	〃		20.6		〃	〃・〃・〃	〃	〃	黄褐色	黄褐色	〃
6	壺				頸部大きく外反しながら口縁部へ	〃・赤色塗彩痕・鋸歯文・貼付文	〃(多)	〃	〃	灰黒色	柱
7	〃		22.1		口縁部受口状、頸部すぼむ	〃・〃・〃・〃	〃	〃	褐色	黄褐色	〃
第85号住居址（第47図）											
1	甕			7.2	胴下部のみ・球形状	刷毛整形・ヘラケズリ・ヘラナデ	小砂・石	良好	黄褐色	黄褐色	覆
第86号住居址（第48図）											
1	坏	4.3	11.6	5.5	椀形・体部上半に稜	ロクロ成形・内面黒色処理・糸切り	小砂	良好	茶褐色	黒色	覆
2	甕	29.7	26.5	4.1	砲弾形・口縁外反	〃・ヘラケズリ	小砂・石	〃	〃	褐色	〃
井戸址 2（第55図）											
1	壺		10.7		短頸・胴部球形	ロクロ成形・ヘラケズリ	小砂・石	良好	黒褐色	灰白色	覆
2	甕		12.3		口縁部やや外反	ヘラミガキ・内面黒色処理	〃	〃	黄褐色	黒色	〃
3	蓋				宝珠つまみ扁平	ロクロ成形・ヘラ切り	小砂	〃	青黒色	青黒色	〃
井戸址 4（第55図）											
1	コップ		12.3		体部口縁部直線的外開	ロクロ成形	小砂(少)	良好	暗黒色	青灰色	覆
2	蓋			16.6	縁辺部のみ・端部やや外開	〃・ヘラ切り	〃	〃	青黒色	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 器高	口径	底径	形・態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調 外面	内面	出状
	溝址 2（第58図）										
1	甕	20.7	15.5	8.0	最大径胴部上半・口縁内弯ぎみに外開	ヨコナデ・口唇部に刻目斜行条痕・簾状文	小砂	良好	黒褐色	黒褐色	底
2	壺		7.0		頸部すぼむ・胴部「く」の字形に張る	〃 ・ 〃 櫛描羽条痕	〃	〃	赤褐色	暗褐色	
	その他出土土器（第60図）										
1	坏	4.0	13.9	7.4	椀形	ロクロ成形・糸切り	小砂	良好	灰色	灰色	包
2	〃	4.3	11.4	3.4	体部下端に稜・体部口縁部直線的	〃 ・ヘラキリ	〃	〃	黒褐色	青灰色	
3	〃	3.8	13.7	9.5	〃 ・付高台外反	〃 ・ヘラキリ	〃	〃	青灰色	〃	
4	甕		11.4		胴部やや張る・口縁部外反	〃 ・ヨコナデ	〃	〃	黄褐色	黄褐色	
5	椀		10.1		椀形・口唇部外反	〃	〃(少)	〃	灰白色	灰白色	
6	甕		14.5		口縁部S字状・胴部球形	ヨコナデ・ヘラナデ・刷毛ナデ	〃	〃	黒褐色	暗灰白色	



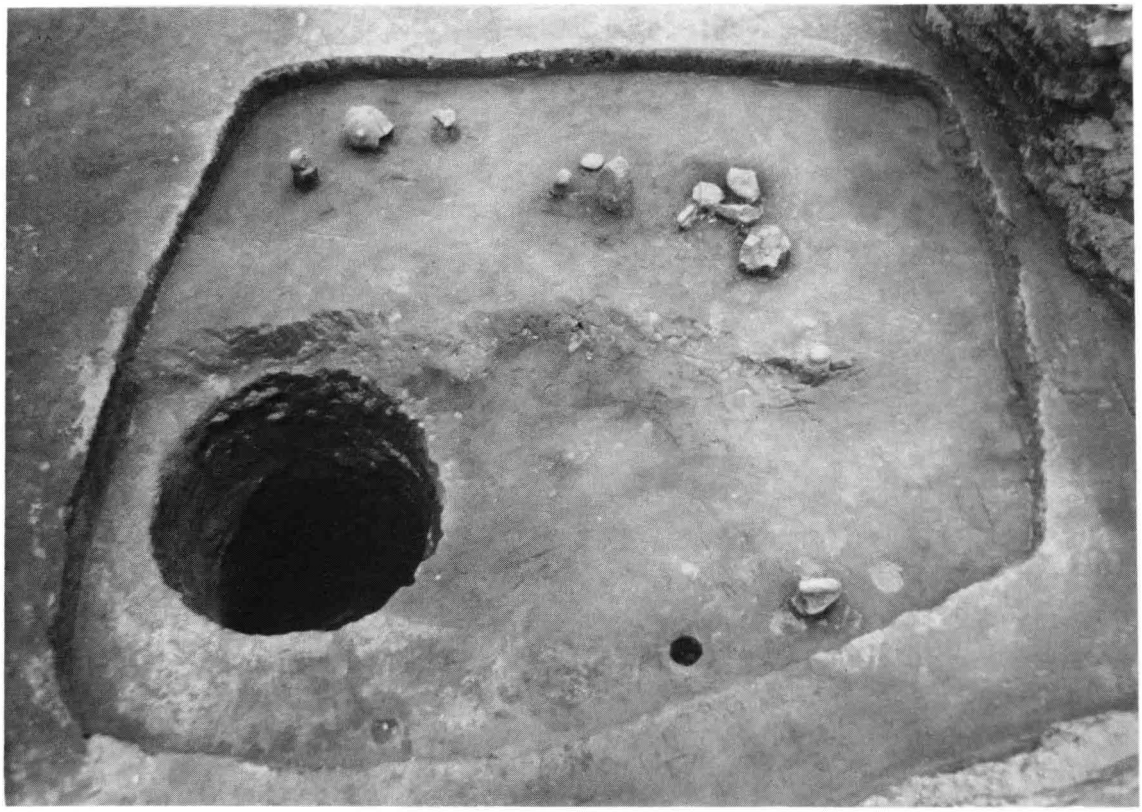
北東より



東側遺構群

第一図版

第二次調査遺構分布状態



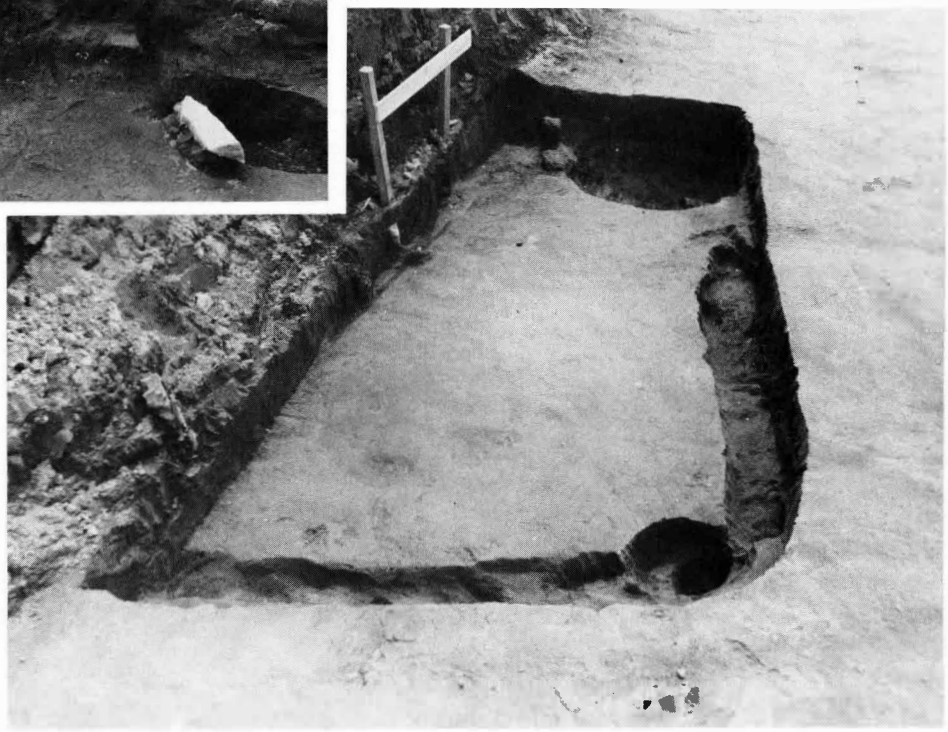
第59号住居址・井戸址 1

第60号住居址

第三図版　第六一・六三・七八号住居址

（上）第61・78住居址

（左）第61号住居址カマド



第63号住居址

（上）左より第64・76・80号住居址

（右）第65号住居址

第66号住居址

第五図版　六七・六八号住居址

第67号住居址

第68号住居址